

363
177



始



363-177



名
文
軌
範

大町桂月編著

水
野
書
店

大正
31
内交



序

此書題して名文軌範といふ。我が國文、汗牛充棟も雷ならざるが中に特に名文と思はるゝものを拔萃したるものなり。

名文軌範といふも、中には文章の妙なるよりは、事實の奇なるが爲に選ばざるを得ざりしもの、一二無きにしもあらず。

なるべく種々文體變りたるものを多く網羅せんとしたるが爲に、破格の文章にして、子弟の爲に如何と思はるゝものなきにしもあらねど格に入過ぎて文に力無きものよりは格を破りても却て筆に神あるものをとて、選びたるもあり。

1
文體の變りたるとは例せば、物語、日記、紀行、序文、跋文、謠曲、淨瑠璃、俳文、小説、書簡、隨筆、翻譯などに亘りたるをいふ。近路行者の「黒川源太主山に入つて道を得たる話」は支那小説今古奇觀中の莊子鼓盆成大道より出

でたるものにして、漢文の譯なるが、翻譯文の體を見んが爲に、殊更に選
びたるものなり。

此書に類するもの世に多く存す。それ等の書に選ばれたるものは可
及的再び選ぶまじし。しかも前出の書よりは名文のみにてあれかしとつ
とめたり。

名文として世にもてはやさるゝ貫之の古今集序、方丈記の下半、徒然
草のあだし野の露の條、花はさかり月はくまなきの條、八犬傳の富山の
條、芳流閣の條など漏らしたるは、即ち前にいへる如く前出の書に選
ばれたるを再び選ぶまじとつとめたる自然の結果なり。

名文としては疑をさしはさまるる事もやと思はるるものには、いさ
さか批點を加へたり。されどあながち其の批點の個所のみ名文なりと
の意にはあらず。前後相關聯して、はじめて批點の個所の如き妙所も案
出せられたるなりとの意を示さむとするなり。

送假名はすべて原本のままなれど、甚しく吾人の目ざはりともなる
ものは増減したること無きにしもあらず。

古書にして異本まち／＼のものは、甲を取りて乙を捨てたるもあり
乙を取りて甲を捨てたるもあり。

此書に選びたる文の、此書の類にしてはあまりに長編に失したるも
の無きにしもあらず。例せば源氏物語の發音の卷全篇を取りたる如き
これなり。されど此種の文は能く前後の關係を知り、首尾を對照しては
じめて其妙を悟る事を得べきものにして、妙の一字を解くが爲に法華
經幾萬の字數を要したるにも比すべしと思はるゝなり。

大正六年初夏

名文軌範目次

一	俊蔭の一節……………	『宇都保物語』
二	初音……………	紫式部
三	大堰川行幸和歌序……………	紀貫之
四	風は……………	清少納言
五	枕草子跋……………	
六	品賤しからぬ人妻を去りて後返り棲む物語……………	源隆國
七	人々友亡の事……………	西行法師
八	生死……………	道元禪師
九	身延山御書……………	日蓮聖人
一〇	栗栖野の庵……………	兼好法師
一一	飲酒の得失……………	

一二	廢帝……………	北畠親房
一三	爲朝の弓勢……………	『保元物語』
一四	常盤六波羅に參る事……………	『平治物語』
一五	紅葉……………	
一六	小原御幸……………	
一七	有王硫黄島に渡る事……………	『源平盛衰記』
一八	關東より勸修坊を召さる事……………	『義經記』
一九	曾我にて虎が名殘惜みし事……………	『曾我物語』
二〇	俊基朝臣再び關東下向……………	『太平記』
二一	長崎次郎高重最期合戦……………	
二二	結城入道地獄に墮る事……………	
二三	藤房入道鷹巢山にて讀經の事……………	松翁
二四	鶉飼 詠曲……………	作者不詳

二五	志賀 詠曲……………	
二六	三愛記……………	牡丹花宵柏
二七	かやくき……………	藤原惺窩
二八	妙壽院につかはす詞……………	長嘯子
二九	萬里江山石記……………	烏丸光廣
三〇	富士山……………	林羅山
三一	武田勝頼の最期……………	新井白石
三二	荒戸山……………	貝原益軒
三三	詩文の評品……………	室鳩巢
三四	惜むべしとおもふ事……………	雨森芳洲
三五	足るを知る……………	中井登菴
三六	花月雪……………	石原正明
三七	つかみさしの説……………	三浦梅園

三八	御嶽山……………	柳澤 淇園
三九	雨の徳……………	松平 定信
四〇	梅を請ひ得たる禮文……………	頼 山 陽
四一	『長町女腹切』の一節……………	近松門左衛門
四二	『博多小女郎浪枕』の一節……………	
四三	行末の寶船……………	井原 西鶴
四四	幼住庵の記……………	松尾 芭蕉
四五	裝遊稿……………	服部 嵐雪
四六	四季の景物……………	伊丹 鬼貫
四七	百花譜……………	森川 許六
四八	百鳥譜……………	各務 支考
四九	百蟲譜……………	横井 也有
五〇	鬼貫貧に迫る……………	建部 綾足

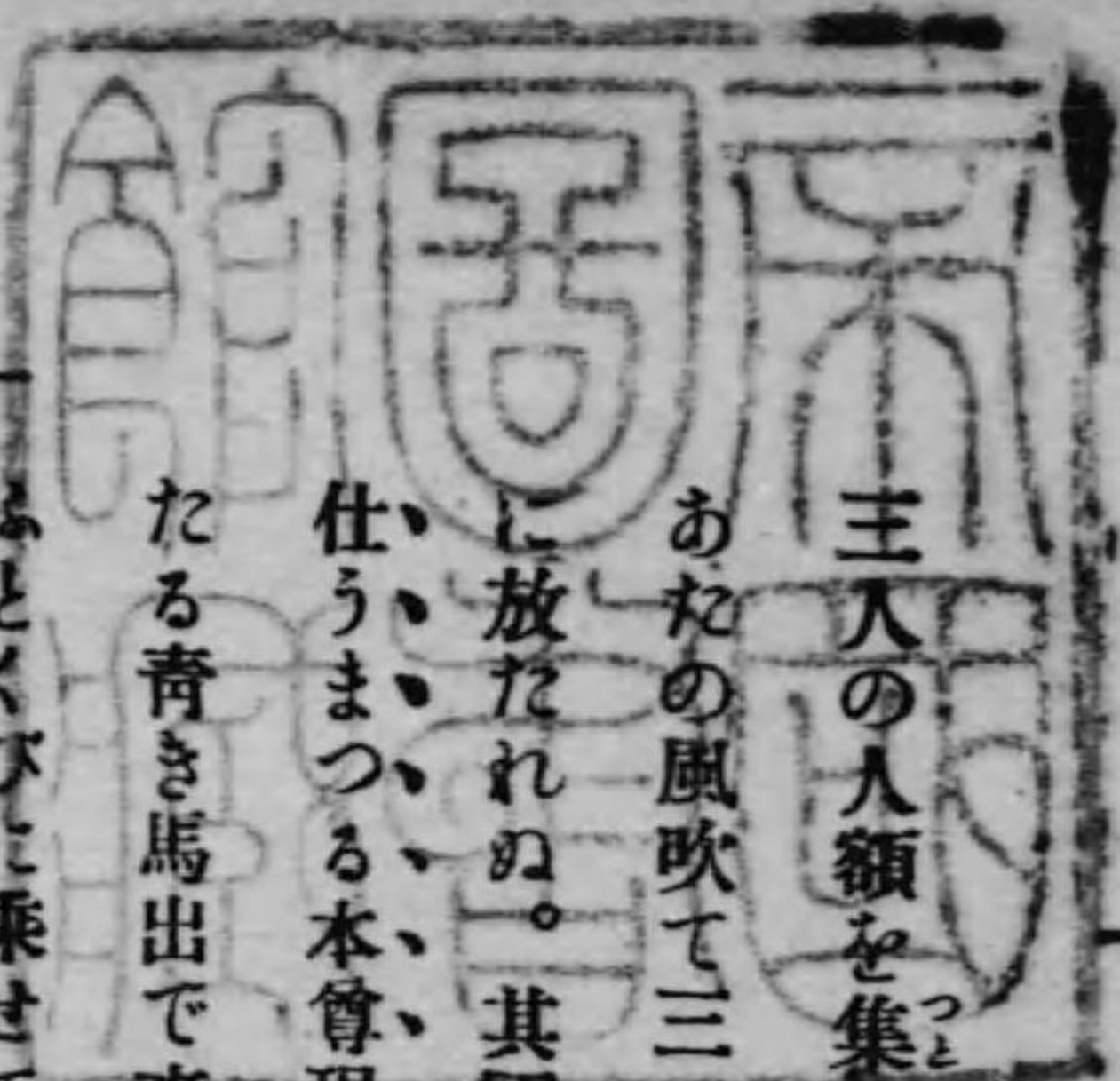
五一	姨捨山……………	
五二	黒川源太主山に入つて道を得たる話……………	都賀 庭鐘
五三	雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話……………	
五四	先の太后剃髮幽棲……………	
五五	青頭巾……………	上田 秋成
五六	劔の舞……………	
五七	佐渡わたり……………	橘 南 谿
五八	貧兒の至孝……………	曲亭 馬琴
五九	窮亡の誠忠……………	

名文軌範

大町桂月編著

俊陰の一節

「宇都保物語」



主人の人数を集めて涙を落して、出立て遂に舟に乗りぬ。唐土に至らんとする程に、あねの風吹て三つある舟二つは傷はれぬ。多くの人沈みぬる中に、俊陰が舟は波斯國に放たれぬ。其國の渚に打寄せられて、便りなく悲きに涙を流して、七歳より俊陰が仕うまつる本尊現れ給へと、観音の本誓を念じ奉るに、鳥獸だに見えぬ渚に、鞍置きたる青き馬出で来て、躍り上りて嘶く。俊陰七度伏拜むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふとくびに乗せて飛びに飛びて、清く涼しき林の栴檀の蔭に、虎の皮を敷きて三人並び居て琴を弾き遊ぶ所におろし置きて、馬は消え失せぬ。俊陰林の下に立てり。三人の人間ひて曰く、彼は何ぞの人ぞ。俊陰答ふ、日本の王の使清原の俊陰なり。有し様はかうくといふ時に、三人あはれ旅人にこそあなれ。暫し宿さんかしといひて、並

べたる木の蔭に同じき皮を敷きて居ぬ。俊蔭本の國なりし時も心に入れし物は琴なりしを、此三人の人たゞ琴をのみ弾く。されば添居て習ふに、一つの手残さず習ひ取りつ。花の露、紅葉の雫をなめてありふるに、明くる年の春より聞けば、此林より西に木を倒す斧の聲遙に聞こゆ。其時に俊蔭思ふほどは、遙なるを響きは高し、音高かるべき木かなと思ひて、琴を弾き文を頌して猶聞くに、三年此木の聲絶えず。年月の往くまゝに己が弾く琴の聲に響き通へり。俊蔭思ふ程に、こゝら四つの隅四つの面を見めぐらすに、此所より離れて山見えす、天地一つに見ゆるまで又世界なきよ、琴の音に通へる響きのするはいかなるぞ、此木のあらむ所尋ねて、いかで琴一つ作るばかり得んと思ひて、俊蔭三人の人に暇を乞ひて、斧の聲の聞ゆる方に疾き足を出だして強き力を勵みて海河峯谷を超えて、其年暮れぬ。又明くる年も暮れぬ。三年といふ年の春、大きな峯に登りて、見めぐらせば、いたゞき天に接きて峻しき山遙に見ゆ。俊蔭勇ましき心、早き足を出して行くに、からくして其山に至りて見渡せば、千丈の谷の底に根をさして、末は空に接き、枝は隣の國にさせる桐の木を倒して、わりこつく

る者あり。頭の髪を見れば劍を立てたるが如し。面を見れば焔をたけるが如し。足手を見れば鋤鎌の如し。眼を見れば金毬の如く見きて、いみじき女、翁、子共、孫など居て頭を集へて木を切りこなす。俊蔭、定めて知りつゝ我身は此山に亡ぼしつと思ふものから、幼き心をなして阿修羅の中に交りぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、汝は何の人ぞ。俊蔭答ふ、日本國王のつかひ清原の俊蔭、此山を尋ぬる事三年に成りぬ。今日を以てなむ此山を尋ね得たる。阿修羅怒れる形をいたして、汝何によりて阿修羅の萬劫の罪の半ば過ぐる迄、虎狼蟲けらと雖人のけちかきを邊に寄せず、山の邊に駈り來る獸は、阿修羅の食とせよと當てられたり。如何に思ひてか、人の身を受けて汝が此所に來れる。速に其由を申せと眼を車の輪の如くみくるべかして齒を劍の如くくひ出して怒る。俊蔭涙を流して答ふ、あなかしこ、此山を尋ぬること、烈しき巖焔出つる迄獸の烈しき中を分出る時は、ほむらは焔あつて劍はぎをつらぬき、悪を含むる毒蛇に向ひて、本の國より此國に至り、栖みし林より此山を尋ね、父母が手を別れし日より今日迄の事を答ふ。阿修羅、我等昔の犯し、罪の深さに依りて悪き身を受けたり。

しかあれば忍辱の心を思ふ輩にあらす。しかはあれども日本の國に忍辱の父母在りと申すに依りて、四十人の子共の悲しく、千人の眷族の悲しきに依りて汝が命を許し給ふ。汝速に罷り歸りて、阿修羅の爲に大般若を書きて供養せよ。汝日の本の父母に向ふべき便りを與へむと、いふ時に、俊蔭伏拜みて曰く、日本より山を尋ぬる大いなる心ばへは、父母が愛子として一生に一人子なり。親の顧みの厚く、慈悲の深かりしを捨て、國王の仰せのかしこかりしに依りて渡れり。其父母紅の涙を流して宣はく、汝不孝の子ならば親に永き歎あらせよ、孝の子ならば淺き思の淺きにあひむかへと宣ひき。さるを俊蔭あだの風大いなる波に遇ひて、多くの輩を亡ぼして、一人知らぬ世界に漂ひて年久くなりぬ。然れば不孝の人なり。此罪のまぬかれん爲に、倒さるゝ木の片端を給はりて、年頃らうせる父母に琴の聲を聞かせて、そのむくいと成さんといふ時に、阿修羅益々に怒りて曰く、汝がるゐだいの命を止めんととも、此木一寸を得べからず。其故は世の父母佛に成り給ひし日、あめわかみこ下りまして、三年掘れる谷に天女音聲樂をして植ゑし木なり。さて即ち天女宣はく、此木は阿修羅の萬劫の罪

半ば過ぎん世に、山より西にさしたる枝枯んものぞ、其時に倒して三分に分ちて、上の品は三寶より初め奉りて、切利天迄に及ぼさん、中の品は前の親に報い、下の品は行末の子共に報いんと宣ひし木なり。阿修羅を山守となされて、春は花園、秋は紅葉の林に天女下りまして遊び給ふ所なり。容易く來れる罪だにもあり。況や若干の年月なでおほし立つる萬劫の罪亡さん悪きさま、逃れんとてまもり作れるを、己が一分の徳分なし。何に依りてか、汝が一分當らむといひて、唯今食まんとする時に、大空搔暗がりて、車の輪の如くなる雨降り、雷鳴りひらめきて、龍に乗れる童黄金の札を阿修羅に取せて登りぬ。札を見れば、書ける事、三分の木の下の品は日本の衆生俊蔭に施すと書けり。阿修羅大きに驚きて、俊蔭を七度伏拜む。あなたふと、天女の子にこそおはしけれと尊びて曰く、此木の上下、上の品は大福德の木なり、一寸をもちて空しき土を叩くに、一萬恒沙の寶を出すべき木なり。下の品は、聲をもちてなん永き寶となるべきといひて、阿修羅木を取出でて、わりこ作る響きに、あめわかみこ下りまして、琴三十造りて昇り給ふ。かくて即ち音聲樂して天女下りまして

して漆塗りたなばた緒よりすげさせて昇りぬ。かくて三十の琴を造りて、俊蔭此林より西に當れる栴檀の林に移ろひて、此琴の音を試みんとて出立つ程に、旋風出で來て三十の琴を送る。其所にて音を試みるに、二十八は同じ聲なり。なかばを二つに造れるは、山頰れ地割裂けて七山一つに搖り合ふ。俊蔭清く涼しき林に一人詠めて琴の音の有る限り掻き立て、遊ぶに、三年といふ年の春、此山より西に當れる花園に移りて、琴ども竝べ置きて、大きな花の木の下に宿りて、我國の事、父母の事思ひ遣りつ、聲勝りたる二つの琴を試みるに、春の日の長閑なるに、山を見れば霞縁に、林を見れば木の芽煙りて、花園花盛りに面白く、照る日の午の時ばかりに、琴の音を掻立て、聲振立て、遊ぶ時に、大空に音聲樂して、紫の雲に乗れる天人七人連れて下り給ふ。俊蔭伏拜みて猶遊ぶ。下略

二 初

音

紫 式 部

年立ちかへるあしたの空の氣色名残無く曇らぬうらゝかげさには、數ならぬ垣根の内

だに雪間の草若やかに色づき初め、いつしかと氣色だつ霞に木の芽もうち煙り、おのづから人の心も暢びらかにぞ見ゆるかし。ましていとゞ玉を敷けるおまへは庭より始め見所多く、磨きまし給へる御方々の有様、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。春のおとゞのおまへ取り分きて梅の香も御簾の内の匂ひに吹きまがひて、生ける佛の御國と覺ゆ。さすがに打ち解けて安らかに住みなし給へり。侍ふ人々も若やかにすぐれたるを姫君の御方にと撰らせ給ひて、少し大人びたるかぎりなく、よし／＼しく装束有様より初めてめやすくもてつけて、此處彼處に群れ居つゝ齒固めの祝して、餅鏡をさへ取り寄せて、千年のかけにしるき年の内の祝事どもしてそばれあへるに、おとゞの君さしのぞき給へれば懐手ひきなほしつゝ、いとはしたなきのざかなとわびあへり。いとしたゝかなる自らの祝事どもかな。皆各々思ふ事の道々あらんかし。少し聞かせよや。われことぶきせむとうち笑ひ給へる御有様を年のはじめのさかえに見奉る。われはと思ひあがれる中將の君ぞかねてを見ゆるなどこそ鏡の影にも語らひ侍りつれ。私のいのりは何ばかりの事をかなど聞ゆる。あしたのほどは人々参りこみて物

騒がしかりけるを、夕つ方御方々の参座し給はむとて心ことに引きつくるひけさうじ給ふ御蔭こそ實に見る甲斐あめれ。今朝この人々の戯れかはしつるいと羨ましく見えつるを、うへにはわれ見せ奉らむとて亂れたる事ども少しうちませつゝ祝ひ聞え給ふうす氷とけぬる池のかゝみには世にたぐひなきかげぞならべる

げにめでたき御あはひどもなり

くもりなき池のかゝみによろづ代をすむべきかげぞしるく見えける

何事につけても末遠き御契をあらまほしく聞えかはし給ふ。今日は子の日なりけり。實に千年の春をかけて祝はむにことわりなる日なり。姫君の御方に渡り給へれば、童下使などおまへの山の小松引き遊ぶ。若き人々の心地ども置き所無く見ゆ。此のおといより、わざとがましくし集めたる鬚籠ども檜破子など奉れ給へり。えならぬ五葉の枝に移れる鶯も思ふ心あらむかし

年月を松にひかれてふる人にけふうぐひすの初音きかせよ

音せぬさとのと聞え給へるを、げに哀と思し知る。こといみもえし給はぬ氣色なり。

この御かへりは自ら聞え給へ。初音惜み給ふべき方にもあらずかして御硯取りまかなひ書かせ奉らせ給ふ。いと美しげにて明暮見奉る人だに飽かす思ひ聞ゆる御有様を今まで覺束なき年月の隔たりけるも罪えがましく心苦しと思す。

ひきわかれ年はふれども鶯のすだちし松のねをわすれめや

幼き御心に任せてくだしくぞあめる。夏の御すまゐを見給へば、時ならぬけにやいとしづかに見えてわざと好ましき事も無く、あでやかに住みなし給へるけはひ見え渡る。年月に添へて御心の隔てもなく、あはれなる御なからひなり。今は強ちに近やかなる御有様ももてなし聞えざりけり。いと睦しく有難からむ妹背の契ばかり聞えかはし給ふ。御几帳隔てたれど、少し押遣り給へばまたさておはす。はなだはげに匂ひ多からぬあはひにて、御ぐしなどもいたく盛過ぎにけり。やさしき方にあらねどえびかづらしてぞつくるひ給ふべき、われならざらむ人は見ざめしぬべき御有様をかくて見るこそ嬉しく本意あれ、軽き人のつらにて我にそむき給ひなましかばなど、御對面の折々には先づ我が御心のながさも人の御心の重きをも嬉しく思ふやうなりと思しけ

りの細やかに舊年の御物語などなつかしく聞え給ひて、西の對へ渡り給ふ。まだいたくも住み馴れ給はぬ程よりは化粧をかしくしなして、をかしげなる童の姿なまめかしく、人かげのあまたして御しつらひあるべき限なれども、こまやかなる御調度はいとしも整へ給はぬをさる方に物清げに住みなし給へる。さうじみもあなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやし給へる御かたちなどいと花やかに、こゝに曇れると見ゆる所なく、隈なく匂ひきら／＼しく見まほしきさまぞし給へる。物思ひに沈み給へる程のしわざにや、髪の裾少し細りてさばらかにかゝれるしものと物清げに、此處彼處いとけざやかなるさまし給へるを、かくて見ざらましかばと思ほすにつけてはえしも見過し給ふまじくや。かくいと隔てなく見奉りなれ給へど、猶思ふに隔り多く怪しきが現の心地もし給はねば、まほならずもてなし給へるもいさをかし、年頃になりぬる心地して見奉るも心安くほいかなひぬるをつゝみなくもてなし給ひて、あなたなどにも渡り給へかし。いはけなきうひ琴習ふ人もあめるを諸共に聞きならし給へ、うしろめたくあはつけき心もたる人なき所なりと聞え給へば、のたまはんまゝにこそはと聞え

給ふ。さもあることぞかし。暮方になる程に明石の御方に渡り給ふ。近き渡殿の戸押し明るより御簾の内の追風なまめかしく吹き匂はして、物より殊に氣高くおぼさる。さうじみは見えず。いづらと見廻し給ふに、硯の邊り賑はしく草子ども取り散らしたるを取りつゝ見給ふ。唐の東京錦のこと／＼しきはししたる褥にをかしげなるきん打ち置き。わざとめきよしある火桶に侍従をくゆらかして物毎にしめたるに、えびかうのかのまがへると艶なり。手習どもの亂れうち解けたるもすぢかはり故ある書きざまなり。こと／＼しく草がちなどにも才がらすめやすく書きすさびたり。小松の御返しを珍らしと見けるまゝに、哀なる故事ども書きませて

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をとへる鶯

聲待ち出でたるなどもあり。咲ける岡邊に家しあればなどひき返し慰めたるすぢなど書き交せつゝあるを、取りて見給ひつゝは、笑み給へる、恥しげなり。筆さし濡らして書きすさび給ふ程にゐざり出で、さすがに自らのもてなしはかしこまりおきてめやすき用意なるを、猶人よりは殊なりと思す。白きにけざやかなる髪のかゝりの少し

さばらかなる程に薄らぎにけるもいとゞなまめかきさ添ひてなつかしければ、新しき年の御さわがれもやとつゞましかれどこなたにとまり給ひぬ。猶おぼえことなりかしと、かたぐゝに心おきておぼす。南のおとゞにはましてめざましがる人々あり。まだ曙の程に渡り給ひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、名残もたゞならずあはれに思ふ。待ちとり給へるはたなまけやけしとおぼすべかめる心の中計られ給ひて、怪しき轉寢をして若々しかりけるいぎたなさをさしも驚かし給はでと御氣色とり給ふもをかしよう見ゆ。殊なる御いらへも無ければ、煩はしくてそら寢をしつゝ日高く大殿ごもりおきたり。今日はりんじ客の事にまぎらはしてぞ、おもがくし給ふ。上達部みこ達など、例の残りなく参り給へり。御遊ありて、引出物祿などになし。そこら集ひ給へるが我も劣らじともてなし給へる中にも、少しなづらひなるだに見え給はぬものかな。とり放ちてはいうそく多く物し給ふころなれど、御前にてはけおされ給ふわろしかし。何の數ならぬ下部どもなどだに、この院に参るには心づかひことなりけり。まして若やかなる上達部などは思ふ心など物し給ひて、すゞろに心げさうし給ひ

つゝ常の年よりも殊なり。花の香誘ふ夕風長閑に打ち吹きたるに、お前の梅漸々ひも解きてあれは誰どきなるに、物の調べども面白くこののうち出でたる柏子いと華やかなり。おとゞも時々聲うち添へ給へるさきくさの末つかた、いと懐しうめでたく聞ゆ。何事もさしいらへし給ふ御光にはやされて、色をも香をもますけぢめことになむわかれける。かくのゝしる馬車の音をも物隔て、聞き給ふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり。まして東の院に離れ給へる御方々は年月に添へてつれづれの數のみまされど、世の憂きめ見えぬ山路に思ひなすらへて、つれなき人の御心をば何とかは見奉り答めむ。その外の心もとなく寂しき事はた無ければ、おこなひの方の人は其のまぎれなく勉め、假字の萬の草紙の學問心に入れ給はむ人は又其の願に従ひ、物まめやかにはかゝしきおきてにも唯心の願に従ひにたる住ひなり。騒しき日ごろ過して渡り給へり。常陸の宮の御方は人のほどあれば心苦しくおぼして人目のかざりばかりはいとよくもてなし聞え給ふ。いにしへ盛と見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして瀧のよどみ恥しげなる御かたはらめなどをいとほ

しとおぼせば、まほにも向ひ給はず。柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるもきなし給へる人がらなるべし。光もなく黒きかいねりのさいくしくはりたる一襲ひとかさね、さる織物の袿つちきを着給へるいと寒げに心苦し。かさねの袿などはいかにしなしたるにかあらむ。御鼻の色ばかり、霞にもまざるまじく花やかなるに御心にもあらず打ち歎かれ給ひて、殊更に御几帳引きつろひ隔て給ふ。なか／＼女はさしもおぼしたらず、今はかく哀に長き御心のほどをおだしきものにうちとけ頼み聞え給へる御さま哀なり。かゝる方にもおしなべての人ならずいとほしく悲しき人の御さまとおぼせば、哀にわれだにこそはと御心とゞめ給へるもありがたきぞかし、御聲などもいと寒げに打ち戦慄つなきつゝ語らひ聞え給ふ。見煩ひ給ひて御ぞどもの事後見聞ゆる人は侍るや。かく心やすき御住ひは唯いと打ち解けたるさまにふくみなえたるこそよけれ。上邊許うへはかりつろひたる御装まゐはあいなくなむと聞え給へば、こちやくしくさすがに笑ひ給ひて、醍醐の阿闍梨の君の御あつかひし侍るとて、衣きぬどももえ縫ひ侍らでなむ。かはぎぬをさへとられにし後寒く侍ると聞え給ふはいと鼻赤き御せうとなりけり。心美しといひながらあ

まり打ち解け過ぎたりとおぼせど、此處にてはいとまめにきすく人にておはす。かはぎぬはいとよし。山伏のみのしろごろもに譲り給ひてあえなむ。さてこのいたはりなき白妙の衣は、七重にもなか重ね給はざらむ。さるべき折々は打ち忘れたらむ事も驚かし給へかし。もとよりをれ／＼しくたゆき心のおこたりに、まして方々の紛らはしききほひにもおのづからなむとのたまひて、向ひの院の御庫くら明けさせて絹綾など奉らせ給ふ。荒れたる所も無けれど、住み給はぬ所のけはひは閑しづかにて御まへの木立ばかりぞいと面白く、紅梅の咲き出でたる匂ひなど見はやす人も無きを、見わたし給ひて

ふるさとの春の木末にたづねきて世のつねならぬ花を見る哉

ひとりごち給へど聞き知り給はざりけんかし。空蟬のあま衣にもさしのぞき給へり。うけばりたるさまにはあらずかこやかにつぼね住みにしなして、佛ばかりに所えさせ奉りて行ひ勤めけるさまあはれに見えて、經佛のかざりはかなくしなしたる關伽かかの具などもをかしげになまめかしく、猶心ばせありと見ゆる人のけはひなり。青にびの几帳、心ばへをかしきにいたく居隠れて袖口ばかりぞ色異なるしも懐しければ、涙ぐみ

給ひて松が浦島を遙に思ひてぞ止みぬべかりける。昔より心憂かりける御契かな。さすがにかばかりのむつびはたゆまじかりけるよなどのたまふ。尼君も物哀なるけはひにて、かゝる方に頼み聞えさするしもなむ浅くはあらず思へ給へ知られ待りけると聞ゆ。常にをり／＼重ねて心惑はし給へし世の報などを佛にかしこまり聞ゆるこそ苦しけれ、おぼし知るや、かくいとすなほにしもあらぬものをと、思ひ合せ給ふ事もあらじやはとなむ思ふとのたまふ。彼のあさましかりし世のふることを聞き置き給へるなめりとはづかしく、かゝる有様を御覽じはてらるゝより外の報はいづこにか侍らむとて誠にうち泣きぬ。古よりも物深く恥しげさまさりて、かくもて離れたる如くおぼすしも見放ち難くおぼさるれど、果敢なき事を宣ひかくべくもあらず。大方の昔今の物語をし給ひて、かばかりのいふかひだにあれかしと彼方を見遣り給ふ。かやうにても御蔭に隠れたる人々多かり。皆さし覗き渡し給ひて、覺束なき日數積る折々あれど心の中は怠らすなむ。唯限ある道の別のみこそ後めだけれ、命ぞ知らぬなどなつかしくのたまふ。いづれをも程々につけて哀とおぼしたり。われはとおぼしあがりぬべき御

身の程なれど、さしもこと／＼しくもてなし給はず、所につけ人の程につけつゝ、遍く懐しくおはしませば、唯かばかりの御心にかゝりてなむ多くの人々年月を経ける。今年は男踏歌あり、うちより朱雀院に参りて次にこの院に参る。道の程遠くて夜の明方になりけり。月の曇りなく澄みまさりて薄雪少し降れる庭のえならぬに、殿上人なども物の上手多かるころほひにて、笛の音もいと面白く吹き立て、このおまへは殊に心遣したり。御方々物見に渡し給ふべくかねて御消息どもありければ、左右の對渡殿などに御局しつゝおはす。西の對の姫君は寢殿の南の御方に渡し給ひて、此方の姫君に御對面ありけり。上も一所におはしませば御几帳ばかり隔て、聞え給ふ。朱雀院、きさいの宮の御方などめぐりける程に、夜もやう／＼明け行けば、みづうまやにてこそがせ給ふべきを、例あることより外にさまことにこと加へていみじくもてはやさせ給ふ。影すさまじき曉月夜に雪はやう／＼降り積む。松風木高く吹きおろし物すさまじくもありぬべき程に、青色のなえはめるに白重の色あひ何のかざりかは見ゆる。かざしの錦は匂もなきものなれど、所からにや面白く心ゆき命延る程なり。殿の

中將の君内の大殿の公達きんたつをこらにすぐれてめやすく華やかなり、ほのくくと明け行くに雪や、散りてそいろ寒きに、竹川たけがわ謠うたひてかよれる姿、懐かしき聲々の、繪にも書きとめ難からむこそ口惜けれ。御方々いづれもく劣らぬ袖口どもこぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども曙の空に春の錦立ち出でにける霞のうちかと思渡さる。怪しく心ゆく見物にぞありける。さるはかうごしのよばなれたるさま、ことぶきのみだりがはしき、をこめきたる事もことくしくとりなしたる、なかく何ばかりの面白かるべき拍子も聞えぬものを、例の綿かづき渡りてまかでの。夜明けはてぬれば御方々歸り給ひぬ。おとこの君少し大殿ごもりて日高く起き給へり。中將の聲は辨の少將にをさく劣らざるは、怪しくいうそくどもおひ出づるころほひにこそあれ。いにしへの人は誠に賢き方やすぐれたる事も多かりけむ。なさけだつすちは此頃の人にえしもまさらざりけむかし。中將などをば、すくしくしきおほやけ人にしなしてむとなむ思ひ置きてし。自らのあざればみたる頑かたくなしさはもてはなれよと思ひしかど、猶したにはほのすきたるすぢの心をこそとむべかめれ。もてしづめ、すくよかなる上邊うへはかり許は

うるさかめりなどいとうつくしとおぼしたり。萬春ばんしゅん樂らく御口すさびにのたまひて、人々の此方に集つどひ給へる序にいかで物の音試みてしがな、私のごえんあるべしとのたまひて、御琴どもの麗はしき袋どもして、秘ひめ置かせ給へる、皆引き出で、押しのごひて緩ゆるべるを調しらべへさせ給ひなす。御方々心づかひいたくしつゝ心げさうを盡し給ふらんかし。(源氏物語)

三 大堰川行幸和歌序

紀 貫 之

あはれわが君の御代、なが月の九日ここのかと昨日いひて、残れる菊おこし見たまはん、又暮れぬべき秋ををしみ給はんとて、月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、渡守を召して、夕月夜小倉山のほとり行水の大井の川邊に、行幸みゆきしたまへれば、久方の空には、たまひける雲も無く、行幸を待ち、流るゝ水底には濁れる塵無くて、おほん心にぞかなへるとみことのりして、おほせ給ふことは、秋の水に浮びては流るゝ木葉とあやまたれ、秋の山を見れば織る人無き、錦とおもほえ、もみちの葉の嵐に散り

て、曇らぬ雨と聞こえ、菊の花の岸に残れるを、空なる星と驚き、霜の鶴川邊に立て雲のおるかとうたがはれ、夕の猿山の峽になきて、人の涙をおとし、旅の雁雲地にまとひて、玉札と見え、遊ぶかもめ水にすみて、人に馴れたり、入江の松、幾世経ぬらんといふことをそよませ給ふ。われらみじかき心の、このもかのもにまとひ、つたなき言の葉、吹風の空にみだれつゝ、草の葉の露と共に、うれしき泪おち、岩根と共によろこほしき心ぞ立かへる。もし此の言の葉の末まで残り、いまを昔にくらべて、後のけふを聞かん人、あまのたくなは繰りかへし、しのぶの草のしのばざらめや。

四 風

は

清 少 納 言

風は嵐、木枯、三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風いとあはれなり。八九月ばかりに雨にまじりて吹きたる風いとあはれなり。雨のあし横さまに騒がしう吹きたるに夏とはしたる綿絹の汗の香などかわき、すゞしの單衣ひとへに引き重ねて著たるをかし。此のすゞしだにいとあつかはしう捨てまほしかりしかば、いつのまにかうなりぬらむ

と思ふもをかし。あかつき格子妻戸など押しあけたるに、嵐のさと吹き渡りて顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月つごもり、十月一日のほどの空うち曇りたるに風のいたう吹くに黄なる木の葉どものほろ／＼とこぼれ落つるといとははれなり。櫻の葉棕の葉などこそ落つれ。十月ばかりに木立多かる所の庭はいとめでたし。野分の又の日こそいみじうあはれにおぼゆれ。たて蒔じとみ、透垣すいがいなどのふしなみたるに、前栽せんざいども心ぐるしげなり。大きな木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜きに、萩女郎花などのうへによろほひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどにさときはをことさらにしたらむやうに、こま／＼と吹き入りたるこそあらかりつる風のしわざとも覚えね。いと濃き衣かみのうはぐもりたるに、朽葉の織物うすものなどの小桂きて、まことしく清げなる人の夜よるは風のさわぎに寢覺つれば、久しう寢おきたるまゝに、鏡うち見てもやより少しぬざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて少しうちふくだみたるが肩にかゝりたる程、まことにめでたし。物あはれなる氣色見る程に、十七八ばかりにやあらむ、ちひさうはあらねど、わざとおとなごとは見えぬが、すゞしの單衣

のいみじうほころびたる。花もかへり濡れなどしたる。薄色のとのゐものを着て、髪は尾花のやうなるそぎするも、たけばかりは衣の裾にはづれて、袴のみあざやかにてそばより見ゆる。わらはべの若き人の根ごめに吹き折られたる前栽などを、取り集め起し立てなどするを羨ましげに推し量りてつき添ひたるうしろもをかし。(枕草紙)

五 枕草子跋

清少納言

もの暗うなりて、文字も書かれずなりたり。筆もつかひはて、是を書きはてばや、此の草子は目に見え、心に思ふ事のよしなくあやしきも、人やは見んすると思ひて、つれづれなる里居の程に、書きあつめたるに、あいなく人のため、びんなきいひすくしなと、しつべき所々あれば、きようかくしおきたりと思ひしを、涙せきあへすこそなりにけれ。宮の御前に、内のおと、の奉りたまへりし御草子を、これに何を書かまし、うへの御前には史記といふ文をなん書かせたまへると、のたまはせしを、是たまた、枕にこそはし侍らめと啓せしかば、さはえよとて、たまはせたりしを、持て里

にまかり出て、御前渡りの戀しくおもひ出ださるゝ事、あやしき事、ふる事やなにやと、つきせずおはかる紙のかす書きつくさむとせしに、いと物おぼえぬ事ぞ多かるや大方是は世の中に、をかしくもめでたくも、人の思ふべき事をえり出て、歌なども木草鳥虫をいひ出したらばこそ、思ふほどよりはわろし。心みつなりともしられめ、心ひとつに思ふ事を、たはふれに書き付けたれば、物に立ましり、人なみくくなるべき見を聞くべき物かはおもひしに、はづかしなど見る人のたまふなれば、いとあやしくぞあるや。げにそれもことわり、人の悪むをもよしといひ、ほむるをもあしと云ふは、心の程こそおしはかりたれ、たゞ人に見えけんそねたきや、

六 品賤しからぬ人妻を去りて

後返り棲む物語

源隆國

今は昔、誰とは云はず、人品賤しからぬ君達受領の年若きありけり。心に情ありて故々しくなむありける。其人年來棲みける妻を去りて、今めかしき人に見移りにけり。

されば元の所をば忘れ果てぬ。今の所に住みければ、本の妻心憂しと思ひて、いと心細くて過ぎける。男攝津國に知る所ありければ、遊ばんが爲に下りけるに、難波あたりを過ぎける程に、濱邊のいと面白きを見歩きけるに、蛤かきの小やかなるに、海松うみまatsuの房やかにて生ひ出でたりけるを見付けて、これいみじく興ある物なりと、思ひて取りてこれを吾が去り難く思ふ人の許に遣りて、見せて興せさせむと思ひて、小舎人こしやうにん童わらわの左様の方に心得て仕ひけるをもて、これ儘に京にもて行き、彼に奉れ。これが興ある物なれば、見せ奉らむとてなむと、申せと云ひて遣りければ、童此をもて行き、思へ違へて、今の所へはもて行かずして、本の妻の家にもて行き、かくなむと云ひ入りたりければ、本の妻いと思ひ懸けぬ程に、かく興ある物をさへおこせて、この吾が上るまで失はで御覽せよと、云ひおこせれば、殿は如何におはしますぞと問はずれば、童、攝津國におはしますに候ふ。それに難波あたりにて、これは御覽じつけたる物を、奉らせ給ひたるなりと云へば、本の妻かく聞くに、あやしく健事に所違へにもて來たるにやあらむと思へども、取り入れて、しか承りぬとばかり云はせれば、童

即ち走り歸りて、攝津國に行きて、主に慥に奉り候ひぬと云へば、主人かまじは今いまの所にもて行きたるぞと、知りてありけるに、彼の本の所には、此を見るに、實に興ある物なれば、盤ばんに水を入れて、前に置きて、此を入れて興じ見居たりけり。然る間、男十日計ありて、攝津國より歸り上りて、今の妻に、何なんしか彼の奉りし物は侍りやと、打笑ひて云ひければ、妻、おこせたりし物やありし、それは何物ぞと云ひければ、男、否や、小さき蛤かきのをかし氣なるに、海松うみまatsuの房やかに生ひ出でたりしを、難波の濱邊にて見付けて見しに、興ある物なりしかば、急ぎ奉りしはと云へば、妻、更にさる物見えす、誰をもておこせ給ひしぞ。もて來らましかば、蛤かきは焼いて食ひてまし、海松うみまatsuは酢に入れて食はましと云ふに、男聞くに思ひに違ひて、少し心づきなき様なり。さて男外とに出で、遣はせし童を呼びて、汝はありし物をば、何所にもて行きしぞと問へば童思ひ違へて、もとの所にもて行きたる由を云へば、主人大に忿りて、速にそれ取り返して只今來と責むれば、童いみじき過ちをもしてける哉と思ひ驚きて、もとの所に走り行きて、此由を云ひ入らせければ、もとの人さればこそ、所違へなりけるにこそ

と思ひて、水に入れて見けるを、急ぎ取上げて、陸奥紙に包みて、返し遣りけるに、その紙にかくなむ書きたりける。

蟹の土産つとおもはぬ方にありければ、かひもなく返しつるかな

と。童これをもて行きて、かくもて参りたる由を云ひければ、主外とに出で、これを取りて見るに、本態もとさまにてあれば、いと嬉しく失はずしてありけると、心にく、思ひて内にもて入りて、開きて見れば包紙にかく書きたり。男これを見るに、いと哀に悲しくて、いまの妻の、貝は焼いて食ひてまし、海松は酢に入れて食ひてましと、云ひしこと思ひ合はされて、忽に心變りて、本の所に行きなむと、思ふ心付きにければ、やがてその蛤を打具して行きにけり。定めて其今の妻の云ひし事も本の妻に語りける。さて今の妻をば忘れて、本の所になむ住みける。情なさけありける人の心は、かくなむありける。げに今の妻の云ひけむ事、疎みてんかし、本の妻の情には必ず返り棲むべき事なりとなむ、語り傳へたるをや。

(今昔物語)

七 人々友亡の事

西行法師

さても治暦四年の卯の花月の中の十日の下つ方の頃、後冷泉院御煩の由聞えし程に、僅に五日ばかり御惱ありて、十九日の夕果敢無くならせ給し、淺ましも申に及ばざりしに、同日の曉女院又失せさせ給しかば、歎に歎を添へ、悲に悲を重ねて、月卿雲客の花の袂涙に洗はれ、露にそぼちて夙夜せしたぐひ、聲をと、のへて叫ぶ聲、暫は静まらずとなん。彼の唐土からこしの天寶の年秋七月、夜更人静りて、玄宗楊貴妃に契りて、天にかけらば比翼の鳥たらむ、地に住まば連理の枝とならんと、契り給しむつびだにも、祿山が爲に奪はれて、前後にこそ別れ給しに、是はいかにと契りまし／＼けるぞや、其夕まで恙もましまさざりし女院の、俄に息絶て、いまそかりける事、返々哀に侍る。後冷泉院かくれさせ給へる日、後三條院位に即かせ給しかば、一方は俄に目出度、一方は歎の涙にしほたれ、ひとりはずすべらぎの位にいまそかれば、ふたりは無常の鬼にとられ給へり。一天憂喜相交はり、悦の中の歎、歎の中の悦、いづれも盛衰の

ためし、歎も終りあり、悦も又末あり、憂喜あたらまりて、安き事侍らす。後三條院位にまし／＼しかば、萬賢よろづき御計らひのみにていまそかりければ、上下悦びあへりし程に、僅に六年むとせを経て、延久の終りの年、玉體不豫にいまそかりけるが、終に五月の上の弓はりに、しでの山路の鳥の音に誘はれ給にけり。百の官つかさの歎は、延喜村上の二世にわかれ奉りしにも變らず。民の愁ふるわざは、仁徳の御心をうしなひ奉りしにも猶まさり侍りき。御年四十よそぢとかや、實に惜かるべき程の御事ぞかし。雲の上には誰かうつゝ心侍りし、たゞ夢とのみこそ覺えしか。衾をかさはさせ給し國母しとねに近付來て、いまそかりし人々の、歎き聞ゆるも愚に侍る。一天かきくれて、日月の光を失へる姿に侍りけるとかや。垣根の卯の花の風に誘はれ、雨にしはたれたるも、折節ことに哀なり。禁中悲にあまり、九重うちしめりき。位にまし／＼し其かみの悦び、六年の間の樂み、まさに一時に盡きて悲しく、廣隆寺の良よしのすみ蓮臺野の御山おくりのありけるに、郭公の幾聲と、數わきかぬるまでに鳴きけるも、死出の山路の鳥と聞けばさそひ奉りつとや鳴きけん。又猶もはやめ奉る聲にしもや侍らん。折から鳥の音も物

うくぞ侍る、但郭公は昔の人を戀ふるなれば、すでに昔語にならせ給ぬる程に、いつしか戀しとや鳴き渡るらん。しかあらば誰も同じ心なるべし。かくて月日はくれ竹の過ぎぬる世々の戀しさ、僅に色の藤衣、涙まだ干でぬぎかへぬ中に、宇治の大相國も失せ給ぬれば、歎のまさりける憂さよ。古きかたみと殘らせ給へるに、誰を頼むの身にしあればか歎かざらん。去年の悲みにうちそひぬるわざの、うたてさと思しに、明年の秋又大二條殿さへおはしまさすなりぬれば、三年みとせの歎き盡きもせで、後三條院の第三年の御佛事には、いよ／＼哀に侍りき。あはれ果敢なき世の中かな。誰か一人としても、此世に止まりはてゝやはある。王母一萬の壽算夢の如し、かはらんと思ふ命はをしかからで、扱もわかれん事ぞ悲きとよみて、住吉の明神に祈りし母も止まらず、祈られし子も、百の命をや過ぎじ。百年過ぐる程なさ、たゞ今の心地し侍る。百年を経んすら、其終あるべくは悲しむべし。況んや老少不定のさかひをや、命絶えん事今日にや有る、明日あすにやある。無常といふ事は、深き法門にあらずや、誰か是を知らざらん、若知るとならば、などか後世の爲に勤めざるべき。無常の理を辨へざらんは、措

いて是をいはず、知りて豊徒いだらとして過ぐべきや。中にも幼き身は、行末をも頼む方もありぬべし、頭に雪を戴ける人の、なか消えなん事を知らざる。いとけなからんすら、明日を頼むべきにあらぬ世の中なり。蟬遊せみあそびの空に飛ぶを見、槿花あざみの日にあたるを見侍るに變らぬは人の身なり。それは猶夕を待つ、我等は知らず朝あしたにや消えん、榮へるもの樂みはてず、必ず衰ふる時あり。榮公が三樂も麟徳の初の年、長月の初霜に犯されて去りにき。又祿山が胡戦の庭には、木末こすえの花の風にたぐふよりも軽く、はやかりし子の爲に亡ぼさる。須達が七珍の財、命と共に朽にき。無常もし高位を憚らば、天子ぞ獨此世にはとまりはて給ふべき、若兵者つはものに恐れれば、祿山もいかでか劍の先にかゝらん。財寶に寄るべくは、須達ぞ残り止まるべき。目を塞ぎ心を留めて閑に世の中を思ふに、初あるものは終あり、生るゝものは必ず死すといへる事、身にしみてぞ侍る。

それ春に成るといふ日より、吉野の山にうそふけば、いつしか霞たなびき、枝未だ氣力なけれど、風先づ動いてなにもなく風もゆるくなるまゝに、木々のつのぐみて花つ

ほめり、漸く一房ひとよ開けしかば、都は春とて花處々、歌酒家々かしういへくにしてもてあそぶ程に、嵐より音づれて、南枝北枝の梅の開け、をらざるにかつ散り、梢はひとり浅みどり庭をさかりに移る花を見る程に、或は浪にしほたれ、或は風の爲に散りて、行末なくなりはてぬ。二月の頃嵯峨野のわたりを眺むれば、多くの夢ごりの春雨にうるほされておしなべて翠に見ゆる中に、人手をにぎると詠せし、紫塵しぜんの蕨も萌え出で、ゆらくと見ゆる程に、漸く日を経て立のび、くろみ渡りて、事の外にかはりて見ゆ。夏にもなりぬれば、花橋に香をとめて、鳴くほととぎすを待ちて、五月關にも來なけかし、しのゝめの空にも音づれよかしと、うつゝ心もなく待ちし程に、郭公の聲もうち絶ゆるまゝには、野邊の草花の早く咲きぬかしと、人知れず待ちし甲斐に、草々咲亂れて錦を織れるかと覺えて、野邊に日を暮してばやと思ふ程に、六十餘回見れども倦かずと、心の底を述べけん人の、床ゆかしさと思居て侍れば、既に月日の積りて、夜寒に秋も末にのぞみ、霜しもさえて枯野の薄あともなく、木々の紅葉散りはて、枝には雪の降りかはり、雪だに消え侍りしありさま、盛衰の姿、無常轉變の悲みに侍り。此理を心に

かけて、常に佛の御名を唱へ奉り給はゞ、往生の大事はよも遂げはづし侍らじ。大方は妻子を捨て、萬を擱いて、勤めんこそいみじき事にて侍るべけれども、それ叶ふまじく侍らば、心にこそよるべき事なれば、何事を營むとも、是を怠りなく思出る事に侍れかし。火宅の中に家居して、今は焰に焼れなん事をわきまへざる悲さよ。あはれ佛の御戒には偏頗はおはしまさぬものなるをや。(撰集抄)

八 生

死

道元禪師

生死しやうじのなかに佛あれば、生死なし。又曰く、生死のなかに佛なければ、生死にまごはず。ころろは、夾山定山かうざんじやうざんといはれし、ふたりの禪師のことばなり。得道の人のことばなれば、さだめて空しくまうけじ。生死を離れんとおもはむ人、正にこの旨をあきらむべし。もし人生死のほか佛をもとむれば、轆なぐさを北にして越あつにむかひ、面おもてを南にして北斗ほくとを見んとするが如し。いよく生死の因をあつめて、さらに解脱の道をうしなへり。たゞ生死すなはち涅槃ねはんところえて、生死としていとふべきも無く、涅槃とし

てねがふべきもなし。この時はじめて生死をはなる、分あり。生より死にうつるところは、是あやまりなり。生は一時の位にて、すでに先あり後あり、かるがゆゑに佛法のなかには、生即ち不生といふ。滅も一時の位にて、又さきありのちあり、之により滅すなはち不滅といふ。生といふときには、生よりほかにものなく、滅といふときは、滅のほかにもなし。かるがゆゑに生來らばたゞこれ生、滅來らばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなけれ、ねがふことなけれ、この生死はすなはち佛の御いのちなり。これをいとひすとすれば、すなはち佛のいのちをうしなはんとするなり。これにとゞまりて、生死に著ちやくすれば、これも佛の御いのちをうしなふなり。佛のありさまをとゞむるなり。いとふことなく、したふことなき、このときはじめて佛の心にいる。たゞし心をもてはかることなけれ、ことばをもていふ事なけれ、たゞ我身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれてこれにしたがひもてゆくとき、力をもいれず、心をも費さずして、生死をはなれ、佛となる、たれの人か心にとゞこほるべき。佛となるにいと易き道あり、もろくの悪

をつくらず、生死に著するこゝろなく、一切衆生のためにあはれみふかくして、上をうやまひ、下をあはれみ、よろづをいとふ心なく、願ふ心なくて、心におもふことなく、うれふることなき、これを佛となづく。又ほかにたづぬることなかれ。

(正法眼藏)

九身延山御書

日蓮聖人

誠に身延山の栖すみかは、千早振神も恵を垂れ、天下りましますらん。心無き賤の男賤の女までも心を留めぬべし。哀を催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐のきにすだく蜘蛛くまの糸玉をつらぬき、紅葉いつしか色深うして、絶々に傳ふ寛の水に影を移せば、名にしおふ龍田河の水上也かくやと疑はれぬ。又後うしろには峨々たる深山そびへて梢に一乗の果を結び、下枝しもえに鳴く蟬の聲滋く、前には湯々たる流水湛へて、實相真如の月浮び、無明深重の闇晴れて、法性の空に雲も無し。かゝる砌みきりなれば、庵の内には晝は終日ひのちに一乗妙典みょうてんの御法を論談し、夜は竟夜よるがら要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住み給けん鷲峰

を我朝此の砌に移し置きぬ。霧立ち嵐はげしき折々も山に入りて薪を樵り、露深き草を分けて深谷に下りて芹を摘み、山河の流も早き巖瀬に菜を濯ぎ、袂たもとしほれて乾しわぶる思ひは、昔人丸が詠じける和歌の浦に藻汐垂れつゝ世を渡る海士もかくやとぞ思ひ遣る。つくづくと浮身の有様を案するに佛の法を求め給しに異ならず。昔釋尊樂法梵志としては、皮を剥ぎて紙とし、髓の水を取りて硯の水とし、肉を割きて墨とし、骨を摧きて筆として、下方の迦葉佛に値ひ奉りて、如法應修行非法不應行、今世若後世、行法者安穩云々と此文を傳へ給ふ。薩埵王子としては飢えたる虎の爲に身を與へ雪山童子としては半偈の爲に身を投げ、尸毗王としては鳩の爲に肉を秤にかけ、乞眼こつげん婆羅門には眼をくじりて取らせ給ひき、又佛大國の王と御座おはしませし時は、宿善内に催し、月卿雲客の政をも忘れ、百官萬乘に仰がれ給ふ十善の樂も、風の前の燈、あだなる春の夜の夢、離につたふ槿花あざひばの日影を待つ程ぞかし。然るに過去の戒善いみじきに依りて、今生には大國の王たりと云へども、無常の殺鬼にさそはれて一期空くして後、修するところの善無くんば、阿鼻大城の炎の底に沈み、刹利しやくりも須陀すだも變らぬためしにて

三熱の炎にまじはり、鐵繩五體をしばり三熱の彈丸を口に入れ、阿防維利三鈷の菱餅を手に取り、邪見の音をあらゝかにして、五體身分をとりくくに責むるならば、音を天に響かし叫ぶとも地に臥して歎くとも、百官萬乘も來つて助くること無く、親類眷屬も來つて救ふこと無らん。又錦帳の内にして夜々の寢覺の床にして天にあらば比翼の鳥、地に住まば連理の枝とならんと、月日を送り年を重ねて契りし妻子も來つて訪ふ事はあらじなにと、やうく思ひつけ給ひて、自ら藏を開きて金銀等の七珍萬寶を僧に供養し、象馬妻子を布施し、然して後大法の螺を吹き、大法の鼓を撃つて四方に法を求め給ふ。爾時に阿私仙人と申す仙人來つて申しける様は、實に法を求め給ふ志御座ば、我が云はん様に仕へ給へと云ひければ、大に悦んで山に入つては果を拾ひ、薪を堆、菜を摘み、水を汲み、給仕し給へる事千歳なり。常に御口すさみには情存妙法故身心無懈倦とぞ唱へ給ひける。文の心は常に心に妙法を習はんと存する間、身にも心にも仕ふれども、ものうき事なしと云へり。此の如くして習ひ給ひける法は、即ち妙法蓮華經の五字なり。爾時の王とは今の釋迦牟尼佛是なり。佛の仕へ給

うて法を得給ひし事を我朝に五七七七七の句に結び置きけり。今如法經の時伽陀に誦する歌に、法華經を我が得し事は薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし。此歌を見るに今は我身につみ知られて哀に覺えける也。實に佛になる道は師に仕ふるには過ぎず。妙樂大師の弘決の四に云く、若有弟子見師過者若實若不實其心自壞失法勝利云々、文の心は若し弟子あて師の過を見さば、若は實にもあれ若は不實にもあれ、已に其心有るは身自ら法の勝利を壞り失ふ者なり云々。又止觀の一に云く、如來感勸稱三歎此法一聞者歡喜常啼東請善財南求藥王燒手普明刎頭、一日三度捨恆河沙身尙不能報二句之力一況兩肩荷負百千萬劫寧報佛法之恩云々、文の心は如來ねんごろに此法を稱歎し給へば、聞く者即ち歡喜す、常啼菩薩は東に法を請ひ、善財菩薩は南に法を求め、藥王菩薩は臂を焼き、普明王は頭を刎ねられたり、一日に三度恆河の沙の數程身をば捨つるとも、尙一句の法恩を報する事あたはじ、況んや二ツの肩に荷負うて百千萬劫すとも、寧佛法の恩を報する事あるべからすと云へる心なり。止觀の五に云く香城に骨を碎き雪嶺に身を投ぐとも亦何ぞ以て德を報するに足らんやと云へり。弘決

の四に云く、昔毗摩大國と云ふ國に狐あり、獅子に追はれて逃げけるが水もなき渴井かつせいに落ち入りぬ。獅子は井を飛び越えて行きぬ。彼の狐井より上らんとすれども深き井なれば上る事を得ざりき、既に日數を経るほどに、飢死なんとす、其の時狐文を唱へて云く、禍哉今日苦所逼便當没命於丘井、一切萬物皆無常、恨不以身飼獅子、南無歸命十方佛表知我心淨無已、文の心は、禍なる哉今日苦にせめられて即ち當に命を渴井に没すべし、一切の萬物は皆是無常なり、恨むらくは身を獅子に飼はざりける事を、南無歸命十方佛我心の淨きことを表知し給へと喚ばはりて、爾時に天の帝釋狐の文を唱ふる事を聞き給うて、自ら下界に下り、井の中の狐を取り上げ給うて法を説き給ひと宣ひければ、狐の云く逆なる哉弟子は上に師は下に居たる事をと云ひければ諸天笑ひ給へり、帝釋誠に理と思召して、下に居給ひて法を説き給へと宣ひければ、又狐云く、逆なる哉師も弟子も同座なる事をと云ひければ、帝釋諸天の上着の御衣みぎを脱ぎ重ねて高座として登せて法を説かしむ、狐説いて云く、有レ人樂生惡死、有レ人樂死惡生云々、文の心は人有りて生る事を樂つて死せん事を惡み、又人有りて死せ

ん事を願ひて生きん事を惡むと、此文を狐に値うて帝釋習ひ給うて狐を師として敬はせ給ひけり。天台の御釋に云く、雪山は鬼に随つて偈を請ひ、天帝は畜を拜して師と爲す、囊臭きをもて其の金を捨つる事なかれと釋し給へり。されば何に賤き者なりとも實の法を知りたらん人を忽にする事あるべからず。然れば法華經の第八に云く、若實若不實此人現世得白癩病云々、文の心は法華經の行者のところが若は實にもあれ、若は不實にもあれ云はんものは、現世には白癩の病をうけ、後世には無間地獄に墮つべしと説かれたり。此等の理を思ひつゝくるに大地の上に針を立て、大梵天宮より糸を下して、あやまたす糸の針の穴に入る事は有りとも、我等が人間に生るゝ事は難く又億々萬劫不可思議劫をば過ぐるとも、如來の聖教に値ひ奉る事難し。而るに受け難き人間に生を受け、値ひ難き聖教に値ひ奉る、設ひ聖教に値ふと云へども惡知識に値ふならば、三惡道に墮ちん事疑有るべからず。師墮つれば弟子墮つ、弟子墮つれば檀那墮つと云ふ文有るが故に、今幸に一乘の行者に値ひ奉れり、皮を剥ぎ、肉を切り、千歳仕へざれども、恣ほしまに一念三千十界十如一實中道皆成佛道の妙法を學ぶ。實に過去

の宿善拙うして末法流布の世に生れ値はざれば、未來永々を過ぐとも解脱の道難かるべし。又世間の人の有様を見るに、口には信心深き事を云ふといへども、實に神にそむる人は千萬人に一人もなし。涅槃經に云く、佛法を信せずして惡道に墮せん者は、大地の土の如く、佛法を信じて佛に成らん者は、爪上の土の如しと説き給へるも理なり。むかし佛摩耶の恩を報じ給はんが爲に俄に人にも知られ給はずして、忉利天へ四月十五日に昇らせ給ひて御座けるに、五天竺の國王大臣を始めとして、あやしの賤の男賤の女までも、佛を失ひ奉りて啼き悲みける歎き限り無く、誠に子を失ひ親に後れたるが如し。いとをしき妻を戀ひ、男を戀ふる思の闇すら忍び難し。何に況んや大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ厳しくして、迦陵頻伽の御音を以て、一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を説かせ給ふ。慈悲深重に御座す佛の御名殘惜み進らす歎き思ひ遣るに、上陽人の上陽宮に閉ぢ籠められて、歎きし歎にも勝れ、堯王の娘織皇女英の二人舜王に別れ奉りて、歎きし歎にも勝れ、蘇武が胡國に流されて、十九年雪中に住みけん思にも勝れたり。餘りの御戀しさに木を以て佛の御形を作り奉る

に、三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず、爾時に優填大王と申しける王、赤梅檀と云ふ木を以て、忉利天より毗首羯磨天を請じて作り奉りける佛の、忉利天へ本佛の御迎に參らせ給ひけるも、優填大王の信心深き故なり。是こそ一閻浮提に佛を作り奉りける始めなれ。又須達長者と云ひける人あり、佛は忉利天に御座すが、七月十五日に天竺へ下り給ふべきよし聞えければ、御設けに御堂を作らんとしけるに御堂造るべき地を持たざりければ、波斯匿王の太子祇陀太子と云ひける人祇陀林と云ふ苑を持ち給ひたりけるに、廣さ四十里有りける此の苑に人太刀刀を持ちて入れば、折れ砕けける苑なり。須達祇陀太子に値ひ奉りて、此苑を賣らせ給へ御堂を造らんと云ひければ太子宣ふやう、此苑四十里に金を厚さ四寸に敷き給は、賣らんと宣ひけり。須達之を買ふべき由を申しければ、太子宣はく、戯れにこそ云ひつれ、實には叶ふまじと宣ひけり。須達申しけるやうは、天子に二言なしと云ふ、いかでか假そめの戯にも虚言をし給ふべきと申して、波斯匿王に此由を申しけり。大王宣はく、祇陀太子は我位を繼ぐべき者なり、いかでか假そめの戯れにも虚言をすべきと仰せられければ、太子力なく

賣らせ給ひけり。須達四十里に金を四寸に敷いて買ひ取つて悦んで御堂を造らんとしけるに、舍利弗來りて繩をひき、地をわりけるに、舍利弗空を見上げて笑ひけり。須達が云く、大聖は威儀を亂さる理なり、いかに笑はせ給ふぞと、怪み申しければ、舍利弗の云く、汝此堂を造らんとすれば、六欲天に軍起る、かゝる大善根を修する者なれば、我天へこそ迎へんすれとて、互に諍をなす事のをかしと覺ゆるなり。汝は一期百年の後は兜率の内院に生るべしとぞ宣ひける。然して後此堂を作り畢れり、其名を祇園精舎と云ふ。此祇園精舎へ七月十五日の夜佛入らせ給ふべき由有りしかば、梵天帝釋は忉利天より金銀水精の三つの橋をかけたけり。中の橋を佛は入らせ給ふに、佛の左には梵天、右には帝釋互に佛に天蓋をさしかけまらせ、佛の御後には四衆八部迦葉、迦旃延、目蓮、須菩提、千二百の羅漢、萬二千の聲聞、八萬の菩薩等を引具して下り給ひけるに、五天竺に有りとあらゆる人皆たえ／＼に隨ひて、油を設けてともしけり。萬燈をともす人もあり、千燈をともす人もあり。或は百燈乃至一燈をともす人もありけるに、此に貧女といふ者ありけり。貧しき事譬ふべき方もなし、身

に纏ふ物とては十府の菅薦にも及ばざる藤の衣ばかりなり。四方に馳せ走すとも一燈の代を求むるに能はず、空く歎き思ひつもれる涙、油ならましかば百千萬燈にともすとも盡きじ。思ひの餘りに自ら髪を切り、手づから鬢にひねりて、油一燈に代へて僅にぞともしたりけるに、佛神も三寶も天神も地神も納受を垂れ給ひけるにや、藍風毗藍風と申す大風吹きて燈を吹き消しけるに、貧女が一燈ばかりぞ残りたりける。此光にて佛は祇園精舎へ入らせたまひけり。之を以て之を思ふに、たのしくして若干の財を布施すとも信心弱くば佛に成らん事かなひ難し、縦ひ貧なりとも信心強うして志深からんは、佛に成らん事疑有るべからず。されば無勝德勝と云ひける者は、土の餅を佛に供養し奉りて、此の功德に依りて閻浮提の主阿育大王と生れて、終に八萬四千の石塔を造り國々に送り給ひ、後に菩提の素懷を遂げ給ふ、されば法華經にて四十餘年が程きはれし女人も佛に成り、五逆闍提と云はれし提婆も佛に成りけり。然れば末代濁世の謗法闍提五逆たる僧も俗も尼も女も、此經にて佛に成らん事疑無し。然れ者法華經第七に云く、於我滅度後一應受持此經一人於佛道決定無有疑云々、此の文こ

そよ／＼^{たの}憑しく候へ、此等をさまざま思ひつゞけて観念の床の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし。我身の内に三諦即一心三觀の月曇り無く澄みけるを、無明深重の雲引覆つ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此砌に知られつ、自ら此くぞ思ひ續けける。立わたる身のうき雲も晴ぬべしたえぬ御法の鷲の山風。

(日蓮聖人遺文録)

一〇 栗栖野の庵

兼好法師

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道をふみ分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝかけ樋の嘩ならでは、つゆ音なふものなし。閑伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、哀に見るほどに、彼方の庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをさびしくかこひたりしこそ少しことさめて、この木無からましかばと覺えしか。(徒然草)

一一 飲酒の得失

兼好法師

世には心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、まづ酒を勧め強ひ飲ませたるを興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へがたげに眉を顰め、人目をはかりて捨てむとし、逃げんとするを捕らへて引き止めてすゝろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて前後も知らず倒れ臥す。祝ふべき日などはあさましかりぬべし。あくる日まで頭痛く物食はずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日の事覺えず、公私の大事を缺きて煩ひとなる。人をしてかゝる目を見すること慈悲も無く禮義にもそむけり。かくからき目に逢ひたらむ人、ねだく口をしと思はざらんや、他の國にかゝる慣あなりとこれらに無き人事にて、傳へ聞きたらむは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上に見たるだに心憂し、思ひ入れたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのしり詞多く、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて用意無きけしき、日ごろの人

とも覺えず。女は額髪はれらかに搔き遣り、まばゆからず、顔うちさゝげてうち笑ひ
盃もてる手に取りつき、よからぬ人は肴とりて口にさしあて、みづからも食ひたるさ
まあし。聲の限り出して各謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩
ぬぎて目もあてられすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく惡し。あるは又我が
身いみじき事ども、かたはら痛く言ひ聞かせ、あるは酔ひ泣きし、下さまの人は罵り
あひ、いさかひて、あさましくおそろし、はちがましく心憂き事のみありて、果ては
許さぬものども押取りて、椽より墮ち、馬車より落ちてあやまちしつ、ものにも乗ら
ぬ際は大路をよろほひ行きて、ついひち、門の下などに向きて、えもいはぬ事どもし
ちらし、年若い袈裟かけたる法師の、小わらはの肩をおさへて聞えぬ事どもいひつゝ
よろめきたるいとかはゆし。かゝる事をして、此の世も後の世も、益あるべきわざ
ならば如何はせむ、この世にては過おほく、財を失ひ病をまうく。百薬の長とはいへ
ど、萬の病は酒よりこそ起れ、憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ過ぎにしうさをも思
ひ出で、泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ、善根を焼くこと火の如くして惡をまし

47

よろづの戒を破りて地獄に墮つべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間手無
きものに生るゝところ佛は説き給ふなれ。かくうとましと思ふものなれど、おのづか
ら捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花の下にても心長閑に物語して盃出した
る萬の興をそふるわざなり。つれづれなる日、思ひの外に友の入りきて、執り行ひた
るも心慰む。なれ／＼しからぬあたりの御簾の中より、御菓御酒など、よきやうなる
けはひして、さし出だされたるいとよし。冬せばき所にて物炒りなどして、隔て無き
どちさし向ひて、おほく飲みたるいとをかし。旅のかりや野山などにて、御肴何など
いひて芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、強ひられて少し飲みたるも
いとよし。よき人のとりわきて、今一つうへすくなしなどのたまはせたるもうれし。
近付まほしき人の上戸にて、ひし／＼と馴れぬる又嬉し。さばいへど上戸は、をかし
く罪ゆるさるゝものなり。酔ひくたびれてあさあしたる所を、あるじのひきあけたる
に、惑ひてほれたる顔ながら、細き髻さし出し、物も着あへず抱き持ち、ひきしろひ
て逃る、かひどり姿のうしろ手、毛生ひたる細腰のほど、をかしくつき／＼し。

一一一 廢

帝

北 畠 親 房

廢帝、諱は懷成、順徳の太子、御母は東一條院、藤原光子、故攝政太政大臣良經の女なり。承久三年の春の頃より、上皇思召し立つ事有りければ、俄に讓國し給ふ。順徳御身を輕めて、合戦の事をも、一つ御心にせさせ給はん御謀にや、新王に讓位ありしかども、即位登壇までもなくて軍敗れしかば、外舅攝政道家の大臣の九條の第へ逃れさせ給ふ。三種の神器をば閑院の内裏に捨て置かれにき。讓位の後、七十七ヶ日の間暫く神器を傳へ給ひしかども、日嗣には加へ奉らず。飯豊の天皇の例に準へ申すべきにこそ。元服なども無くて、十七歳にて崩れました。さてもその世の亂を思ふに、誠に末の世には迷ふ心もありぬべく、また下の上を凌ぐ端ともなりぬべし。其いはれを能く辨へらるべき事に侍り。頼朝勳功は昔より類なき程なれど、偏に天下を掌にせしかば、君として安からず思召しけるも理なり。況やその跡絶えて、後室の尼公、陪臣の義時が世になりぬれば、彼の跡を削りて、御心のまゝにせらるべしといふも、一

往の謂れ無きにあらず。然れば白河、鳥羽の御代の頃より、政道の古き姿やう／＼衰へ後白河の御時、兵革起りて、姦臣世を亂り、天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひて、その亂を平げたり。王室は古きに復るまではなかりしかど、九重の塵も收まり、萬民の肩も安まりぬ。上下堵を安くし、東より西よりその徳を服せしかば、實朝なくなりても、叛く者有りと聞えず。これに勝るほどの徳政なくして、いかで容易く覆さるべき。たとひ又失はれぬべくとも、民安かるまじくば、上天よも與し給はじ。次に王者の軍と云ふは、科有るを討じて、疵無きをば滅さず。頼朝高官に昇り守護の職を賜ふ。これ皆法皇の勅裁なり。私に盜ありとは定め難し。後室その跡を計らひ、義時久しく彼が權を執りて、人望に背かざりしかば、下には未だ疵有りといふべからず。一往の謂ればかりにて追討せられんは、上の御料とや申すべき。謀叛起したる朝敵の、利を得たるには、比量せられ難し。かゝれば時の至らず、天の許さぬ事は疑なし。但し下の上を剋するは、極めたる非道なり。終にはなか皇化に従はざるべき。まづ誠の徳政を行はれ、朝威を垂れ、彼を剋するばかりの道ありて、其上の事

とぞ覺え侍る。且は世の治亂の姿をも能く鑑みしらせ給ひて、私の御心無くば、干戈を動かさるゝか、弓矢を收めらるゝか、天の命に任せ、人の望みに従はせ給ふべかりし事にや。終にしては繼體の道も正路に歸り、御子孫の世に、一統の聖運を開かれぬれば、御本意の未だ達せぬにはあらざれど、一旦も沈ませ給ひしこそ口惜く侍れ。

(神皇正統記)

一三 爲朝の弓勢 『保元物語』

去程に夜も漸明け行くに、主も無き放馬、源氏の陣へ驅入つたり。鎌田次郎是を取らせて見るに、鞍壺に血溜り、前輪は破れて尻輪に鑿の如く鏃留れり。是を大將軍に見せ奉つて、今夜筑紫の御曹司の遊ばされてありげに候ふ。あないかめしの御弓勢やと申しければ、義朝、八郎は今年十八九の者にてこそあれ。未だ力も固まらじ、夫は敵を懼さんとして作りてこそ放しけめ。夫には臆すべからず。汝向て一當富て、見よと宣へば、さ承り候ふとて、正清百騎計にて押寄せて、下野守の郎等に相摸國の住人鎌田

次郎正清と名乗りければ、さては一家の郎從ござんなれ。大將軍の矢面をば引き退けと宣へば、本は一家の主君なれども、今は八逆の兇徒なり。違勅の人々討取つて高名せよや者共と、云ひも果さず、能引いて放つ矢が、御曹司の半頭はつがにからりと中つて、冑の鏝しころに射付けたり。爲朝餘りに腹を立て、この矢を搔擲かつかたつて投捨て、おのれ程の者をば矢たふなに、手取にせんとて驅け給へば、須藤九郎家末、悪七別當以下、例の二十八騎續きたる。正清叶はじとや思ひけん、百騎の勢を引具して、河原を下りに五町計振ひく逃げたりけり。御曹司は弓をば脇に搔挟み、大手を廣げて、何處まで、何處までと追はれけるが、さのみ長追なせそ。判官殿は心こそ猛くおはしませども年老ひ給ひぬ。残りの人々は口はきき給へども、さのみ心惡からず。小勢にて門破らるな。返せやとて引返す。鎌田は河原の西へ引けば、大將軍の陣の前、敵の追懸けんも悪しかりなと思ひて、眞下まくだりに逃げたりけるが、敵引返すと見てければ、河を直達すじかつに馳渡して、遁參つて候ふ。坂東には多くの軍に逢うて候へども、是程軍立烈しき敵に未だ逢はず候ふ。雷電いかづちなどの落ちかゝらんは、事の數にも候はじと申しければ、義朝

夫は聞ゆる者と思ひて怖づればこそあらめ。八郎は筑紫そだちにて、舟の中にて遠矢を射、徒立などは知らず、馬上の業は坂東武者にはいかで及ばん。馳雙べて組めや者共と下知せられければ、相摸國の住人須藤刑部丞俊道、其子瀧口俊綱、海老名源八季定、秦野次郎延景等を始として、二百餘騎にて追驅けたり。爲朝寶莊嚴院の西裏にて返合せて、火出づる程ぞ戦うたる。大將は赤地の錦の直垂に黒糸絨の鎧に、鍬形打たる冑を着、黒き馬に黒鞍置いて乗つたりけり。鎧ふん張り突立上り、大音揚げて清和天皇九代の後胤下野守源義朝、大將軍の勅命を蒙つて罷向ふ。若一家の氏族たらば、速に陣を開いて退散すべしとぞ宣ひける。爲朝聞きも敢へず、嚴親判官殿院宣を蒙り給ひて、御方の大將軍たるその代官として、鎮西八郎爲朝一陣を承つて堅めたりとぞ答へける。義朝重ねて、さては遙の弟ござんなれ。汝兄に向つて弓引かんこと冥加なきにあらずや。且は宣旨の御使なり。禮儀を存せば弓を伏せて降参仕れとぞ申されける。爲朝又兄に向つて弓引かんが冥加なしとは理なり。正しく院宣を蒙つたる父に向つて弓引き給ふはいかにと申されければ、義朝道理にや詰められけん、その後は音も

せず。武藏相摸のはやり男の者共が、幕地に撃て懸るを、爲朝暫し支へ防ぎければ、敵は大勢なり、驅隔てられては判官の爲悪しかりなんと思ひて、門の中へ引き退く。敵是を見て防ぎかねて引くとや思ひけん、勝に乗つて門の際まで攻付けて、入替へ々揉うたりけり。爰に爲朝敵の勢ごしに見れば、大將義朝大の男の大なる馬には乗たり、人に勝れて軍の下知せんとして突立舉りたる内冑、誠に射好げに見えければ、願ふ所の幸得たりと悦んで、件の大矢を打番ひ、只一矢に射落さんと打撃けるが、待て暫し、弓矢取る身のはかりごと、汝は内の御方に参れ、我は院方へ参らん、汝負けは頼め助けん、我負けは汝を頼まんなど約束して、父子立別れてかおはすらんと思案して、番ひたる矢をさしはずす、遠慮の程こそ神妙なれ。すべて八郎の矢に中る者助かる者ぞなかりける。されば罪作りと思はれけん、名がつて出づる者ならでは左右なく射給はざりけり。長井の齋藤別當實盛、弟の三郎實員、片桐小八郎太夫景重、須藤瀧口以下、宗徒の兵攻入りく戦ひければ、悪七別當、手取の與次、高間三郎、同じき四郎、吉田太郎以下、爰を前途と防ぎけり。片桐小八郎太夫に手取の與次を驅合ひ

ける。與次は若武者なり、景重は老武者なる上、戦ひ疲れて既に危く見えける所を、秩父行成馳合ひて、よつ引いて發つ矢に、與次が馬手の草摺の端を射させて引退けば、景重勝つに乗つてぞ驅入りける。御曹司、須藤九郎を召して、敵は大勢なり。若矢種盡きて打物にならば、一騎が百騎に向ふとも、終には叶ふまじ。坂東武者の習、大將軍の前にては、親死に子撃たるれども顧みず、彌が上に死に重つて戦ふとぞ聞く。いざさらば大將に矢風負はせて、引退けんと思ふは如何にと宣へば、家末然るべく候ふ但し御過り候はんと申しければ、何條さる事あるべき。爲朝が手本は覺ゆるものをとて、例の大矢を打番ひ、固めてひようと射る。思ふ矢壺を誤らず、下野守の冑の星を射削りて、餘る矢が寶莊嚴院の門の方立に籠中責めてぞ立つたりける。其時義朝手綱搔繰り打向ひ、汝は聞及ぶにも似ず、無下に手こそ荒けれと宣へば、爲朝、兄にて渡らせ給ふ上、存する旨ありて斯くは仕り候へども、誠に御許を蒙らば、二の矢を仕らん眞向内冑は恐も候ふ。障子の板か、梅檀弦走か胸板の真中か、草摺ならば一の板とも二の板とも矢壺を慥に承つて仕らんとて、既に矢取て番はれける所に、上野國の住人

55

深巢七郎清國つと驅寄せければ、爲朝是を弓手に相請けてはたと射る。清國が冑の三枚板より直達まじかに左の小耳の根へ籠中ばかり射込んだれば、暫もたまらず死ににけり。須藤九郎落ち合ひて、深巢が首をば取てけり。是をも事ともせず、我れ先きにと驅ける中に、相摸國の住人大庭平太景義、同じき三郎景親、眞先に進んで申しけるは、八幡殿後三年の合戦に、出羽國金澤の城を攻め給ひし時、十六歳にして軍の眞前驅け鳥海三郎に左の眼を冑の鉢付の板に射付けられながら、答の矢を射返して、其敵を取りし鎌倉權五郎景正が末葉、大庭平太景義、同じき三郎景親とぞ名乗つたる。御曹司是を聞き給ひ、西國の者共には皆手なみの程を見せたれども、東國の兵には今日始の軍なり、征矢をば度々射たりしが、鏑矢にて射ばやと思ひ、目九つさし鏑の、目柱には角を立て、風返厚く剗らせて鏑卷に朱さしたるが、普通の墓目程なるに、手先六寸鏑を立て、前一寸には峰にも刃をぞ付けたりける。鏑より上十五束ありけるを取て番ひ、ぐさと引いて發されたれば、御所中に響いて長鳴し、五六段ばかりに控へたる大庭の平太が左の膝を、片手切にふつと射切り、馬の太腹かけす通れば、鏑は碎けて散

りにけり。馬は屏風を倒す如く、がばと倒るれば、主は前へぞ餘されける。敵に首を取られじと弟の三郎馬より飛下り、兄を肩に引懸けて、四五町計を引いたりける。

一四 常盤六波羅に参る事 「平 治 物 語」

さる程に清盛は、義朝が子共、常盤が腹に三人ありと聞きて、而も皆男子なり尋ねよとありしかば、常盤が母を召出して問はれける程に、左馬頭殿討たれ給ひぬと聞えし日より子共引俱して何地ともなく迷ひ出で侍りぬ。いかでか知り侍らんと申しければ何條其母を擲取て尋ねよとて、六波羅へ召出し、様々に誠め問はれけり。母泣くく申しけるは、我六十に餘る身の命、今日明日も知らぬ老の身を惜みて、未だはるかなる孫共の命をばいかでか失ひ侍るべきなれば、知りたりとも申すまじ、まして知らぬ行末、何とか申し候はんと口説きければ、水火の責にも及ぶべかりしを、常盤、宇多郡にて此由傳へ聞き、母の爲に憂目に逢はんは如何せん、我故母の苦しみを見給ふらんこそ悲しけれ。佛神三寶もさこそ悪しと思召すらめ。子共は僻事の子なれば、終に

失はれこそせんすらめ、隠しも果てぬ子ども故、科なき母の命を失はん事の悲しさよと思へば、三人の子共引俱して都へ上り、本の住家に行きて見れば人も無し。こは如何にと尋ねれば、あたりの人一日六波羅へ召され給ひしが、未だ歸り給はずとぞ答へける。常盤まづ御所へ参りて申しけるは、女の身の果敢なさは、若片時も身に添へてや見ると、此幼き者共引俱し、片田舎に立忍びて侍りつるが、わらは故行方も知らぬ老いたる母の、六波羅へ召されて、憂目に逢ひ給ふと承れば、餘りに悲しくて恥をも忘れて参りたり。早々幼き者と諸共に六波羅へ遣らさせましくて、母の苦しみを止めて給はり候へと申せば、女院を始め進らせて有りとする人々、世の常は老いたる母をば失ふとも、後世をこそ弔はめ、少き子共をば如何殺さんと思ふべきに、子共をば失ふとも母を助けんと思ふらん有難さよ。佛神も定めて憐み思召すらん、年來此の御所へ参るとは、皆人知れりとして、尋常に出立たせて、親子四人清げなる車にて、六波羅へぞ遣はされける。見馴れし宮の内も今日を限りと思ふには、涙も更に留まらず、名をのみ聞きし六波羅へも近づけば、屠所の羊の歩みとは、我が身一つに知られたり。

常盤既に参りしかば、伊勢守景綱申次にて、女の心の果敢なさは、暫も若や身に添へ侍ると、少き者相俱して片邊土へ忍びて侍りつるが、行方も知らぬ母を召置かせおはしますと承つて、御尋の子共俱して参り候ふ。母をば疾く／＼助けおはしませと撮口説きければ、聞く人涙をば流しける。清盛、此由聴き給ひて、まづ子共相俱して参りたる條神妙なりとて、やがて對面し給へば、二人の子は左右の脇に在り、幼きをば抱きけり。涙を抑へて申しけるは、母は元より科なき身にて候へば、御免し候ふべし。子共の命を助け給はんとも申し候はず。一樹の下に住み、同じ流を渡るも、この世一つの事ならず。高きも卑しきも親の子を思ふ習、皆さこそ侍らめ、わらはは子共を失ひては、甲斐なき命片時も堪へて在るべきとも覺え候はねば、先づわらはを失はせ給ひて後、子共をば兎も角も御はからひ候はば、此世の御情後の世までの御利益、是に過ぎたる御事候はじ。永へて夜晝歎き悲まん事も罪深く覺え侍ると、口説きければ、六つ子、母の顔を見上げて、泣かで能く申させ給へと云へば、母はいよ／＼涙にぞ咽びける。さしも心強げにおはしつる清盛も、頻に涙の進みければ、押拭ひ押拭ひして、

さあらの體にもてなし給へば、さばかり猛きつはもの共皆袖をぞ絞りける。忍びあへの輩は、多く座席を立たれけるとかや、常盤は今年二十三、梢の花は且散りて、少し盛は過ぎたれども、中々見る所あるにことならず、もとより眉目形人に勝れたるのみならず、幼きより宮仕して、物馴れたる上、口き、成しかば、理正しう思ふ心を續けたり。緑の黛、紅の涙に亂れて、物思ふ日數經にければ、その昔にはあらねども、打萎れたる様、猶世の常には勝れたりければ、この事無くてはいかでか斯る美人をば見るべきと申せば、或人語りけるは、能くこそ實にも理よ、伊通大臣の中宮の御方へ人の眉目好からんを進らせんとて、九重に名を得たる美人を千人召されて百人選び、百人が中より十人選び、十人が中の一とて、この常盤を進らせられしかば、唐の楊貴妃漢の李夫人も是には過ぎじ者と云へば、見れども見れどもいよ／＼珍なるも理かなとぞ申しける。さる程に母は免されけるに、この孫共を失ひて、明日をも知らぬ老の身の助りても何かせん。うたての常盤や。老の命を助けんとて、彼の子共をば何しに俱して参りけん。四人の子共の事を思はんより。只老の身を先づ失はせ給へとて、泣

悲みけるも理なり。足音の荒なるをも、今や失はるゝ使なるらんと肝を消し、聲高に物云ふをも、早その事よと魂を失ひけるに、大貳宣ひけるは、義朝が子共の事、清盛が私の計に非ず、君の仰を承て執行ふばかりなり。伺ひ申して朝議にこそ従はめと宣へば、一門の人々並に侍共、如何に加様に御心弱き仰にて候ふやらん。この三四人成長候はんは只今の事なるべし。君達の御爲、末代懼しくこそ候へと申せば、清盛誰もさこそ思へども、長しき頼朝を池殿の仰にて助置く上は、兄をば助け幼きを誅すべきならねば、力なき次第なりと宣ひけり。常盤は母子共の命今日に延ぶるも、偏に觀音の御計と思ひければ、いよゝ信心を致して普門品を読み奉り、子共には名號をぞ唱へさせ給ひける。斯くて露の命も消えやらで、春も半暮れけるに、兵衛佐殿は伊豆國へ流さると聞えしかば、我が子共は何處へか流されんと、膽を消し伏沈みけるが、幼ければとて流罪の議にも及ばざりけり。

一五 紅 葉

『平家物語』

高倉院御在位の御時、人の順附奉る事は、恐らくは延喜天曆の帝と申す共、是には争で増らせ給ふべきとぞ人申ける。大方は賢王の名を揚げ、仁徳の行を施させ御座す事も、君御成人の後清濁を分たせ給ての上の御事でこそ有るに、無下に此君は、未だ幼主の御時より、性を柔和に受けさせ御座す。去ぬる承安の比はひは、御年十歳許にもや成せ御座けん、餘りに紅葉を愛せさせ給て、北の陣に小山を築せ、櫛雞冠木の誠に色うつくしう紅葉たるを植させ、紅葉の山と名附て、終日に叙覽有るに、猶飽足らせ給はず。然るを或夜野分はしたなう吹いて、紅葉皆吹散し、落葉頗る狼籍なり。殿守の伴の造、朝淨すとして、是を悉く掃き捨てけり。残れる枝、散れる木葉をば掻集めて風寒じかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒煖めてたべける薪にこそしてけれ。奉行の藏人、行幸より先にと、急ぎ行きて見るに、跡形なし。如何にと問へば、しかく答ふ。あな淺まし。さしも君の執し被思召つる紅葉を、かやうにしつる事よ。不知汝等、禁獄流罪にも及び、我身も如何なる逆鱗にか預らんすらんと、思はじ事なう案じ續けて居たりける處に、主上いとしく、夜の殿を出でさせも敢ず、彼處へ行幸

成て、紅葉を窺覽有るに、無りければ、如何にと御尋有りけり。藏人何と可_レ奏旨もなし。有りの儘に奏聞す。天氣殊に御快氣に打笑ませ給て、林間燗酒焼紅葉と云ふ詩の心をば、されば其等には誰が教へけるぞや。優うも仕つたる物哉とて却て窺感に預つし上は、敢て勅勘無かりけり。又安元の比ほひ、御方違の行幸の有りに、さらでだに雑人曉唱聲、明王の眠を驚かす程にも成りしかば、何も御寢覺がちにて、つや_く御寢も成らざりけり。況や互る霜夜の烈きには、延喜の聖代 國土の民が如何に寒かるらんとて、夜の殿にして、御衣を脱がせ給ひける事など迄も、思召出て、吾が帝徳の至らぬ事をぞ御歎き有りける。良深更に及んで、程遠く人の叫ぶ聲しけり、供奉の人々は聞きも附けられず。主上は聞召て、唯今叫ぶは何者ぞ、あれ見て參れと仰せければ、上臥したる殿上人、上日の者に仰せて尋ねければ、或辻に、怪の女童の長持の蓋提げたるが、泣くにてぞ有りける。如何にと問へば、主の女房の、院の御所に侍はせ給ふが、此程漸々にして、被_ニ仕立_一たりつる衣を持つて參る程に、唯今男の二人詣來て、奪取つて罷りぬるぞや。今は御装束が有らばこそ、御所にも侍はせ給は

め。又はか_くしう立宿らせ給ふべき親しき御方も坐さす。是を思ひ續くるに泣くなりとぞ言ひける。さて彼の女童を具して參り、此由奏聞したりければ、主上聞召て、あな無慚、何者の云爲にてか有るらんとて龍顔より御涙を流させ給ふぞ忝き、堯の代の民は、堯の心の直なるを以て、心とする故に皆直なり。今の代の民は、朕が心を以て心とする故に、奸しき者朝に在つて罪を犯す。是吾が恥に非ずやとぞ仰せける。さるにても取られつらん衣は、何色ぞと仰せければ、然々の色と奏す。建禮門院、其時は未だ中宮にて渡らせ給ふ時なり。其御方へ、左様の色したる御衣や候と、御尋ね有りければ、先のより遙に色美しきが參りたるを、件の女童にぞ賜はせける。未だ夜深し、又さる目にもぞ逢ふとて、上日の者を數多附けて、主の女房の局まで送らせ坐けるぞ忝き。されば怪の賤の男、賤の女に至るまで、唯此君千秋萬歳の寶算をぞ祈り奉る。

一六 小原御幸

「平家物語」

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居の御栖居、御覽せまほしう思召されけれ共、二月彌生の程は、嵐烈う餘寒も未だ盡きず。峯の白雪消えやらで、谷の垂氷も打解けず。かくて春過ぎ夏來て、北祭も過しかば、法皇夜をこめて小原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれ共、供奉の人々には、徳大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、彼清原深養父が補陀樂寺、小野皇太宮の舊跡、叡覽有て、其より御輿にぞ召されける。遠山に懸る白雲は、散にし花の形見なり。青葉に見ゆる稍には、春の名残ぞ惜まる。頃は卯月廿日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分き入せ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴たる方も無く、人跡絶えたる程も思召知られて哀なり。西の山の麓に、一字の御堂有り、即ち寂光院是なり。舊う造りなせる泉水木立、由有る様の所なり。蔓破霧焼ニ不斷香、扉落月挑ニ常住燭とは斯様の所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草浪に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待顔なり。法皇是を叡覽有て、かくぞあそばされける。

池水に汀の櫻散布て浪の花こそ盛なりけれ。

舊にける岩の絶間より、落來る水の音さへ、故び由ある所なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書く共筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には葛朝顔這ひかゝり葱交りの萱草、瓢箪屢空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも謂つべし。杉の茸目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に争ひて、堪るべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いざ、小篠に風噪ぎ、世に立たぬ身の習として、憂即滋き竹柱、都の方の言傳は、間遠に結へる猿垣や、僅に言問ふものとは、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、是等が音信ならでは、まさきの葛青つゝら、來る人稀なる所なり。法皇人や有る、人や有ると召されけれ共、御いらへ申す者もなし。良有つて、老衰へたる尼一人参りたり。女院は何くへ御幸成りぬるぞと仰せければ、此上の山へ花摘に入らせ給て侍ふと申す。さこそ世を厭ふ御習と云ひながら

左様の事に仕へ奉るべき人も無きにや、御痛しうこそと仰せければ、此尼申けるは、
 五戒十善の御果報の盡きさせ給ふに依て、今かゝる御目の御覽せられ侍ふにこそ。捨
 身の行に、なじかは御身を惜ませ給ひ侍ふべき。因果經には、欲知過去因、見其現在
 果、欲知未來果、見其現在因と説かれたり。過去未來の因果を兼ねて悟らせ給なば、
 つや／＼御歎有るべからず。昔悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓に
 て、木葉を聯ねて膚を隠し、嶺に上りて薪を取り、谷に下りて水を掬ひ、難行苦行の
 功に依てこそ、遂に成等正覺し給きとぞ申ける。此尼の有様を御覽すれば、身には絹
 布の分も見えぬ物を結び集めてぞ著たりける、あの有様にても、斯様の事申す不思議
 さよと思召て、抑汝は如何なる者ぞと仰せければ、此尼さめ／＼と泣いて、暫は御返
 事にも及ばず。良有て、涙を抑へて申すに附けて憚り覺え侍へ共、故少納言入道信西
 が女、阿波内侍と申す者にて侍ふなり。母は紀伊二位、さしも御いとほしみ深うこそ
 侍ひしに、御覽じ忘れさせ給ふに附けても、身の衰へぬる程思ひ知れて、今更詮方な
 うこそ侍へとて、袖を顔に押當て、忍びあへぬ様、目も當られず。法皇げにも汝は阿

波内侍にて有るござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事に附ても唯夢とのみこ
 を思召せとて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼
 哉と思たれば、理にて申けりとぞ、各感じ合れける。さて彼方此方を御覽有るに、庭
 の千草露重く籬に倒懸りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見え分かず。さて
 女院の御庵室へ入らせ御座し、障子を引開けて御覽有るに、一間には來迎の三尊御座
 す。中尊の御手には、五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並
 に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薫に引替へて、
 香の煙ぞ立上る。彼の淨名居士の方丈の室の中に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛
 を請じ給ひけんも角やとぞ覺えける、障子には諸行の要文共、色紙に書いて所々に押
 れたり。其中に大江定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙聞孤雲上、聖衆
 來迎落日前とも書れたり。少し引退て、女院の御製と覺しくて

思きや深山の奥に栖居して雲井の月を餘所に見んとは
 さて傍を御覽有るに、御寢所と覺しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸け

られたり。さしも本朝漢土の妙なる類敷を盡し、綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞ成りにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人もまのあたり見奉りし事共、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。や、有つて上の山より、濃墨染の衣著たりける尼二人、岩の缺路かきちを傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇、あれは如何なる者ぞと仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐臂にかけ、岩躑躅取具して持せ給うて侍ふは女院にて渡らせ給ひ侍ふ。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局と申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習と云ながら、今かゝる有様を見え參せんすらん慚しさよ、消えも失せばやと思召せ共甲斐ぞなき。宵々毎の關伽の水、掬ふ袂も絞るゝに、曉起の袖の上、山路の露も滋くして、絞りや兼ねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、又御庵室へも入らせ御座さす、あきれ立たせ坐ましましたる所に、内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜りけり。

一七 有王硫黄嶋に渡る事 『源平盛衰記』

法勝寺の執行俊寛は、此人々に捨てられつゝ、鳥の栖守すもりと成りはて、事問人もなかりけるに、僧都の當初世そのかみに有りし時、幼少より召仕ける、童の三人粟田口邊に有りけるが、兄は法師に成りて法勝寺の一の預よづかなり、二郎は龜王、三郎は有王とて、二人は大童子なり。彼の龜王は僧都の流されて、淀に御座處おぼとこへ尋行きて、最後の御供是こそ限なれば、何所までも參り侍るべしと、泣々申けるを、僧都は誠に主従の好み、昔も今も淺からすと云ひながら、多くの者共有りつれ共、世の中に恐れて問來る者もなし其恨にあらず、數多の中に尋來て、かく申こそ返々も志の程うれしけれ。但し我に限らず、少將も判官も、人一人も隨へすところ聞け、御免あらば幾人いくたりも具したうこそあれ、され共其義なれば力及ばず、誠や薩摩國硫黄島とかやへ流さるべきと聞けば、命ながらふべしとも覺えず、路の程にて果敢なくもやならんすらん、我身の事は今はさて置き、都に残置く女房幼者共の、心苦きに彼の人々に付て、朝夕の事をも見繼ぐべ

し、我に随はんに露劣るまじ、疾く歸上れなど、泣々宣ひ通はす處に、宣旨の御使又六波羅の使何事申童ぞと怪み尋ねける恐しさに、龜王名殘は惜けれども泣々都へ歸り上りけり。其弟に有王と云ひけるは、僧都に別れて後仕はんと云ふ人在りけれ共、宮仕もせず、大原、閑原、嵯峨、法輪貴き所々に迷ひありきて、峯の花をつみ、谷の水を結びて、山々寺々に手向奉り、我主に今一度合せ給へと、夜盡心をいたして祈りけるこそ不便なれ。かくて三年を経て、少將と判官入道と都へ遷り上りぬと披露有りければ、有王我主の事何に成り給ぬるやらんと、覺束なく思うて、此の人々の迎に行きたりける人に逢うて尋問ば、上りしまでは御座き二人に捨てられて、歎き悲み給し事、二人舟に乗り給しに、舩に取付て、遙に出で給たりし事、陸に歸り上つて濱の砂に倒れふし給ふ事、委しく語り答へければ、有王涙を流して、さては未だ此世に御座するにこそ、誰育み誰憐み奉んと悲くて、有王は只一人をあくがれ出で、未知らぬ薩摩潟、硫黄が島へ遙々とこそ思ひ立て、先づ奈良に行き僧都の姫の御座しけるに、かくと申て御文を賜はりけり。姫宣ひけるは、我身果報なき者と生れて、父には生きて別

れの、母と妹には死して後れの。多くの人の中にかく思立ける志の嬉さよ、餘りに父の戀しく思ひ侍れば、男子の身ならば走連ても行かまほしく侍れとも、女とて叶はぬ事の悲さよ。御文慥に進らせて、相構へて疾して御上りあれと申べしとて、やがて倒れ臥し、聲も惜ます泣きければ、童も俱に袖を絞る。唐船の纜は、四月五月に解く習にて、有王は夏衣たつを遅しと待兼て、卯月の末に便船を得、海人が浮木に倒れつゝ、波の上に浮ぶ時は、波風心に任せねば、心細き事多かりけり。歩みを陸地に運びて、山川を凌ぐ折は、身疲せ足泥れ絶入る事も度々なり。され共主を志しにて行く程に、日數も漸く積りければ、鬼界が島にも渡りけり。此島のありさま都にて傳聞しよりも面のあたり見るは堪へて有るべき様なし。峯には燃上るほむら、行客の魂を消し谷には鳴下る雷、旅人の夢を破る。山路に日暮れぬれども、樵歌牧笛の音も無く、海上に夜を明せば、松風白浪心をいたましむ。童何事に付けても、慰む思なければいかすべし共覺えざりけれとも、主の行末の悲さに、谷に下りて尋ねれば、岩漏る水に補しほれ、峯に上つて求むれば、松吹く嵐ぞ身にしみける。兎にも角にも叶はねば、

唯涙を流して立たりけり。去程に島の住人と覺しくて、木の皮をばねかつらとして、額に巻き、赤裸にてむつきをかき、身には毛太く長く生ひて、長は六七尺計なる者ぞ遇ひたりける。有王嬉くて云ひけるは、此島に法勝寺の執行僧都の御房御座し候なるは、何所にて候やらんと問ひければ、打見たる計にて、物も云はざりけり。法勝寺とも執行とも、争か知るべきなれば、答へざるも理なり。自ら言ふことも、有りけれども、つやく聞き知らざりければ、いと力なく覺えけり。せめては死に給たりとも、其骸骨は御坐らん、彼れをなりとも尋ね得て、形見ともするならば、いかばかり限りなく、志の甲斐も有るべきに、御行方をだにも知らずして、空く都へ歸上らん事の悲さよと思つて、猶深く山邊に尋入たれども、我主に似たる人もなし。立歸り遙々浦路に迷出たれば、磯の方よりうごき來る者あり。只一所に動立様なり、其形を見るに童かとすれば年老て其貌にあらず、法師かと思へば又髪は空様に生ひあがりて、白髪多く銀の針を立てたるが如し。萬の塵や藻屑の付きたれ共打拂はず、頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人にして人に似ず、左右の手には、小き生魚を二三つ

と把り、腰の廻りには荒和布を取纏付けて、さげびきて、凡そ力もなげなり。童思ひけるは、あはれ我主のかく成り給たるにもや在らん、いかにといへば、若干の法勝寺領を知行し給ひながら、修理造營をばし給はず、恣に三寶の信施を受け、あくまで伽藍の寺用を貪り給へし罪の報に、生ながら餓鬼道に落ち給たるやらん、餓鬼城の果報こそ、頸は細く腹は大に、色黒くして首蓬の如く有りとは聞くなど、種々に思ふにいと悲くて近付き能々見れば、手も足もさすが人には違はず、都にも老衰へたる者もあり、片輪なる人もあり、されば此島にも此る者も有るにこそと思つて問ひければや、一年此島へ三人流され給たりし人の二人は免されて上り給ぬ、今僧の一人御座すなる、いづくにぞと云ひければ、僧都は貌こそ衰へたりけれども目と心とは昔に替らず、童をば慥に我召仕し有王とぞ思されける。童は主の餘りに衰へ損じたれば、僧都とは知らざりけれ共、さすが又何とやらん覺えてつくぐとまもり立ちたり。僧都は顔の色をとかく變じて種々にぞ思ひける。我こそ俊寛よと名乗らんとすれば、果報こそ拙くてかゝる身とならんからに、心さへ替りけるよと思はん事も愧し、恥を見んよ

りは死をせよとこそ云ふに、さこそあらんからに、僧形として生魚を手に把りたる心憂
 さよ、只知らざる様にて過ぐさばやと千度百度案じけるが、又思ひけるは、此島にて
 は疎く知らざる者なりとも、都がりの人に遇ひたらんは嬉く珍らしかるべし。況ん
 や年頃の主を悲みて、遙々と尋ね來たらん者を、其志を失ひ、空く上せん事、いと不
 便なり。我も又問ひ聞きたき事も多しと、思返して手に把りたる魚をば後へ廻し、さ
 りげなき様に抛げて、あれば有王がいかにして是までは尋ね來れるぞや、我こそ俊寛
 よ、あな珍しやく、己一人を見れば、捨別れし妻子も住み馴れし古郷も、皆見つる
 心地のするぞや、いかにくとして、手すり足すり喚き叫びけり。其時こそ有王も、儲
 の主とは思ひけれ。かゝる様も有りけるにや、昔輕大臣の遣唐使に渡されて、形を他
 州にやつされ。燈臺鬼となされつゝ、歸る事を得ざりけり。子息弼宰相、其行方の覺
 束なさに、大唐國に渡つて尋ぬれ共く、目の前にありながら、明す者こそ無かりけ
 れ。父は子を見知りつゝ、かくと云はまほしけれ共、物の言はぬ藥をのませ、瘧にな
 されたりければそも叶はず、額に燈臺を打れつゝ、宰相に向つて只泣より外の事なし

宰相はやつれたる父なれば、面を並べて知らざりけり。燈臺鬼涙を流しつゝ、指端を
 食切りて、其血を以て宰相が前にかくぞ書きつゞける。我は日本花京客、汝則同姓
 宅人、爲父爲子前世契、隔山隔海戀情苦、經年流淚宿蓬蒿、逐日馳思親蘭菊、
 形破他州成燭鬼、爭歸舊里寄斯身、と書きあらはしたりけるにこそ、宰相は我
 父の輕大臣とも知りけれ。執行も三年の思に衰へ瘦せ、あらぬ形に成りたれば、知ら
 ざりけるも理なり。我こそ俊寛よと名乗けるより、有王は流す涙もせきあへず、僧都
 の前に倒伏し、やゝ久く物も云はず、さても老たる母を見捨、親しき者にも知られず
 して、都を出でて遙の海路を漕ぎ下り、危く浪間を分け凌ぎ参りしには、縦ひ疲れ損
 じ給たり共な、めなる御事にこそ侍るに、見忘るゝ程に衰へさせ給ける口惜さよ、日頃
 都にて思やりまゐらせけるは、事の數にても侍らざりけり。まのあたり見まゐらす
 御有様、うつゝ共覺え候はず。さればいかなる罪の報にて、かくわたらせ給ふらんと
 て僧都の顔をつくくとももりつゝ、さめくんとぞ泣臥したる。童や、在つて起きあ
 がりければ、僧都も又起直りて、泣々宣ひけるは、此島は遙なる海中、遠き雲のよそな

れば、おぼろげにても人の通ふ事なし。己が兄の龜王が、淀まで訪ひ下りしをこそ、有難く嬉しき事と思しに、有王が是まで思立ち見え來る事、實に現とも覺えねば、もし夢にてや有るらん、やをれ有王、さらばなか／＼如何に悲しからん。そも戀しき者を見つれば、嬉しなどは云ふも疎なり、さても少將と判官入道との有りし程は、憂事悲き事云ひ續けては泣いつ、思出有りし昔物語をしては笑ひつ互に慰みしに、打捨られし後は、一日片時堪へて有るべし共覺えざりしに、甲斐無き命の永らへて、互に相見つる事の嬉しさよ。斯程の有様なれば、何事を思ふべきにあらね共、都に殘留りし者共の、忘るゝ間なく戀しく聞かまほしけれども、心に任せぬ旅なれば、其も叶はず是程の志の有りけるに、などや此三年までは間はざりけるぞ。少將の迎の時は、何文一つは傳へざりけるぞと宣ふ。重申けるは、事もおろかに思召けるか、君西八條殿へ召籠られさせ給し後は、御あたりの人をば、上下を云はず搦捕て、獄舎に入れられ家財を壊り取りしかば、恐をなし近習の人々も、思々に落失せぬ。北の方も鞍馬の奥、大悲山に忍ばせ給しが、明ても暮ても御歎淺からず、見えさせ給し程に、其の積りにや日

頃惱ませ給しが、去年の冬遂にかくれ御座しぬと申も果てぬに、僧都はあな哀や、さては女房は早果敢なく成給けるにこそ、慰む便もなく知れる人も無き、我だにもかゝる島の有様に、三年の今までも在ぞかし、さすが人は少き者共も數多有りき、我を見るときも思成してこそ有るべきに、若や姫をば誰がはこぐめとてかくれ給ひけるぞや。それにつけても、難面かりける我命かなとて、又臥倒給ひけるに、有王泣々重ねて申けるは、若君は父のわたらせ給ふなる所は何所やらん、尋ね參れと仰せ候へしかども故北の方のあなかしこ其方の方と知らすな、幼き心に走り出で、行方も知らす失する事もこそと承りしかば、知らせまゐらす人も候はざりし程に、人の煩ひ合うて侍りし、疱瘡と申御いたはりに去ぬる五月に又失せさせ給にきと云ひければ、僧都又臥倒れて、やをれ有王。今はかゝる憂事をば、な語りそとよ、三人が中に法師一人捨置れぬれば、都に還上り、再び妻子を相見る事はよもあらしなれども、さても有らんと思やれば、慰む事も有るにや、いつを限に惜むべき身ならねども、此を聞き、彼を聞くに、絶入ぬべき心地なり。よし／＼今はな語りそと云ひけるこそ、せめての事と哀なれ。

有王申けるは、姫御前は奈良の姨御前の御許に御渡と承つて此島へ思立候、御言傳やと申入て候へしかば、端近く出でさせ給ひ、な、めならず御悦び有つて、あはれ女の身程甲斐無き事はあらず、我身も父の戀しさは、己にや劣るべき、類ふべき方なし、思立つべき道ならねば力なし、さても多き人の中に、一人思立つらん嬉しさよ、平らかに参り著きたらば、進らせよ迎御文あり、御詞には替りぬる世の恨に筆の立ちところも覚え侍らす、泣々申候へば、文字も定かならず、御覽じ悪くこそわたらせ給はんすらめ、御返事をも待ち見まゐらせば、いか計かはと申せとこそ仰せ候へしが、昔ならばかく直に承るべしやと、哀に思ひまゐらせて、落る涙を押へつ、奈良を出で、罷り下りし程に、門司赤間の關より始めて、硫黄が島へわたると申者をばあやしめ、文などや持ちたると求め搜ると承りしかば、御文をば本結の中に結び籠めて、難有して持て参りたりとて、取出して之を奉る。僧都は悲さの中にも嬉しく珍しく思つて、涙押し押し拭ひ拭ひ見給へば、「其後便りなき孤兒と成果て、御向後をも承る便もなし身の有様をも知られまゐらせず、いふせさのみ積れども、世中かきくらして、晴る、

心地なく侍り。さても三人同じ答とて、一ツ島に移されけるに、二人は免さるゝに、どや御身一人殘留り給ふらんと、人知れの歎き唯思召しやらせ給へ、人々島へ流され給うて後、其の所縁の者をば尋求めて、手足を損じて責問ふべしなど聞え侍りしかば召仕ひし者共も、遠く國々へ落失せて、舊里に一人も留らざれば、都には草のゆかりも枯果て、立紛るべき方もなく、あはれいと惜しと事問ふ人もなし、君達も召捕るべきなど聞えしかば、母御前弟我身二人引具して、幽なる便りに付いて、鞍馬の奥とかやに迷入り、日數も見えぬ山里に、住みも習はぬ柴の庵に、忍居て候へし程に、朝夕は御事をのみ歎き給しに、打副ひ稚き身々の向後いかにせんと隙なき御物思の積りにや、病と成らせ給たりしかば、弟と二人とかく勞はり慰め進らせしか共、叶はずして空しく見成し進らせぬ。生きての別れ、死しての別れ爲方なければ、二人歎き暮し泣き明し侍りし程に、又弟も痲瘡とかや申勞りをして今年の五月に身まかり侍り、同じ道にと歎きしか共、果敢なき露の命と云ひながら消えもやらで強面く今までは草の庵に殘留つて侍れば、憂事も悲き事も思召知るべし、拙き果報の程こそ、宿世の身の

勤め辱しく思ひ侍れ、故母御前御いたはりの時、我死なば誰をか便りと憑み御座すべ
 き、奈良の里に姨母と云ふ人御座す、尋ね行き打敷かば、さり共憐み給はんすらんと
 仰せ候へしを承り置いて、當時は奈良の姨母御前の御許に侍り、疎なるべき事にはあ
 らねども、幽なる住居推量り給へ。さても此三年まで、いかに御心強く有とも無とも
 承はらざるらん、母御前にも弟にも後れて、憑む方なし誰に預けいかにせよと思召に
 か疾くして御上り候へ。戀し共戀し、床し共床し、三年の思ひ歎き、水莖に盡し難く
 侍れば留り候へぬ、穴賢々々」と裏書端書うらがきはしめがきしけ滋く薄く亂れ書にぞしたりける。僧都は此
 文を見て卷いつ披いつ泣悲しみて云ひけるは、俊寛が此島へ流されし年は、姫は十に
 成りしかば、今年は十二と覺ゆ。文は詞も大人しく、筆の立て所も尋常なり。され共
 切繼ぎたるやうに、疾くして上れ自ら申さんと書きたるこそ流石稚けれ、心に任せた
 る道ならば、なじかは暫くもやすらふべき、はかなきものの書きやうやとて、聲も惜
 ます喚き給ふ。やをれ有王、この島の形勢かたちさまにて今まで俊寛が命の有りけるは、姫が文
 をも待見、又汝が志の切なりけるに、今一度見せんとして、神明の御助にて有りけるに

こそ。己一人を見れば、都の人々を皆見たる心地こそすれ。かゝる貌なれども見え
 むれば、三年の思も晴れぬ。今は疾々歸上り、僧都には人も付かざりしに、京より人
 下りて訪ふなど聞えん事も恐ありと宣へば、有王申けるは、あなうたての御心や、是
 程の御有様にて、世も恐ろしく命も惜く思召候か、御身のゆるき御詞のいづれば人と
 や思しめす、唯なましき骸骨の動かせ給ひ候とこそ見まゐらせ候へと申ければ、僧都
 我身は云ふに及ばず、志深きおのれさへ、我故に此島にて朽ん事の悲さにこそと宣へ
 ば、有王涙を流し、老たる母をも捨て、兄弟にもかくとも申さず、はる／＼と参り侍
 りし事は、命を君に奉り、身を海底に沈めんと、思定めて候へき。一度都にて捨て侍
 る命を、二度此島にて惜むべきかと申ければ、僧都打うなづきて、いざさらば我夜の
 臥所へとて具して行く。住み給ふ所を見れば、巖二つが迫せまりに竹と木の枝を取渡し、寄
 り来る藻屑を取りかけたり、雨露のたまるべき様もなし、僧都一人入り給へぬれば、
 腰より下は外にありて、内には又所も無し。有王はあらはにぞ居たりける。あな心憂
 の御住居や、今は申て甲斐なき事なれども、京極の御宿所、白川の御坊の中、鹿谷御

山庄まで、塵もつけじとこそ磨立させ給しに、何と習はせる人の身なれば、かゝる住居にも御座ける事よ、京童が築地の腹などに造りたる犬の家には猶劣れる物ぞやとて口説泣く、京より菓子少々用意して持ちたりけるを、取出して勸め奉る。僧都思はれけるは、此等を食ひたり共、永らふべき命に非ず、中々由なけれども、都より我爲にとて遙々持下りたる志を失ひて、打捨ん事も無念なりと覺して、食ふやうにして宣ひけるは、此等はさしも味もよかりし上、世に珍らしけれども、餘りに疲れ衰へたる故にや、喉乾き口損じて、氣味も皆忘れにけりとて、さし置き給ひけるぞいと惜き、有王申けるは、是程の御有様にては、日頃は何として今迄も永らへさせ給ひけるぞと問ひければ、僧都は其事なり。三人流されたりしに、丹波少將の相節とて、舅門脇宰相の許より一年に二度舟を渡しとなり、春は秋冬の料を渡し、秋は春夏の料にとて渡しを、少將心様よき人にて、同じ島に流され、同じ所に在りながら、我一人生きてまのあたり各を無き人と見ん事も口惜かるべし。三人あればこそ互に便ともなり、又慰めとて、一人が食物を、三人に省きて、一人の衣裳の新きをば我身に著、古きをば二

人に著せつゝ、兎角育みし程は、人の體にて有りしか共、去年此の人々還上りて其後は事問ふ者も無く、情を懸くる人も無ければ、さすが甲斐無き命の惜ければ、此人々の都にて、申くつろげんなんと云しを憑みて、力の有りし程は島の者のするを見習うて、此山の峯に登りて、硫黄を取つて商人の舟の著きたるに取らせて、形の如くの代を得て日を送り、命を繼ぎしか共、力弱り身衰へて後は、山に登る事も足叶はず、硫黄を取る事も力盡きぬ。さてもあられて澤邊の根芹を摘み、野邊の蕨を折りて、淋しさを慰みしも、叶はぬ様に成果て、今は爲る方も無ければ、浪立ぬ日は磯に出で、岩の苔をむしりて潮に洗うて食物とし、汀に寄せたる海松和布を取り、和かなる所をかみて明し暮す。何を期する事は無けれ共、責ての命のをしさに、綱引者に向つては手を合せて魚を乞ひ、釣する海人に歎きては、膝を折りて肉を食ふ。得たる時は慰む、くれざる日は空く臥しぬ。かくしつゝ、一日二日とする程に、早四箇年にも成りにけりさて生きたる甲斐有つて、己を見つる嬉しさよ。若此事夢ならば、覺て後はいかたせんと、嘘もし敢へず泣き語り給ひけり。有王つらくと之を聞き、涙の乾く間ぞな

かりける。僧都又宣ひけるは、俊寛はかゝる罪深き者なれば、業に責められて、今幾程か存せんすらん、己さへ此島にて歎く事も不便なり。疾々歸上れと云はれければ、有王尋ね参り侍る程にては、十年五年と申とも、其期を見終りまゐらせ侍るべし。努々御いたみ有るべからず、但し御有様久しかるべしとも覺えず、最後を見終り奉らん程は、是にして兎も角も勞はり進らすべしとて、僧都に教えられ、峯に登つては硫黄を掘つて商人に賣り、浦に出で、は魚を乞ひて執行を養ふ。かゝりけれども、日頃の疲れも等閑ならず、月日の重なるに随つていと、憑みなく見えけるが、當年の正月十日比より打臥給ひぬ。有王は今は最後と思ひて立離れず、看病して兼ねて賢くも善知識して申けるは、再び都へ歸上り給はざる事、努々御忘念に思召べからず、北の方も若君も空き露と消えさせ給ひぬ、姫君は奈良に御座せば御心安かるべし。唯娑婆の定めなき有様を思ひ知り給ふべし。假令妻子を後枕に据置き奉り、古き都にして終り給ふとも、住馴れし境界は御名殘惜く思召べし。之に依つて衆生無始より生死に廻りて三界を出でずとこそ承り候へ。富貴榮花も終には衰ふ。御身にあて、知んぬべし、長

命と云ふ共必死す、昔より形を残す者無し。されば今は一筋に今生を穢土の終と思召切つて、當來には必ず淨土へ參らんと、心強く願ひ御座すべし。無益の妄念を残して心憂き境に廻り給ふべからず、四五箇年の流罪猶以て忍び難し、無量億劫の惡趣、出期を知らずと言へり。今度厭ひ給はずは、いつをか期し給ふべきなど、種々教訓申ければ、僧都息の下に、二人は召還され、俊寛一人留めし上は、思切てこそ有りしか共、凡夫の習なれば、折々にはさり共と憑む心も在りき、其云ひ甲斐なし、己かく理を以て云教ゆれば、思切りぬ。昔は召仕ひし所従、今は然るべき善知識なり。權化の善巧歟、大聖の方便歟、誠に此世の中の習ひ、強に都へ歸りても何にかはせん。玉の簾錦の帳も、萬歳の粧にあらず、尤も厭ふべし。金臺銀階千秋の粧にあざれば由無し。其上入る息出づる息を待たざる身なれば、朝露の日に向ふよりも危し。生死不定の命なれば、蟬蛸の夕を待つよりも短し。殊に此二三年は、歎を以て月日運び、齡傾き勢衰へて、悲みを以て星霜を送りつ、危き壽に病付ぬ。浮雲の假の宿とは知りながらはか無く我身を起して、歸洛を待ちき。草露の英なる命と思ひながら、愚に常見を成

して怨念を含み、終には是山川の土なれども、捨て難きは血肉の身なり。思へば又野
 外の上なれども、惜まんと欲ふは分段の膚なり。碧緑の紺青の髪筋も、遂には塚際の
 芝に纏ひ、莊嚴端直柔和の姿も、亦路邊の骸骨なり。尤も厭ふべし、争てか悲まざら
 ん。蘭香の家も未だ無常の悲みを免れず、櫻梅の宿も猶生死の別れには迷へり。況や
 俊寛が形勢、今日とも明日とも知らざる身なれば、過去の修因今生の現果、拙なかり
 ける我かなと、所従なれ共恥かし。されば肝心を碎きても骨肉を捨て、も、求むべき
 は菩提薩埵の行、血髓を屠り身軀を抛つても、望むべきは安養淨土の境なり。徒に身
 を野外に捨てんよりは、同くは覺悟の佛道に捨つべし。空く心を苦海に沈めんよりは
 須迷津の船筏を設くべし。然るを身命を雪山に投じ、半偈の文眼にあてたれども見ざ
 るが如し。給仕を千歳に運びし一乗の説、掌に把るとも取らざるに似たり。悲い哉無
 上の佛種をはらみながら、無始無終の凡夫たる事を、痛い哉二空の満月を備へながら
 生死長夜の迷情たる事を。凡そ此島に放たる、初めには、思に沈みて岩の迫りに倒臥
 て、今生の祈も後生の勤も無かりしか共、丹波の少將も、康頼入道も、歸洛の後は何

日に法華經一部を暗誦し、終夜彌陀念佛を唱へて、一筋に後世の爲と廻向して今に怠
 らず、夫來迎の金蓮には、貴きも賤きも俱に弘誓の船筏に乗らんには、富めるも貧き
 をも渡し給ふと聞けば憑みあり、又妙法の二字には、諸法實相の理を兼ね、蓮華の兩
 字には、權實本迹の義を含めり。誠に貴き御法なり、晝誦み夜唱ふる功德、されども
 後世は覺ゆれば、唯汝も念佛を勧めよ、我も名號を唱へんとて、明くれば佛の來迎を
 待ちて暮るれば最後の近きを悦んで、日數を経る程に、次第に弱りて云ふ事も聞えず
 息止まり眼閉ちにけり。寂々たる臥戸に、涙泉に咽べども、巴峽秋深ければ、嶺の猿
 のみ叫びけり。閑々たる溪谷に思歎に沈めども、青嵐峯にそよいで、皓月のみぞ冷し
 き。白雲山を帯びて、人煙を隔てたれば、訪ひ來る人も無し。蒼苔露深うして、洞門
 に滋れども、憐み思ふ者も無し。童只一人營みつゝ、燃藻の煙たくべてけり。茶毗事
 終りてければ、骨を拾ひて頸に掛け、涙に咽びて遙々と都へ歸上りにけり。奈良の姫
 君に見せ奉りければ、悶え焦れて泣悲む事なゝめならず、さこそ有りけめと想像れて
 無慙なり。童申けるは、御文を御覽してこそ、御歎の色もまさる様に見えさせ給しか、

硯も紙も無かりしかば、御返事は候はず、思召されし御心の中、さながら空しく止みにきとて、恨むる事の次第細々と申ければ、姫君涙に咽びて物も仰せられず。出家の志有りと仰せければ、有王丸兎角して、高野の麓、天野の別所と云ふ山寺へ具し奉り其にて出家し給にけり。眞言の行者と成つて、父母の菩提を弔ひ給ひけるこそいと惜けれ。有王もそれより高野山に登り、奥の院に主の骨を納め卒都婆を立て、即ち出家入道して、同く後世を弔ひけり。方士は貴妃を蓬萊宮に尋ね、金言は嚴父を狄が城に尋ねけり。彼は恩愛の情に催し、王命の背き難きによてなり。主を硫黄が島に尋ねける有王が志こそ哀なれ。

一八 關東より勸修坊を召さるゝ事

『義經記』

南都に判官殿おはします由、六波羅に聞えければ、北條大きに驚き、急ぎ鎌倉へ申されけり。頼朝、梶原を召して仰せられけるは、南都の勸修坊といふ者、九郎に組して

世を亂すなるが、奈良法師も大勢討れて有るなり。和泉河内の者ども、九郎に思ひ付かぬさきに、是はからへと仰せられければ、梶原申しけるは、それこそゆゝしき御大事にて候へ。僧徒の身として、左様の事思し召し立ち候はんこそ、不思議に候へと申す所に、又北條より飛脚到來して、判官殿南都にはおはせず、とくこが計らひにて、隠し奉る由申されければ、梶原申しけるは、さらば宣旨院宣をも蒙り給ひて、勸修坊を是へ下して、判官の御行方御尋ね候へ。陳狀に従ひて、死罪流罪にもと申しければいそぎ堀の藤次親家に仰せ付けられ。五十餘騎にて馳せ上り、六波羅に著きて此の由を申しければ、北條殿、親家を召し具して、院の御所に參じて、仔細を申されければ院宣には、まろが計らひに有るべからず。勸修坊といふは、當代の御祈の師、佛法興隆有驗廣大慈悲の知識なり。内裏へ巨細申さではかなふまじとて、内裏へ奏聞せられければ、佛法興隆の有驗たる人にも、左様に僻事などを企てんに於いては、朕もかなはせ宣ふべからず。頼朝が憤るところ理ならずといふ事なし。義經も本朝の敵たる上は、勸修坊を渡すべしと宣旨下りければ、時政悦びをなして、三百餘騎にて南都に

馳せ下りて、勸修坊に宣旨の趣きを披露せられたり。とくこ是を聞きて、世は末代といひながら、王法の盡きぬるこそ悲しげれ。上古は宣旨と申しければ、枯れたる草木も花咲き實を結び、空飛ぶ翼も落ちけるとこそ承り傳へしに、されば今は世もか様になれば、末の代もいかゞあらんすらんとて、涙にむせび給ひけり。たとひ宣旨院宣なりとも、南都にてこそ屍を捨てべけれ共、それも僧徒の身として穩便ならねば、東國の兵衛佐は、諸法も知らぬ人にてあるなるに、哀れついでもがな、關東へ下り、兵衛佐を教化せばやと思ひつるに、下れと宣ふこそ嬉しけれ迎、頓て出で立ち給ひけり。公卿殿上人の君達、學問の心ざしおはしましければ、師弟の別れを悲み東國まで御供申すべき由を申し給へども、とくこ仰せられけるは、ゆめ／＼有るべからず、身罪科の爲に召し下され候間、とがとて其の難をば、いかでか遁れさせ給ふべきといさめ給へば、泣く／＼跡に止まり給ふ。兎も角も成りぬと聞き給はば、跡を弔はせ給へ若し存命へて如何なる野の末、山の奥にもありと聞き給はば、跡を弔ひ渡らせ給へと泣く／＼契りて出で給ふ。此の別を物に譬ふれば、釋尊の御入滅の時、十六羅漢、五

百人の御弟子、五十二類に至るまで、悲み奉りしも、いかでか是にはまさるべき。かくて、とくこ北條に具せられて平の京に入り給ふ。六條の持佛堂に入れ奉りて、やう／＼にぞ勞り奉る。江間の小四郎申しけるは、何事をも思召し候はば、承りて南都へも申すべく候ふと申されければ、何事をか申すべき。但し此の邊に年ごろ知りたる方の候ふ。是へ參り候を聞きては、尋ねべき人にて候が、來られ候はぬは、いか様にも世に憚をなし候ひてと覺え候ふ。苦しかるまじく候はば、此の人に見參し下らばやと仰せられければ、義時承り、名を何と申すぞと言ひければ、元は黒谷に住み候ひしが、此の程は東山に法然坊と仰せられければ、さては近き所におはしまし候ふ上人の御事候ふとて、頓て御使を奉る。上人大きに悦び給ひて、急ぎ來り給ふ。二人の知識御目を見合せ、互に御涙に咽び給ひけり。勸修坊仰せられけるは、見參に入つて候ふ事は、悦び入つて候へども、面目なき事の候ふぞ。僧徒の身として、謀叛の人に與したりとて、東國まで取り下され候ふ。其の難を遁れて歸らん事も不定なり。されば古より、先に立ち參らせば弔はれ參らせん、先に立たせ給ひ候はば、御菩提を弔ひ參ら

せんと契り申して候ひしに、先立參らせて、弔はれ參らせんこそ、悦び入りて候へ。是を持佛堂の御前に置かせ給ひ、御目に懸り候はん度毎に、思召し出し後世を弔ひて給はり候へとて、九條の袈裟をはづし奉り給へば、東山の上人泣くく請けとり給ひけり。東山の上人、紺地の錦の經袋より、一卷の法花經を取り出し、勸修坊に參らせ給ふ。互に御形見を取りかはして、上人歸り給ひければ、とくこは六條に止まりて、いと涙に咽び給ひけり。此の勸修坊と申すは、本朝大會の大伽藍、東大寺の院主、當帝の御師となり、廣大慈悲の知識なり。院參し給ふ時、腰輿牛車に召されて、あざやかなる中童子大童子、然るべき大衆あまた御供して參られし時は、左右の大臣も各渴仰し給ひしぞかし。今はいつしか引きかへて、日ごろ著給ひし素絹の御衣をば召されず、麻の衣の賤しきに、剃らで久しき御髮護摩の煙にふすぶる御けしき、なか／＼尊くぞ見奉る。六波羅を出し奉りて、見なれぬ武士を御覽じけるだに悲しきに、あさましげなる傳馬に乗せ奉る。所々の落馬は目もあてられず覺えたり。粟田口打ち過ぎて、松坂越えて、これや逢坂の蟬丸の住み給ひし四宮河原を打ち過ぎて、逢坂の關を

越えければ、小野の小町が住みなれし關寺をふし拜み、園城寺を弓手になし、大津、打出の濱過ぎて、瀬多の唐橋ふみ鳴らし、野路の篠原も近くなり、忘れんとすれど忘られず、常に都の方をかへりみて、行けばやう／＼都は遠くなりけり。音には聞けど目には見ぬ、小野の磨針、霞に曇る鏡山、伊吹の嶽も近くなる。其日は堀の藤次鏡の宿に止まり、次の日いたはしくや思ひけん、長者に輿を借りて乗せ奉り、都を御出の時、かくこそ召させ參らすべく候ひしかども、鎌倉の聞え其の憚りにて、御馬を參らせ候はんするにて候ふと申しければ、とくこ道の程の御情こそ悦び入つて候へと仰せられけるこそ哀なれ。夜を日につぎて下りけるほどに、十四日に鎌倉に著き給ふ。堀の藤次の宿所に入れ奉りて、四五日は鎌倉殿にも申し入れず。或時とくこに申しけるは、御いたはしく候ふとて、鎌倉殿にも申し入れず候ひつれども、いつまで申さず候ふべきなれば、只今出仕つかまつり候ふ、今日御見參有るべきとこそ覺え候ひぬと申しければ、思ふも中々心ぐるし、疾くして見參に入り、御問状をも承り候うて、愚僧の旨の申し度こそ候へと仰せられければ、藤次、頼朝の御前に參り、この由申し

あぐる。梶原を召して、今日の中に、とくに尋ね聞くべき事あり。侍ども召せと仰せられければ、承りて召しけるに、侍には誰々ぞ、和田の小太郎義盛、佐原の十郎、千葉の介、笠井の兵衛、豊田の太郎、宇都宮の彌三郎、海上うなづみの次郎、小山の四郎、長沼の五郎、小野寺のせんじ太郎、川越の小太郎、同じく小次郎、畠山の次郎、稻毛の三郎、梶原平三父子ぞ召されける。鎌倉殿仰せられけるは、勸修坊に尋ね問はする座敷には、いづくの程かよかるべき。梶原申しけるは、御中門の下口しもぐち邊こそ能く候はんと申しければ、畠山、御前にかしこまり、申されけるは、勸修坊の御座敷の事承り候ふに、梶原は中門の下口と申し上げ候ふ。是は判官殿にくみし奉りたりといふ其の故と覚え候ふ。流石に勸修坊と申すは、御學匠と申し、天子の御師匠と申し、東大寺の院主にておはしまし候ふ。御氣色わたらせ給ふによつてこそ、是迄も申し下し參らせおはしまして候へ、さこそ遠國にて候ふとも、座敷しどろにては、世の聞えも悪く存じ候ふ。下口などにての御尋ねには、一言も御返事は申され候はじ、たゞ當座の御對面や候ふべからんと申されたりければ、頼朝もかくこそ思ひつれとて、御座を日比よ

り高くまかせて、御座敷には紫べりの疊、水干に立烏帽子にて、御見參あり。堀の藤次勸修坊を入れ奉る。鎌倉殿思し召しけるは、何ともあれ、僧徒なれば、糾問はかなふまじ。言葉を以て責めふせて、問はんするものと思召しけり。とくこ御座敷に居直り給ひけれ、とかく仰せ出されたる事もなく笑ひて、大の御眼にてはたと睨にらませ給ひてぞおはしける。とくこ是を見て、あはれ人の御心の中もさこそ有らめと思はれければ、手を握りて膝の上に置きて、鎌倉殿をつくつくとまもりて、御問状も陳状もさこそあらんすらんと覺えて、人々固唾かたづを吞み居たりけり。頼朝、堀の藤次を召して、是が勸修坊かと仰せられければ、親家かしこまつてぞ候ひける。暫くありて、鎌倉殿仰せられけるは、抑僧徒の身と申すは、釋尊の教法學びて、ししやうのかんしんに入つしより此の方、いきようを正しく、三衣を墨に染めて、佛法を興隆し、經論諸教の前に眼をさらし、無縁の人を弔ひ、結縁の者を導くこそ、僧徒の法とは申し候へ。何ぞ謀叛の者と組して世をくつがへさんとの計りごと世に隠れ無し。九郎天下の大事になり、國土の亂をたくむ者を入れ立て、あまつさへ奈良法師を我にくみせよと宜ふ

に用ひざる者をば、九郎にはなち合せて斬らせ給ふ條、甚だおだしからず。それを不思議と思ふ所に、猶以て四國西國の軍兵を一つになし、中國畿内の者どもを召して、召されんに參らざる者をば、片岡、武藏など申す荒者どもをさし遣はし、追討して御覽せよ。他所は知らず、東大寺興福寺は、とくこが計らひなれば、かなへざらん時は討死せよなどと勧め給ひたる事、以ての外に覺えて候ふに、人をつけて都まで送られ候ひけるは、九郎が在所に於いては知りたるらん。虚言を構へず正直に申され候へ其の旨なくば、健ならん小舎人めらに仰せ付けて、糺間を以て尋ねん時、頼朝こそ全く僻事の者にはあるまじけれとした、かに問はれければ、勸修坊は、兎角の返事にも及ばず、はら／＼と泪を流し、手を握りて膝の上に置き、萬事をしづめて、人々聞き給へ。そも／＼聞きも習はぬ言葉かな。和僧はいかにとくこと名字を呼びたりとも、不覺人にてはよもあらじ。和僧と宣ひたればとて高名も有るまじ。都にて聞きしには國の將軍と成りて、かゝる果報にも生れけり。情もおはすると聞きしに、果報は生付の物なり。殿の爲にてもいや／＼の弟、九郎判官には、遙に劣り給ひたる人にて有り

けるや。申すに付けて詮なき事にては候へども、平治に御邊の父下野の左馬頭、衛門督にくみして、京の軍に討ち負けて、東國の方へ落ち給ひし時、義平も斬られぬ。朝長も死しぬ。明くる正月の初めには、父も討たれしに、御邊の命を死し兼ねて、美濃の國伊吹山の邊を迷ひありき、麓の者どもに生捕れ、都まで引きのぼせ、源氏の名を流し、既に誅せられ給ふべかりしに、池殿の憐み深くして、死罪を申しなだめられて彌平兵衛に預けられ、永暦の八月の頃かよ、伊豆の北條なごやの蛭が島といふ所に流され、廿一年の星霜を経て、田舎人と成りて、さこそ頑固はしくおはすらめと思ひしに、少しも違はざりけり。あらむざんや、九郎判官と敬拜し給ふ事、理かな、判官と申すは情も有り、心も剛なり、慈悲深くおはしまし候ふなり。治承四年の秋の比、奥州より馬の腹筋馳せ切り、駿河の國浮島が原におり居て、一方の大將軍請け取りて、一張の弓を脇挟み、三尺の劔を佩きて、西海の波に漂ひ、野山を家とし、命を捨て身を忘れ、いつしか平家を討ち落して、御身をせめて一兩年世にあらせ奉らばやと骨髄を碎き給ひしに、人の讒言今に初めたる事にては候はねども、深き心ざしを忘れて、兄

弟の中不和に成り給ひし事のみこそ、甚以て愚なれ。親は一世の契、主は三世の契と申せども、是が初やらん、中やらん、終やらん、我も知らず。兄弟は後世までの契とこそ承り候へ。其中を違へ給ふとて、殿をば人の數にてはおはせぬ人と世には申すげにこそ候へ。去年十二月廿四日の夜打ち更けて、日頃は千騎萬騎を引き具してこそおはしまし候ひしに、侍一人をだにも具せず、腹巻ばかりに太刀佩きて、編笠といふ物うちき、萬事を頼むとておはしたりしかば、いにしへ見す知らぬ人なりとも、いかでか一度の慈悲を垂れざらん。一度はくんこう望み、いかなる時は祈りしぞ。いかなる時は討ち奉るべき、是を以てけうりやうし給へ。あらぬ様に人申たりし事のもれ候ふ。げにこそ、去年の冬の暮に出家し給へと度々勧め申し、かども、其の梶原が爲に出家はしたくはなしと宣ひ候ひつる。其のころ、判官殿佩きたまひし太刀を奪ひ取り奉らんとて、悪僧ども斬られ參らせて候ひしを、人のわざんを構へて申し候ひつらん。全く奈良法師くみせよと申したること更に無し。其のうちうように南都を落ち給ひし間、心の中いかばかり遣る方もなくおはしますらん存じ候うて、いさめたる事候ひし。

99

四國九國の者を召し候へ。東大寺興福寺は、とくこが計らひなり。君は天下の御覺のいみじくて、院の御感にも入らせ給ひて候へば、在京して日本の半國づゝ知行し給へと勧め申せしかども、とくこが心をきやうしやくして出で給へば、中々恥かしくこそ思ひ奉り候ひしか。君にも知られぬ宮づかひにては候へども、殿の御爲にも祈りしぞかし。平家追討の爲に、西國に赴き給ひしに、渡邊にて、源氏の祈りしつべき者や有ると尋ねられ候ひけるに、いかなるをこの者が見參に入れて候ふ、とくこを見參に入れて候ひければ、平家を呪咀して源氏を祈れと仰せられ候ひしに、其罪逃れなんと度々辭退申し、かば、御坊も平家と一つになるかと仰せられ候ひし恐ろしさに、源氏を祈り奉りし時も、天に二つの日照し給はず、二人の國王無しとこそ申し候へども、我朝を御兄弟手に握り給へとこそ祈り參らせしに、判官は生つき不運の人なれば、遂に世にも立ち給はず。日本國残る所なく、殿一人して知行し給ふ事、これはとくこが祈の感應する所にあらずや。是より外はいかに糺問せらるゝとも、申すべき事候はず。かたの如くも智惠ある者に物を思はするは、何の益か有るべき。いかなる人承りにて候

ぞ。疾く／＼首を刎ねて、鎌倉殿の憤を休め奉り給へやと残る所も無く宣ひて、はら／＼と泣き給へば、心有る侍ども、袖を濡さぬ人はなし。頼朝も御簾をさつと打ちおろし給ひて、萬事御前静まりぬ。や／＼有りて人や候ふと仰せられければ、佐原の十郎和田の小太郎島山三人、御前に畏まつてぞ候ひける。鎌倉殿高らかに仰せられけるは斯る事こそ無けれ。六波羅にて尋ね聞くべかりしを、梶原申すに付て御坊を是まで呼び下し奉りて、さん／＼に悪口せられ奉りたるに、頼朝こそ返事に及ばず身の置所無けれ。あはれ人の陳狀や、尤かくこそ陳じたくあれ。誠の上人にておはしましける人かな。理にてこそ、日本第一の大伽藍の院主とも成り給ひけれ。朝家の御祈にも召されける理とぞ感せられける。

一九 曾我にて虎が名残惜みし事

「曾我物語」

かくて祐成は虎を具して曾我に歸り、常に住みける所に隠しおき、何時よりも細々と

うち語りしは、このたび御狩の御供申し、思はずのおこしの矢にもあたり、朽ち果つる埋木ともなるならば、身こそ貧に生れぬ、鬢なる塵の見苦しさよと人の言はんも口惜し。髪梳りてたび候へといひければ、虎は何としも思はで、數の櫛を取り散らし、暫く髪をぞ梳りける。十郎は女の膝に臥しながら、虎が顔をつく／＼と見て、祐成を睡まじと見んも、これぞ限りなるべきと思へば、ながるゝ涙を見て、例ならぬ御涙心もとなさよ。何なるらんと問ひければ、今に始めぬ事とは言ひながら、憂き世の中の定めなさよ。この程のよろづあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契りおきし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ涙のこぼるゝぞ。實にや頼まぬ身のならひ、かこつ命も露の間も忌はしくこそ思はるれ。實にもさやうに思ひ給はひ、この度の御狩思し召し止まり給へかし。君に知らるゝ宮仕の暇なきわざにも候はず。止まり給へといひければ、思ひ立つ御供なり。何事かはといひながら、か程深く思ふ中思ひ知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし。せめて夢程此事を知らせばやとは思へども、女は甲斐なきものなれば、飽かぬ別れの悲しさに、止めん爲に母にもや語り

ひろめん。この度は思ひ定めたるものゆゑ、かなはぬ事を母聞きて思の種ともなりぬべし。又は五郎もうらみなん。思ひ切りたる一大事、女にさぞといはんこと悪しかるべしと思ひ切り、何としもなく戯れけり。忍ぶとすれどその色の怪しく思ひ奉り。覺束なしと問ひければ、深き思の切なるに、東の間も思ひ合はする事なくて、はてぬるものならば、後のうらみも深かるべし。よし思出に一端をいひてや心を安むると身の有様を思ふには、憂が住まひの詮なくて、世には住まじのその故を、いかにといひて知らすべき。さればにや祖父入道の謀叛によつて斬られまゐらせし孫なれば、君にも召し使はれず御恩蒙ることもなし。まして先祖の本領は、年月餘所に見なすうへ、馬の一疋も毛なだらかに飼はず、又父の爲とて經卷の一部も書かず。あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも恥かしく、面ならぶる便なし。さればこの度御狩より歸りなば、出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀乞食して靈佛靈社に参り、父の後世をも弔ひ、わが身をも助からんと思ひ候なり。世にありとも夢幻の如く、法身を殘すべきにあらず。花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて。山林に交り給ふぞかし。ましてや貧道無

縁の祐成が、何に命も惜しかるべし。今度の御供を最期に定め、ふたゝび歸らじと思へば、倦かぬ別の道捨て難くてと申しければ、虎聞きもあへず、十郎が膝にかゝり、暫しは物も言はざりけり。稍ありて、うらめしや問はずば知らせじと思し召すかや。まこと妾は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思し召さじなれども、女の身の果敢なさ、身に代へてもこそと思ひ奉れ。見え初しよりなどやらん、思の色の深草よ、忍の袖の摺衣忘れ奉る便りもなし。御志は知らねども、御かねごとの違ふをば、僞に又なるらんと心を盡し待たれしに、さやうに思ひ立ち給は、妾も同じく髪剃りおろし、墨の衣に身をやつし、一つ庵にあらばこそ、ほかに庵室引き結び、衣を濯ぎて参らせん。香を供へ給は、花を摘み、薪を拾ひ給は、閼伽の水を掬ひ、一つ蓮の縁をも願はん、その睦びをも否と宣は、山々寺々を修行して、他所ながら見奉らん。それも憚り思し召さば、聞きたまへ身を投げ一日片時もながらへじとて涙に咽び申しけり。誠に十郎が膝の上も虎が涙に浮くばかり、袖もしぼりぞかねたりける。十郎はつくづくと案するに、これほど思ひ入りたる志露ほども知らせずして、心強く

隠し逃げぬるものならば、長きうらみとなりぬべし。若し立ち返らぬ習あらば、思ひ出して念佛をも申すべし。さればとて、人に漏すなといはん事をあだにやすべき、その上日數なければ知らせばやと思ひ、此事母にだにも知らせ奉らで、過ぎしかども、御身のこゝろざし切にして、知らせ奉るぞ。もらし給ふべからず。眞の道心にもあらず。出家また遁世にてもなし。年ごろ祐成が身に思ありとは知り給ひぬらん。その本意を遂げんと思へば、この度出で、後、ふたゝび歸るまじければ、相見んことも今宵ばかりなり。さてしも何となく申し契りて、時の間と思へども、三年になりぬ。いつ思出もなく果てん事こそ無念なれ。御志の程こそありがたく思ひ奉れ。面々めんめん如きの人は祐成風情の貧しく頼む所無きに、何によりてか露の情もあるべきに、三年の間の顔の變らぬ色は常磐山、おのれ鳴きてやほとゝぎす、憂世の夢か朝顔の、果敢なくなら。身の程を、恥ぢす忘れぬ情の袖、前世の事といひながら、過ぎにし事の恥かしさよ。奉公の身ならねば、御恩の時ともいはれず、くわいせんくわいせんの身ならねば、ことわりのあらん折ともいはれず、思出の無き事を思ひ出し給はんことよとて、さめくと泣きに

けり。虎もこの言葉を聞きて、又打ち伏して泣くより外の事ぞなき。稍ありて起きなほり、そもこれは何となり行く事どもぞや。是程の大事、女の身なりとも、いかでか人に洩すべき、一人まします母にだにも聞かせたてまつらす、振り棄て、心強く思ひ立ち給はんこと、數ならぬわらは申すとも、止り給ふべきか。何につけても、飽かぬ別れの道こそ悲みても餘りあり、かやうの大事心おかす知らせ給ふこそ、返すくも嬉しけれ。さてもこの年月の御馴染おんなじみ、いつの世にかは忘るべき。思ふに叶はぬ事なれども、御物具の見苦しきを見まゐらす折節は、人々しき身なりせば、などや便りにもなり奉らざらんと、しづ心を盡し明し暮しつるに、世を捨て、何處ともなくならんと仰せらるゝをこそ、身の置處無かりしに、思も寄らぬ永き別路とならん悲しさよとて、聲も惜まず泣き居たり。十郎も詮方なくして、餘りな歡き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞと慰めつゝ、これを形見にとて、祐成に添ふと思し召せとて、鬢の髪を切りて取らせぬ。虎は涙もろともに受け取り、肌はだの守に深く納め、物をもいはず伏し沈みぬ。同じ枕にうち傾き涙に咽ぶばかりなり。日も既に暮れければ、

今宵ばかりの名残ぞと思ひやるこそ悲しけれ。千夜を一夜に重ねても、明けざれかしと思はるゝ、頃さへ五月の短夜の、有明なれば宵の間の、待たるゝ程もなければや、出づると見ればその儘に、傾く空もうらめしく、八聲といふも鶏の、夜やしりふると明けやすく、夢見る程もまどろまで、東にたなびく横雲の、東雲しらむ憂き枕、まだ睦言の盡きなくに、後朝になる曉の、涙に床も浮きぬべし。互の名残心のうち、さこそと思ひ知られたり。なほしも虎はうち臥して、消え入るやうに見えしかば、十郎かれを勇めんとて、暇申して祐成は、後生にて参り逢はんとて驚かせば、起きなほりたるばかりにて、物いふまではなかりけり。今を限りの別れなり。後の世までの形見とて、十郎著たりける目結の小袖に、虎が紅梅の小袖に着換へて、心のあらば移香よ、暫し残りて憂き別れ、慰む程も面影の、著換へし衣に留まれかし、互の名残盡きせずと、又諸共に打ち伏しぬ。幾萬世を重ねても、名残つくべきにあらず。祐成も途まで送ら奉るべし。日こそ傾き候へとて、草毛なる馬に貝鞍置かせ、團三郎門のほとりに控へたり。この馬鞍返し給ふべからず。この三年通ひしに、馬は更れど鞍變らず。鞍

變れども馬更らず。今日を最期の別なれば、留めおきて永き形見とも思ひ給ふべし。但し馬は生あるものにて更ることもあり、鞍をば失はで持ち給へと、いびく馬にぞ乗せたりける。

二〇 俊基朝臣再び關東下向

「太平記」

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討れし後召捕れて、鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣き、實にもとて赦免せられたりけるが、又この度の白狀どもに、もつばら隠謀のくはだて彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕れて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざる法令の定むる所なれば、何と陳する共許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬るゝか、二つの間をば離れじと、思ひまうけて出でられける。落花の雪に踏みまよふ片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我

が故郷の妻子をば、行方も知らずおもひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ、心の中で哀なる。憂をば留めぬ相坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮沈み、駒もといろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行交ふ人に近江路や、世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく森山の木の下露に袖濡れて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山は有りとても、泪に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めてかへりみる。古郷を雲や隔つらん。番馬醒く井柏原、不破の關屋は荒果て、猶もる物は秋の雨の、いつか我身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、鹽干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕鹽に、引く人も無き捨小船、しづみはてぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、いりあひ鳴れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。元暦元年のころかよ、重衝中將の東夷の爲に囚はれて此の宿に著き給ひしに、東路のはにふの小屋のいぶせきに古郷いかに戀しかる

らんと、長者の女が讀みたりし、其の古の哀までも、思ひ残さぬ泪なり。旅館の燈幽にして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打ち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、むかし西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二度越えしあとまでも、うらやましくぞ思はれる。隙行く駒の足はやみ、日巳に亭午に昇れば、餉まゐらす程とて、輿を庭前に昇き止む。轡を叩いて警固の武士を近付け、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時院宣書きたりしがに依つて、光親卿關東へ召下されしが此の宿にて誅せられし時、昔南陽縣菊水、汲下流延齡、今東海道菊河、宿西岸而終命と書きたりし、遠き昔の筆の跡。今は我身の上になり、哀やいと増りけん、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書れける、

いにしへもかゝるためしを菊川のおなじ流れに身をやしづめん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管弦の宴にはんべりし事も、今は二度見ぬ夜の夢と成りぬと

思ひつゞけ給ふ。島田藤枝に懸りて、岡邊の眞葛裏枯れて、物悲き夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住みかを求むとて、東の方を下るとして、夢にも人に逢はぬなりけりと讀みたりしも、此やと思ひ知られたり。清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向ひはいづこ三穗が崎、奥津神原打ち過ぎて、富士の高峰を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひにくらべつゝ、明る霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ足柄山の巔より、大磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなれども日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

一一一 長崎次郎高重最期合戦

「太平記」

去程に、長崎次郎高重は、はじめ武藏野の合戦より、けふに至るまで、夜晝八十餘ヶ

度の戦に、毎度先を懸け、圍みを破つて、みつから相當ること其の數を知らざりしかば、手の者若黨共、次第に討亡されて、今は僅に百五十騎に成りにけり。五月廿二日に、源氏早谷々へ亂れ入つて、當家の諸大將大略皆討れ給ひぬと聞えければ、誰が堅めたる陣ともいはず、唯敵の近づく處へ馳せ合せ馳せあはせ、八方の敵を拂つて、四隊の堅めを破りける間、馬疲れぬれば乗り替へ、太刀打折れば帶き替へて、自ら敵を切て落すこと三十一人、陣を破ること八ヶ度なり。かくて相摸入道のおはします葛西が谷へ歸り参りて、中門に畏り泪を流し申しけるは、高重數代奉公の義を忝うして、朝夕恩顔を拜し奉りたる御名殘、今生に於いては今日を限りとこそ覺え候へ。高重一人數ヶ所の敵を打散して、數度の戦ひに毎度打ち勝ち候ふといへ共、方々の口々皆攻破られて、敵の兵鎌倉中に充滿して候ひぬる上は、今は矢たけに思ふともかなふべからず候ふ。唯一筋に敵の手に懸らせ給はぬ様に、思し召し定めさせ給ひ候へ。但し高重歸り参じて勧め申さん程は、左右無く御自害候な。上の御存命の間に、今一度快敵の中へ懸け入り、思ふ程の合戦して、冥途の御供申さん時の物語に仕り候はんと

て、又東勝寺を打出づ。其の後影を、相摸入道遙に見送り給ひて、是や限りなるらんと、名残惜げなる體にて、泪ぐみてぞ立たれたる。長崎次郎甲をば脱ぎ捨て、筋の帷子の月日推したるに、精好の大口の上に、赤絲の腹巻著て、小手をばさゝす、兎難と云ひける坂東一の名馬に、金貝の鞍に、小總の鞆懸けてぞ乗つたりける。是を最後と思ひ定めければ、先づ崇壽寺の長老南山和尚に參じて、案内申しければ、長老威儀を具して出で合ひ給へり。方々の軍急にして、甲冑を帯したりければ、高重は庭に立ちながら、左右に揖して問うて曰く、如何なるか是勇士慥廢の事。和尚答へて曰く、吹毛急に用ゐて前まんにはしかず。高重此の一句を聞いて、問訊して、門前より馬引き寄せ打乗て、百五十騎の兵を前後に相隨へ、笠じるしかなぐり捨て、しづかに馬を歩ませて敵陣に紛れ入る。其の志ひとへに義貞に相近附かば、組んで勝負を決せん爲なり。高重旗をもさゝす、打物の鞆をはづしたる者無ければ、源氏の兵敵とも知らざりけるにや、をめ／＼と中を開いて通しければ、高重、義貞に近づく事、僅に半町ばかりなり。すはやと見ける處に、源氏の運や強かりけん、義貞の眞先に控へたりける由

良新左衛門是を見知つて、たゞ今旗をもさゝす相近づく勢は長崎次郎と見ゆるぞ、さる勇士なれば、定めて思ふところ有つてぞ是までは來らん。あますな漏らすなど、大音あげて呼ばはりければ、先陣に控へたる武藏の七黨三千餘騎、東西より引つ裏んで、眞中に是を取りこめ、我も我もと討んとす。高重は支度相違しぬと思ひければ、百五十騎の兵を、ひしひしと一所へ寄せて、同音に鬨をどつと揚げ、三千餘騎の者共を、懸け抜け、懸け入り、交り合ひ、彼所に現れ此所に隠れ、火を散らしてぞ戦ひける。聚散離合の有様は、須臾に變化して、前に有るかとするれば、忽焉として後にある。味方かと思へば、屹として敵なり。十方に分身して、萬卒に同く相當りければ、義貞の兵、高重が在所を見定めず、多くは同士打をぞしたりける。長濱六郎是を見て、云ふ甲斐無き人々の同士打哉。敵は皆笠じるしを附けずと見えつるぞ。中に紛れば、それを符にして組んで討てと下知しければ、甲斐信濃武藏相摸の兵共押並べてはむづと組み、組んで落ちては首を取るもあり、取らるゝもあり。芥塵天を掠め、汗血地を糺す。其の有様項王が漢の三將を靡かし、魯陽が目を三舎に反し戦ひしも、是には過

ぎじとぞ見えたりける。され共、長崎次郎は未だ討たれず、主従たゞ八騎に成つて戦ひけるが、猶も義貞に組まんと伺うて、近づく敵を打拂ひ、やゝもすれば差違へて、義貞兄弟を目に懸けて廻りけるを、武藏國の住人横山太郎重眞、押隔て、是に組まんと、馬を進めて相近づく。長崎もよき敵ならば組まんと、懸けあひて是を見るに、横山太郎重眞なり。さては合はぬ敵ぞと思ひければ、重眞を弓手に相受け、冑の鉢を菱縫の板まで割り著けたりければ、重眞二つに成つて失にけり。馬も後居に打ちすゑられて、小膝を折つてどうと伏す。同國の住人庄の三郎爲久是を見て、よき敵なりと思ひければ、續いて是に組まんとす。大手をはだけて馳せ懸る。長崎遙に見て、から／＼と打ち笑うて、黨の者共に組むべくは、横山をも何かは嫌ふべき。あはぬ敵を失ふ様いで／＼己に知らせんとて、爲久が鎧の揚卷つかんで宙に提げ、弓杖五杖ばかり、安々と投げわたす。其の人飛礫に當りける武者二人、馬より倒まに打ち落されて、血を吐いて空く成りにけり。高重今はとても敵に見知らぬる上はと思ひければ、馬を懸け据ゑ、大音揚げて名乗りけるは、桓武第五の皇子葛原親王に三代の孫、平將軍貞盛

より十三代、前相摸守高時の管領に、長崎入道圓喜が嫡孫、次郎高重武恩を報せんため討死するぞ。高名せんと思はん者は、寄れや組まんといふ儘に、鎧の袖引きちぎり草摺あまた切り落し、太刀をも鞘に納めつゝ、左右の大手をひろげては、此所に馳せあひ、彼所に馳せちがひ、大童に成つて驅け散らしける。かゝる處に、郎等ども馬の前に馳せ塞がつて、如何なる事にて候ぞ。御一所こそ斯様に馳せ廻りませ、敵は大勢にて早谷々に亂れ入り、火を懸け、物を亂妨し候ふ。急ぎ御歸り候うて、守殿の御自害をも勧め申させ給へと云ひければ、高重郎等に向つて宣ひけるは、餘りに人の逃ぐるが面白さに、大殿に約束しつる事をも忘れぬぞ。いざさらば歸り參らんとて主従八騎の者共、山ノ内より引き還しければ、逃げて行くとや思ひけん。兒玉黨五百餘騎、きたなし返せと罵つて、馬を争うて追懸たり。高重こと／＼しの奴原や、何程の事をか仕出すべきとて、聞かぬ由にて打ちけるを、手繁く追うて懸りしかば、主従八騎屹と見返つて、馬の轡を引き廻はすとぞ見えし、山内より葛西谷口まで、十七度まで返し合せて、五百餘騎を追退け、又閑々とぞ打つて行きける。高重が鎧に立つ處

の矢二十三筋、箕毛みけの如く折りかけて、葛西谷へ参りければ、祖父おぢいの入道待ち受けて何とて今まで遅かりつるぞ。今は是までかと問はれければ、高重畏り、もし大將義貞に寄せ合はせば、組んで勝負をせばやと存じ候て、二十餘度まで懸け入り候へども、遂に近づき得ず。其の人と覺しき敵にも見合せ候はで、そゞろなる黨の奴原四五百人切り落してぞ候ひつらん。あはれ罪の事だに思ひ候はずば、猶も奴原を濱面へ追出して、弓手馬手ゆんでめてに相つけ、車切、胴切立割たてわりに仕り棄てたく存じ候ひつれども、上の御事何かと御心元なくて歸り参りて候と、聞くも涼しく語るにぞ、最期に近き人々も、少し心を慰めける。

二二二 結城入道地獄に墮る事

『太平記』

中にも結城上野入道が乗たる船、惡風に放されて、渺々たる海上に揺られ漂ふ事七日七夜なり。既に大海の底に沈むか、羅刹國らせつこくに墮るかと思えしが、風少し静りて、是も

伊勢の安野津へぞ吹著られける。こゝにて十餘日を経て後、猶奥州へ下らんと渡海の順風を待ちける處に、俄に重病を受けて、起居も更に叶はず、定業極まりぬと見えければ、善知識ぜんちしきの聖枕せいしんに寄つて、此程まではさり共とこそ存候ひつるに、御勞日ごらうひに随つて重らせ給ひ候へば、今は御臨終の日遠からじと覺えて候、相構へて後生善所の御望怠る事無くして、稱名の聲の内に、三尊の來迎を御待候べし。さても今生には何事をか思召置かれ候。御心に懸る事候は、仰せおかれ候へ。御子息の御方様へも傳へ申候はんと云ひければ、此入道已に目を塞がんとしけるが、かつばと跳起て、からくと打笑ひ、戦たたかいたる聲にて云ひけるは、我已に齡七旬に及んで、榮花身に餘りぬれば、今生に於ては一事も思殘す事候はず。唯今度罷上つて、遂に朝敵を亡し得ずして、空く黄泉の旅に赴きぬる事、多生廣劫までの妄念となりぬと覺え候。されば愚息にて候大藏權少輔にも、我後生を弔はんと思はゞ、供佛施僧の作善をも致すべからず、更に稱名讀經の追資つひをも成すべからず、唯朝敵の首を取て、我墓の前に懸竝べて見すべしと云置ける由傳へて給はり候へと、是を最後の詞にて、刀を抜きて逆手に持ち、齒嚙

をしてぞ死にける。罪障深重の人多しといへ共、終焉に是程の悪相を現する事は、古今未だ聞かざるの所なり、げにも此道忠が平生の振舞を聞けば、十惡五逆重障過極の悪人なり。鹿をかり鷹を使ふ事は、せめて世俗の態なれば言ふに足らず。咎なき者をうちしぼり、僧尼を殺す事数を知らず。常に死人の首を目に見ねば、心地の蒙氣するとして僧俗男女を云はず、日毎に二三人が首を切て、態と目の前に懸けさせけり。されば彼が暫も居たるあたりは、死骨滿ちて屠所の如く、尸骸積んで九原の如し。此入道が伊勢にて死したる事、道遠ければ故郷の妻子未だ知る事無りけるに、其頃所縁なりける律僧、武藏國より下總へ下る事あり。日暮れ野遠くして、留るべき宿を尋ぬる處に、山伏一人出来て、いざさせ給へ、此邊に接待所の候ぞ。其所へ連れ進らせんと云ひける間、行脚の僧悦んで、山伏の導に相従ひ、遙に行きて見るに、鐵の築地をついて、金銀の樓門を立てたり。其額を見れば、大放火寺と書きたり。門より入つて内を見るに、綺麗にして美を盡せる佛殿あり。其額をば理非斷とぞ書いたりける。僧をば旦過に置いて、山伏は内へ入りぬ。暫くあつて、前の山伏、内より螺鈿の匣に法華

經を入れたるを持來つて、唯今是に不思議の事あるべきにて候。いかに恐しく思召候共、息をもあらくせず三業を静めて、此經を讀誦候べしと云つて、己は六の卷の紐を解いて壽量品を誦み、僧には八の卷を與へて、普門品をぞ讀せける。僧何事にやとあやしく思ひながら、山伏の云ふに任せて、口には經を誦し、心に妄想を拂つて、寂々としてぞ居たりける。夜半過ぐる程に、月俄にかき陰り、雨あらく電して、牛頭馬頭の阿防羅刹共其數を知らず大庭に群集せり。天地須臾に換盡して、鐵城高く峙ち、鐵の網四方に張れり。烈々たる猛火燃えて、一由旬が間に盛んなるに、毒蛇舌を延べて燄を吐き、鐵の犬牙をといで吠え怒る。僧是を見て、あな恐ろし、是は無間地獄にてぞあるらんと、恐怖して見居たる處に、火の車に罪人を一人載せて、牛頭馬頭の鬼共轆を引いて、虚空より來れり、待て忿れる惡鬼共、鐵の俎を重ねて、諸々の鬼共膝を屈し脰を延べて、えいや聲を出し、えいやノと推すに、俎のはづれより、血の流るゝ事油をしたづるが如し。是を受けて大きな鐵の桶に入れ集められたれば、程なく十分湛へて、滔々たる事、夕陽を浸せる江水の如くなり。其後二の俎を取除けて、紙

の如くに推しひらめて、鐵刀に鐵の魚箸を取添へて、寸分に是を切割て、銅の箕の中へ投入たるを、牛頭馬頭の鬼共、箕を持って活々と唱へて、是を簸けるに、罪人忽に蘇つて、又もとの形になる。時に阿防羅刹鐵の笞を取つて、罪人に向ひ、怒れる言葉を出して、罪人を責て曰く、地獄地獄に非ず、汝が罪汝を責むと、罪人此苦に責められて、泣かんとすれども涙落ちず、猛火眼を焦す故に、叫ばんとすれ共聲出でず、鐵丸喉を塞ぐ故に、若一時の苦患を語るとも、聞人は地に倒れつべし。客位の僧是を見て魂も浮れ骨髓も碎けぬる心地して、恐ろしく覺えければ、主人の山伏に向つて、是は如何なる罪人を加様に呵責し候やらんと問ひければ、山伏の云ふ、是こそ奥州の住人結城上野入道と申す者、伊勢國にて死して候が、阿鼻地獄へ落らて、呵責せらるゝにて候へ。若其方様の御縁にて御渡り候はゞ、跡の妻子共に、一日經を書き供養して、此苦患を救へ候へと仰せられ候へ。我は彼の入道今度上洛せし時、鎧の袖に名を書いて候ひし六道能化の地藏薩埵にて候なりと、委く是を教へけるに、其言未だ終へず、曉を告ぐる野寺の鐘、松吹く風に響いて、一聲仄に聞えければ、地獄の鐵城も忽にか

き消す様に失せ、彼の山伏も見えず成つて、且過に坐せる僧ばかり、野原の露の上に惘然として居たりけり。

二三 藤房入道鷹巢山にて讀經の事

松

翁

刑部卿義助朝臣の越前國よりいまして物語に、越前の國鷹の巢の山は高くそばだちて城廓に然るべき處なりければ、六郎左衛門時義といふ者に守らせけるに、案内を知らむが爲に猶奥深く分け入りにけるに、谷川のいと清く流れけるを其の水上を尋ねに登りけるに、さし出でたる岩をかたどりて、松の葉にて葺きたる庵の見えけるを、かゝる處にも住む人のありけるにやと立ち寄りて見侍れば、木の葉を集めて蓆とし、平らなる石の上に法華經を置きける外には何も見えず。暫しありけるに、山路をたどり來る人を見れば、瘦せ衰へたる僧の櫛を手に持てり、いかにし給ふにやと物のかくれより見けるに谷川の水を掬ひて庵の内に入りて經の紐を解きたるほどに、讀みはじめ給

はぬさきにと急ぎ行きて、かゝる御住居こそいと貴く覺え候へ、いかなる人の世をそむかせ給ひけるにやと問ひ奉るに、そこには如何にと尋ねさせける程に名のりをしつれば、いと本意なきさまして、吾妻の者にこそとばかり宣ひて經を讀み給ひし程に歸りて候へ、藤房卿の御面影して侍るといひしまゝに、いとゆかしくて一條少將を伴ひて參りけるに、庵は其の儘ありて僧は見え給はず。經のありつる石と聞えしに、

こゝもまたうき世の人の問ひくれば空行く雲に宿もとめてむ

と書きつけ給へる筆の跡を、少將の能く見知り給ひて、其のほとりの山々を尋ねさせ給ひけれども、更に見え給はねば、いと本意なくてと宣ひしを、人々聞きも敢へ給はで、皆涙落してけり。さしもいみじかりける人の聞きしがごとの御住ひはまことにありがたき御心にこそ。年月を合せて見侍るに、君が住む宿と言ひこされしは後の事なり。越の方より筑紫へ通り給ふらむ折にや。其の後は絶えて御音信も聞かざりし。此の藤房は大納言宣房の子なりしを、才智世にすぐれさせ給ひて、君にも御覺えの淺からで中納言までなり給ひしが、建武甲戌（のえい）の年の春俄に世を捨て給ひし。(吉野拾遺)

二四 鶉

飼 謠曲

作者 不詳

ワキ詞「是は安房の清澄より出でたる僧にて候。我未だ甲斐國を見ず候程に、此度甲斐國行脚と志して候。サシ誦「行末いつと白波の、安房の清澄立ち出で、六浦のわたり鎌倉山、ワキ二人上歌誦「やつれはてぬる旅姿、捨つる身なれば恥ぢられず。一夜假寝の草薙、鐘を枕の上に聞く、都留（つ）の郡の朝立つも、日たけて越ゆる山道を、過ぎて石和（い）に著きにけり。過ぎて石和に著きにけり。ソナヘ一歌誦「鶉舟にともす篝火の、後の關路を如何にせん。サシ實にや世の中を、憂と思は、捨つべきに、其心更に夏河に、鶉使ふ事の面白さに、殺生をする果敢なきよ。詞傳へ聞く遊子伯陽は、月に誓つて契をなし夫婦二つの星となる。諺今の雲の上人も、月なき夜半をこそ悲み給ふに、我はそれには引替へ月の夜頃を厭ひ、闇になる夜を悦べば、下歌鶉舟にともす篝火の、消えて闇こそ悲しけれ。上歌つたなかりける身の業と、拙なかりける身の業と、今は先非を悔ゆれども、甲斐も浪間に鶉舟漕ぐ是程惜めども叶はぬ命つがんとて、營む業の物憂さ

よ。營む業の物憂さよ。

シテ詞「いつもの如く御堂に上り鶺鴒を休めうするにて候。や、是は往來の人の御入り候よ。ワキ詞「さん候。往來の僧にて候が、里にて宿を借り候へば、禁制の由申し候程にさて此御堂（こみど）に泊りて候。シテ詞「實に〜里にて御宿參らせうする者は覺えず候。ワキ詞「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。シテ詞「さん候、是は鶺鴒使にて候が、いつも月の程は此御堂に休らひ、月入りて鶺鴒を使ひ候。ワキ詞「さては苦しからぬ人にて候ぞや。見申せば早拔群（はやはつぐん）に年長け給ひて候が、かゝる殺生の業勿體なく候。あはれ此業を御とまりあつて、餘の業にて身命を御つぎ候へかし。シテ詞「仰せ尤にて候へども、若年より此業にて身命を扶かり候程に、今更止まツつべうもなく候。ワキ詞「如何に申し候此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三箇年前に、此河下岩落と申す所を通り候ひしに、かやうの鶺鴒使に行き逢ひ候程に、科の中の殺生の由を申して候へば、實にもとや思ひけん、我が家に連れて歸り。一夜けしからず攝して候ひしよ。シテ詞「さては其時の御僧にて渡り候か、ワキ詞「さん候其時の僧にて候。シテ詞「なう其の鶺鴒使こそ空

しくなりて候へ。ワキ詞「それは何故空くなりて候ぞ。シテ詞「恥しながら此業にて空しくなりて候。其時の有様語つて聞かせ申し候べし。跡を弔うて御遣り候へ。ワキ詞「心得申し候。シテ詞「抑此石和河と申すは、上下三里が間は堅く殺生禁斷の所なり。今仰せ候岩落邊に鶺鴒使は多し、夜なく〜此所に忍び上つて鶺鴒を使ふ。悪き者の仕業かな、彼を見顯はさんと計（たく）みしに、それをば夢にも知らずして、又或夜忍び上つて鶺鴒を使ふ。狙ふ人々ばつと寄り、一殺多生の理にまかせ、彼を殺せと言ひあへり。諺其時左右の手を合せ、かゝる殺生禁斷の所とも知らず候。向後の事をこそ心得候べけれど、手を合せ歎き悲しめども、助くる人も波の底に、ふしづけにし給へば、叫べど聲が出でばこそ。詞其鶺鴒使の亡者にて候。ワキ詞「言語道斷の事にて候。さらば罪障懺悔に、業力の鶺鴒を使うて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候べし。シテ詞「あら有難や候。さらば業力の鶺鴒を使うて御目にかけて候べし。跡を弔うて給はり候へ。ワキ詞「心得申し候。シテ詞「既に此夜も更け過ぎて、鶺鴒使ふ頃にもなりしかば、いざ業力の鶺鴒を使はん。ワキ詞「是は他國の物語、死したる人の業により、かく苦みの憂き業を、今見る事の不思

議さよ。シテ詞「しめる松明振り立て、」ワキ「藤の衣の玉櫛、シテ詞「鶺鴒籠を開き取出し、」ワキ「島つ巢おろし荒鶺鴒ども、シテ詞「此河波にばつと放せば、」地「面白の有様や底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひあげ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後世も、忘れはて、面白や。下歌漲る水の淀ならば、生簀の鯉やのぼるらん。玉鳥河にあらねども、小鮎さばしるせせらぎに、かたみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ。鶺鴒舟の篝火消えて、闇路に歸る此身の、名殘惜さを如何にせん。」ワキ上歌「河瀬の石を拾ひ上げ、河瀬の石を拾ひ上げ、妙なる法の御經を、一石に一字書きつけて、波間に沈め弔は、」などかは浮まざるべき。などかは浮まざるべき。

後シテ「それ地獄遠きにあらず、眼前の境界、惡鬼外になし。抑かの者、若年の昔より、詞江河に漁つて其罪おびたし。されば鐵札敷を盡し、金紙をよごす事もなく、諸無間の底に詞墮罪すべかつしを、一僧一宿の功力に引かれ、急ぎ佛所に送らんと、惡鬼心を和らげて、鶺鴒舟を弘誓の船に爲し、諸法華の御法の助舟、篝火も浮むけしきかな。

地「迷の多き浮雲も、シテ「實相の風あらく吹いて、」地「千里が外も雲はれて真如の月や出でぬらん。

上「有難の御事や。奈落に沈む惡人を、佛所に送り給ふなる、其瑞相のあらたさよ。シテ「法華は利益深き故、魔道に沈む群類を、救はん爲に來りたり。地「實に有難き誓かな。妙の一字はさて如何に。シテ「それは褒美の詞にて、妙なる法と説かれたり。地「經とはなどや名付らん。シテ「それ聖教の都名にて、地「二つもなく、シテ「三つもなく、地「唯一乗の徳によりて、奈落に沈みはて、浮み難き惡人の、佛果を得ん事は、此經の力ならずや。キ「これを見彼を聞く時は、是を見彼を聞く時は、たとひ惡人なりとも、慈悲の心を先として、僧會を供養するならば、其結縁に引かれつゝ、佛果菩提に至るべし。實に往來利益こそ、他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

一五 志

賀 謠曲

作者 不詳

ワキ三人次第詠「道ある御代の花見月、道ある御代の花見月、都の山ぞ長閑き。ワキ詞」そ
も／＼是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻、今を盛りなる由承り及
び候程に、只今志賀の山路へと急ぎ候、ワキ三人道行詠「春の色、棚引く雲の朝ぼらけ、
棚引く雲の朝ぼらけ、長閑けき風の音羽山、今朝越え來れば是ぞ此の、名に負ふ志賀
の山越や、湖遠き眺めかな。ワキ詞」急ぎ候程に、江州志賀の山に著
きて候。暫く此所に候ひて花を詠めうするにて候。シテツレ詠「さゝ波や、志賀の都
の名を留めて、昔ながらの山櫻、ツレ詠」春に馴れてや心なき、シテ、ツレ詠「身にも情の
残るらん。シテ、サシ詠」山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲、シテ、ツレ詠「人間萬事様々の、世
を渡り行く身の有様、物毎に遮る眼の前、光の影をや送るらん。下歌餘に山を遠く來
て雲また跡を立ち隔て、上歌入りつる方も白波の、入りつる方も白波の、谷の川音雨
とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて、半日の客たりしも、今身の上に知られ
たり。今身の上に知られたり。

ワキ詞「不思議やな是なる山賤を見れば、重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ、休む所

も花の蔭なり。是は心有りて休むか、只薪の重さに休み候か。シテ詞「仰せ畏つて承り
候ひぬ。先つ薪に花を折る事は、詠道のべのたよりの櫻折り添へて、詞薪や重き春の
山人と、歌人も御不審有りし上、今更何とか答へ申さん。ツレ詠「又奥深き山路なれば
松も檜原も多けれども、取り分き花の蔭に休むを、シテ詞「只薪の重さに休むかとの、
おほせは面目なきやなう。シテ、ツレ詠「さりながら彼の黒主が歌の如く、其様賤しき山
賤の薪を負ひて花の蔭に、休む姿は實にも又、其身に應せぬ振舞なり。許し給へや上
鶴達。ワキ詞「こは如何に優るをも羨まされ、劣るをも賤しむなとの、古人の掟は眞な
りけり優しくも、古歌の喩への心を以て、詠「今の返答申したり。シテ詞「いや／＼古歌
の喩へとやらんも、更々知らぬ身なれども、賤しき身にも思ひよりて、ワキ詠「彼の大
伴の黒主が、心を寄する老の波、シテ詠「和歌の浦わの藻鹽草、ワキ詠「かく喩へ置く世
話の、シテ詠「それは黒主、ワキ詠「是は眞に、シテ詠「さまも賤しき、ワキ詠「山賤の、
地詠「身には應せぬことなれど、許させ給へ都人、とても思出に、花の蔭に休まん、
實にや今までも、筆を殘して貫之が、詞の玉のおのづから、古へ今の道とかや。古へ

今の道とかや。

クリ地謡「それ賢かつし時代を尋ぬるに、延喜の聖代の古へ、國を恵み民を撫でて、萬機の政を治め給ふ。シテ、サシ謡「然れば其御時に至つて、和歌の道盛にして、古今の詠歌を撰み。地謡「二聖六歌仙を始として、其外の人々は、野邊の葛のはひ廣がり、林に茂き木の葉の露の、色に染み行く歌人の、心は花になるとかや。シテ謡「實に埋木の人知れぬ、地謡「ことわざまでの情とかや。クセそもく難波津淺香山の、影見えし山の井の、淺くは誰か思ひ草の、露行き霜來る色なれや。濱の眞砂より、數多き言の葉の心の花の色香までも、妙なりや敷島の、道有る御代のもて遊び。然れば三十一文字の神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れたまへば、君も安全に、萬民時を樂みて、都鄙圓滿の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬歳の響は長閑けかりけり。シテ謡「今天皇の御代久に、地謡「萬の政の、道直ぐに渡る日の、東南に雲をさまり、西北に風靜にて、言葉の林榮ゆくや、花も常盤の山松の、巷に謠ふ聲までも、是和歌の詠に漏るべしや。天地を動かし、鬼神も感をなすとかや。

ロンギ地謡「實にや異なる山賤の、實にやことなる山賤の、家路いづくの末ならん。ゆかしき心なるべし。シテ謡「今は何をか包むべき、其いにしへは大伴の、黒主といはれしが、時代とて此山の、神とも人や見るらん。地謡「そも此山の神ぞとは、不思議やさては大伴の、シテ謡「それは黒主が家の名の。地謡「大伴か。シテ謡「我はたゞ、地謡「薪負ふ友もなくて、ひとり山路の花の蔭に、長休みしつる恥かしやと、夕の雲に立ち隠れて、志賀の宮路に歸りけり。志賀の宮路に歸りけり。

ワキ上歌謡「いざ今日は、春の山邊にまじりなん、春の山邊にまじりなん、暮れなばなげの花の蔭、月に詠じて天の原、時の調子に移り來る、舞歌の聲こそあらたなれ。舞歌の聲こそあらたなれ。

後シテ謡「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山、越えても同じ花園の、里も春めく近江の湖の、志賀辛崎の松風までも、千聲の春の長閑けさよ。海越に、見えどぞ向ふ鏡山、地謡「年經ぬる身は老が身の、シテ謡「それは老が身これは志賀の、地謡「神の白木綿かけまくも、忝しや神樂の舞。

「ロンギ地謡」不思議なりつる山人の、不思議なりつる山人の、薪の斧の永き日も、残る和光のあらたさよ。シテ謡「實に惜むべし君が代の、長閑けき色や春の花の、塵に交はる雪ならば、踏む跡までも心せよ。地謡「實に心して春の風、聲も添ふなり御神樂の、シテ謡「小忌の衣の色はえて、地謡「花は梢の白和幣、シテ謡「松は立枝の、地謡「青和幣、かくるやかへるや梓弓、春の山邊を越え來れば、道も去りあへず散る花の、雲の羽袖を返しつゝ、紅の御袴のそばを取り、拍子を揃へて神かぐら、實に面白き奏かな。實に面白きかなでかな。

一六三 愛記

牡丹花宵柏

此のごろ世に一人の居士あり。儒釋道によらず、其の形自然にして、九重の中に年を送りしが、近きころほひ、津の國稻野の渡りに庵を結びて夢と號し、みづから牡丹花を名とせり。身に負はぬやうに聞え侍れど、萬物一體の理を思ふにや、常のことぐさに花を弄び、香を執し、酒を愛す。此の三は、古往今來、上聖大賢もこれを用ひ、村

老小兒も賞せずといふ事なきにや、叟少年のむかしより、宮禁の月下に春宵の一刻を惜み、吉野山に度々入りて西上人の跡をしたひ、近き國々、名ある所々の風光に映じ、春の道芝にまじる小草にも心を止め、夏の茂みを分け、賤の屋の垣根にむすぼれたる茨の上をも見捨てず、霜枯の野らに残る一花までも、袖を觸れずといふ事なし。中にも錦宮城の曉の紅を腸にしめ、桃李の春風に頽然として臥し、胡蝶の夢の中に一生を任せ、時を感じては涙を賤ぐのみなり。香は沉水をもととして、此の國に久しく侍りし蘭奢待、紅塵、中河など名高さを賞し、合せたきものは、梅花、荷葉、新枕等をもてはやし、家々にいどみ來れる秘方をも傳へて、いさゝかの深さ淺さを調べ、夜雨同參の枕に、晝簾の聲に和し、塵裏の閑を盗みて吟詠のほか餘事なし。酒は諸越、南蠻のあちはひを試み、九州の練拔、加州の菊花、天野の出群なるを求め、薄と濁醪に至るまで、一酌に千憂を散じ、或は春衣をおきのひて酔を盡し、是を以て風寒を避け稀なる齡にも超えたり、しばしば壽を永くして心を年少のはじめに返す。抑建仁寺の正宗和尚は、命を請けし尊老なり、常庵相ついで舊好たり、此の三つの徳を記し給

ふべき由望みしかば、一章を書し、三愛と題し給へり。其のことは奇妙、感歎迷ふべからざるをや。爰に或童子の、あやにくに此の事を和げて書きあらはすべき由、懇望なりしかば童蒙にしたがひて、かたはしを筆にそむる事しかなり。

二七 かやくき

藤原惺窩

かやくきの籬まがきにかけるよるへもあさはかに、鳩つばの浮巢うきすのたよふいとなみもあたなれど、さばかりたになくて、かくやつしき身にしもありけるかなや。さりとして人の隣をしめんとすめれば、世にかすまへられぬ物しか、とをいつたりの數あるなかに、連ね罪なはるらん、於商の君がまつりこちしをりにさへあひぬ。牛ならぬ鼻繩なすなさゝれ馬ならぬふもたしかくらはんは、げにわびしかるべき世にしもありけるかなや。やんことなくてたましく人遠く、幽かすかなるところ一つもとめ得しかと、うさぎの裘けころもと答へし文なんつくらまほしく、假かりの家居も飛鳥川の瀬に變り行くことの葉のすゑ、思ひ出つべくなりもて、荒れわたる庭の面おもては、京極の遠つおやのやとからそ、都のうちのふるこ

とも、あらかじめけふをやはみそなはしけんといぶかし。せめての心やりをや、いにし年松あまた薄すすき一むら栽えそへつゝ、朝夕のすさみにさし向ひをり、今たにかゝりと聲をあげてなくめり、とはかりありて謠ふその薄の歌

しけき野のむしの音かねてわれそなくひとむら薄栽えそめしより

又うたふ松の歌

身をかくすやすかの山もあらなくなれたにしげれ庭の松かけ

とのみ頼むものから、月ばかりは漏り來きかすとそおもふ。さりぬべき夜々よなは、契あやまたすて月は出でにけり。葉わけにくたくる光り、ところせうきらめきあひ、これさへ山の姿をおもかけにして、まづなつかしく嬉し。さはいへどいつかは望みなふべからんを、何を待顔まちかほにおほけなき、あらましのほとこそうたてはかなしな。ひとりされたる竹の杖に寄り居、影と三人みたりの古の空まで、心の隈なく澄みのぼり、目もうつらしくながむれば、四方に人静まりぬれど、木末よりかよふ物の音こそ聞ゆれ、金かねにあらず石にあらず、絲竹いとたけにはあらずかし。手の足の踏み舞ふかぎりもおもほえず、ほし

くしくやありけらし。たゆからずしもあらねば、ねやさしこもりひきかくる、あさてこふすまの下になほ耳をおほひふしぬ。ふけ行くにやあらん調いかにぞやあらたまり、五湖の濤に三更の枕を高うしてゆるらかにまどろめば、夢だに清まる心地ぞするや、ねたし時守のうちなす鼓に、ふとむねつふれころのひして覺めぬれば、かはらの窓、桑の樞の隙し白くなるまゝに、起き出で見れば、いたくかしける薄の、頭の花に霜おきまよひ、うれ葉の風のそよさららに、心もなくて寒く立てるも、己がたくひしられてはたかはゆし。おもへとくすべこそなけれ、影より外に語らふ友もなしや、蘇門の山に長く嘯く人こそ、もとより面馴れ交はり逆らふこと無かりしか、なへてなさけすくさず、みさはいや高しとぞいふめる。あはれ獸の心なくて。人のしわざもてあそぶ世ならましかは、いひ述ぶることくさ、書きすさむ墨の跡は、扇を賣る賤の女もめでつべく、紙を鬻ぐ市人も、價ましぬはかりものしたまふれば、こととひわび聞こゆ、おはする山のそはのたつきに居る鳩の、友呼ぶ聲はきゝたまふや。彼しら然り。まして人としてとかこちやれば、いで此の山住の心うかゝひて、同じかさしをとあか

しながら、世のならはしのさかなくて、難波のよしといひつゝも、あし間の舟のさはるふしおほかれはや、彼處にも思ふゆゑあらん、此處にもいふことあれと、ゆくりなく絶えて久しくおとつれさりし後、年はかへれど、花鳥の色にも音にもうとまりはて日は春とくるゝことあり、憂は酔と醒ること無く、うはひもさゝぬ夏の空は、雌雄の風の人わきしぬるを恨み、身一つの秋の袖に、紅葉こさいれしかたみだに、あらでおもはんことのやさしく、年も亦や暮れぬ。彼の山より消息もてく、頃しも神無月時雨にきはふ檜の葉の、ふりにし姿を二歌につくり、山すみの心未だとけず、ほいなくなど、言葉の外に心の底を盡し、うるせくなにかいたまへり、鍾山の英靈も、此の柱の神の御心にやと、面ほてりし恥らひて止みぬ。此の二歌は夜光る玉なるを、暗きに投げ與ふれば、劍はなくて、いとも鈍き筆の鋒をにらぎて、むくひせんとす。しれる前には、はもとにいたれらんゑみをそまねくへかめれと、そをだに願はしければ、やらんかたなくふつくみあまり、文字の數も定まらず、ことの心わき難き、むかしを更にしのびかへさむとなるべし。やよや心をさへはふらしすてつる、けうの男子にし

もあなりとて、罪ゆるべたまひてんとよ。

君かすむ山の田ふせにふせ庵を我もむすはな契りたかふなゆめ
にごり酒にごらぬ人とよしゑやしゑひなきしつゝわらはなむやそ

二八 妙壽院につかはす詞 長 嘯 子

ふるふみの紙魚にさゝれたるはらほと見れば、玉の臺のけうらなるも、常の床には
あらざりけりな。草の戸さしのはかなげなるも、たつきは同じすちなりけりなとは、
思ひしる憂き身ながら、とすればかゝる世のありさま、あないひしらぬねちけ人の、
肩を時て耳をすへて、舌は刀の鋭きよりもおそろし。隣を断ち、外を疵つく、かれに
なくれとはますとやらん、つら杖をつきてねんすめれば、たふさもいたくそこなはれ
つべし。さりとて目に見ざらん虫も、蚊のまつげに巢くふばかりのよすがやはあらぬ
かうく昔にかへり今になりて、おもひつくるよなくは、何がしのおその身をかく
すべき宿のあらまし。又いかさまに住佗し秋も更けぬ、淺茅が原の松虫の音に、きの

ふの木といへらく人市のしつらひを門さして、八重葎せり我庵は、都の東わしの山本
といひたる、たふせのかたはらにうつろへ給はん心ざしおはす、秋の田の假庵作りを
れと、袂そほつは人のたのみをまもり、わさほのかつらかけはなれし世の名残だにな
く、庭も離も倒れにたれば、野分のあしたの氣色おぼえて、中々えんなる住家、竹垣
はしとろに見ゆ、おのれしも家出しぬべく、小篠かるあけまきならで、又人目なき谷
ふところ求めいて給ひけん、所のさま大方もよろしく、長閑なる山蔭なれば、友を尋
ねしすみかめきて、よしある吳竹えもいはぬ常盤木とも、心地よげに茂りあひて、日
をさふる下蔭夏はたのもし。なみたてる松の秋風空にわたかまり、叢に落ちて露の玉
の緒吹きとくゆふばへそゝる寒きまで、さもあらばあれ山深くのがる、人、あら熊の
となりをしめぬれば、ふすやを鹿のねふりをならへ床をかけるもあはれならし。木末
の月の隈なき夜は、峽に叫ぶ猿の聲わひしくて、藤衣の袖をうるほす、暮ると明くと
薪おへる山人となり、花の蔭にやすみ、時しあれば瀧津ながれの末をむすび、あゆこ
さばしる清き瀬々に、心をやりて釣居たらん、たゞ何となく静にして、八十のちまた

にけがれぬをのみ本意^{本意}とやは思ふ。いさやしらぬ事さのみいは人^人わらへなるべし。我又おぼえぬ隣まうけて、庵ならべん樂み、なてう四の物はあはざらめや。もとより千里も遠しとすまじき間^{あひだ}なれど、願はくは葦垣の間近く語らひて、おほき聖^{ひじり}ののたまへる、十の道あやまたぬをしへを、とまらぬ心のおろかさにも、せめては聞きたまへてとなん。ともすれば經史の暇つくりいでて、壁にそむける燈火もさらにかゝけずして、敷島の道たつぬらんを、情ふかからぬかは、名たゝる宿の言葉の花、あとかうばしくうち向ふ山も我も、よこほりふせる窓の中に、のらぬ物かはよその浮雲、これより名におへる横臥樓とかや、さながら枕を雲にふしておほめき給ひけん、甘ばかり重ねあげたらん山も、簾をまけばよぞひけさやかに見えて、あひやとりする窓の内、かの中山にはあらで、けゝれなくわつらはしき物あれば、すみうかれなんとぞ有りし、さはいへど此山つみまたねき事も聞きいれすなと、あふさきるさにむすほるゝは、あなたのないせをだにつけやらん方なし。何やかやとたゆたふまゝに、れいならぬ愁もいでくめり、ひだやこもりになりまさりて、春のひかりもよそなる心地す。ほつえの

梅にはふより、山吹のうつろふ色、くちをししく見す成りにき物にもかなやと、春の別はあかすくちをししくや、萩の葉むけ風のおとかはれり、いつしかもと驚かれて、空に鳴きわたる雁のつばさにも、書き絶えにける玉章^{たまつさ}は、ふとおもひいづ、その頃の其折何のゆふべの其事と、月のかほやつしかちに、あはぬ日數のつもりはて、年の行くゑもあはたゝし、何なる契しありければや、かくまでもおほしなりて、中垣はかりの隔てにと聞えたまへる。南のすそ錦の里人のなすらへにはあらさらめと、心ひとつはほこらし、むべねかひけり雲ならんとは、今もふりさげうちなかめらる。いもやすからずたばかるめれど、猶山つみしゝたくるわざはとうてぬや、其程かつゝ思ひをのべて、おとつれがてらの歌作れり。いはゆる萬葉の古風をまねびそこなへる姿言葉、いとく醜^{みにく}かたはらいたけれど、あまりに園をみたまへらぬ、心ふかさをねたましければ、なにはかりもてさまたけましと、かうやうのそほれ事しとけなくやありけんこそ。

そま人の尾花かりふき庵せば我もたゝにしあらんともはず

墻こしによひてももとな我いつか濁れる酒を君とのむべく

二九 萬里江山石記

烏丸光廣

いつれの人にかありけむ、此石を萬里江山と名つけ侍る。莊周とやらむかいひし、泰山は小さく秋毫は大きなり。其の理はしばらく措く、小さき物の上に、大きな姿を見るつねのことなり。しかはあれと尺はかりにだにも足らぬ石の、千里の外の山のたゝすまひ、あらぬ海の入江の、面影をうかべて見せたる、あやしといひつべし。武宗の遊びけん石は、松風のちからをかりてすゝし。これは見るよりさながら涼窓もたりぬれば、下に立たんことかたし。山科の禪師のみこの、千里の濱の石も、庭にこそは立てけめ、床の上の具にやはある。坡翁か袖中に東海ありといひし、細吟おもひ出でらる。此石二峰あり、おのつから陰陽のことわりにかなへり。宣都郡の二大石になぞらへ、雨奇晴好すべてよろし。うしろは屏風を立てたるか如く、前には江を満ふ。清漂百丈深し、あけのそほ舟めに横はる。岩のはざまは、釣の翁の心もやとしつべく、

洞には仙人の住むべきたよりあり。谷の鶯は峰のはなにうつり、秋のもみちは蜀江の錦をあらふ、雪待ちえたるあしたは、天降るといふべし、旅衣だつ曉は、青巖峨々として鞋襪のつかれむ事をおそるあり、明の月の出入を觀しては、轉變有爲のことわりをおもふ。傍人のいはく、さはれ御代のときはのためしには、天津乙女の袖をふるとも、此巖はなでつくさしと、これをたゞに見むも、人岩木にあらねば、たくひなき心を富士の嶺によそへて、ゆめこゝろさしを述ふといふ。

山はふし江は松島をうつしるの筆ならなくに岩にみすらん

三〇 富士山 林羅山

富士山の名、ひとり我朝に鳴るのみならず、遠く中華まで聞こゆ。赤人が歌は萬葉に載せ、都良香が記は文粹に見えたり。徐福薬を尋ねて此の山に止まり、是を蓬萊山と名くる事は、義楚が帖にあらはし。六月雪花飄、素義、何所深林覓、白鬪、といへるは宋濂が曲にあらずや。しかのみならず羽客釋流の此山に跡を残す事は、役處士が創め

て攀躋りしより以來、空海、圓珍、岩石を刻みて佛軀を彫るもの山上に多かり。白衣天女の形をあらはし、淺間大神の跡を垂れまします、誠に我朝無双の名山なり。近代叢林の詩僧、此山を題せし中に、富山千仞雪峻嶒、幾度思登病未能、送汝錫飛三伏裏、歸來分我一壺冰、といへるは信義堂なり。大地撮來無寸土、當空還見此山成、海闊纔浸半邊影、多少漁舟載雪行、といへるは乾峯なり。絶頂雪殘春夏秋、暮烟一抹畫眉脩、吾疑上有望夫石、不耐閑愁獨白頭、といへるは岩惟肖なり。六月雲間積雪新、東遊未踏玉嶙峋、畫師今有移山力、一洗京鹿困暑人、といへるは惺瑞岩なり。富士峯高宇宙間、崔嵬豈獨冠東關、唯應白日青天好、雪裡看山不識山、といへるは彥希世なり。富士耳聞身未遊、畫圖相對與悠々、東關千里吟鞍上、晴雪趁人三五州、といへるは沅南江なり。五須彌外有須彌、呼作士峰呼是誰、六月雪飛寒徹骨、擘開芥子欲藏之、といへるは澤天隱なり。莫言北闕隔東關、富士朝々如對顔、四海一家皆帝力、千秋白雪御前山、といへるは三横川なり。士峰秀出海之東、名在景濂詩句中、若把白鷗論白雪、扶桑六十一雕籠、といへるは九萬里なり、天

台四萬八千丈、若在吾邦立下風、といへるは瑾雪嶺なり。工拙は具眼の人の知る事なれば、書き列べて置き侍るなり。其外騷人墨客の、詠じ漏らせるはあるまじきにや此頃人の作れるとて、青天忽見素羅笠擔中十五州、といふ句を聞きはんべるぞ珍らしきにや。我輩の今更口を開かん事は、人の涎を舐つて事あたらしきやうなれど、さりとて言はざらんも、懶惰のおそれあれば、聊申つゞけ侍る。彼の不與浮雲齊、といへるは此たかきにや。嵌空大始雪、とあるは此雪にや、衆山の嶺巔なるを知るは、此山に登りての事にや。天下を少しきに歩する人もあるべきにや、蓮花は早く崆峒は薄しといへるも、此山に對しての事にや。

一山高出衆峰巔、炎裡雪冰雲上烟、大古若同仁者樂、蓬萊何必覓神仙

(丙辰紀行)

三二 武田勝頼の最期

新井白石

武田が家滅ぶるに當りて、一族郎從悉く心變じて後矢射ける程に、勝頼行くべき方無

くして、田野の奥、天目山といふ所に落行き、敵こゝかしこに起りて今は逃るべきやうもなかりしかば、勝頼は川のはとりに敷皮しかせて敵を待つ。跡部尾張守此所に落合うて、つと馳せ抜けて逃げんとす。總藏昌恒きつと見て、やあ如何に跡部、御最期を見捨てまゐらせて、いづくまでかは逃げ延びん、不覺さよといふ儘に、大の中指抜き出だし、よつ引いて放つ、跡部たゞ中をぐつと射貫れて、馬より落ちて死してけり。總藏は勝頼に向ひ、御敵既に近づきぬ、昌恒防ぎ矢仕らん、御心静に御自害あるべしと申もあへず、矢束解いて押亂し、近付敵をさし詰め引きつめ散々に射る、むげに矢頃は近かりけり、一筋も徒矢無く、死生は死らす、矢庭に射倒さるゝ者こそ多かりけれ。其隙に、昌恒が舎兄金丸助六郎昌義、小原兄弟、女房達の介錯し、腹かき切つて伏す。勝頼みつから太刀を抜き、あたりを拂ひ切つてまはる、御曹司信勝これも同じくつゝきたり。昌恒矢種射盡して、打物の鞘をはづし、切つて出でんとする所を、かたき六人が鎗に貫かれ、忽に地に倒る。四郎不憫にや見たまひけん、左の手にて槍一々になぐり捨て、六人をかけす斬つて捨つ。我身又かたき三人が槍に貫かれ、父

子同じく討たれた給にけり。あはれ故大膳入道は、士を養ひ、武を講せしこと二十餘年、人を殺し地を開きしこと五六州、されば自ら天下定むるに足らずと思はれしに、身死し骨いまだ冷かならざるに、國破れ家滅ぶるに至りては、さしも年頃恩にも誇り功にも恃みし家の子郎等、強き者は君父に背きて後矢射、弱きたぐひは妻子携へて逃げ匿れ、此の日天正十年三月十一日、四郎と共に死したりしは、侍、雜人、僧、わらんべ、都合僅に四十四人、中にも一方の大將、侍の司など云はれし者、日頃の契をたがへぬは、總藏昌恒只一人、兄弟三人同じく死せしこそ無慚なれ。

(藩翰譜土屋家譜の一節)

三二 荒戸山

貝原益軒

福岡城の乾いぬみの方にありて、其の間近し。古歌に荒津とよめるは、博多をいへり。されど荒津の崎ともよみ侍れば、博多より此山までの間を、凡て荒津と稱するなるべし。此山に登りて四方をかへり見たる景色、いつも見る度に目を驚かし、時々につけて人

の心を動かせり。北海遙なりといへども、地方廣しといへども、たゞ一望するところの目撃の中にある。心飛揚し、身飄々として、あたかも空中に在るが如し。されば秋天のいと清く豁然なる日には、名護屋壹岐島など、ほのかに見えわたり、知らぬ新羅も見ぬ唐土も、猶其先にぞありなんと、はるけき人の國まで、目のあたり見る心地ぞし侍る。況や志賀の海士の鹽焼く煙、唐泊残の浦にたつ白波、唐土人の、白沙塗と書ける那多の長濱、北に向ひ見えたるは唯庭の前、籬の間に見るが如し。東は博多の人烟廣く賑ひ、千早振神代に植えし箱崎や、千代の松原は萬古の色を改めず。西には又百道松原、姪の濱の浦山生の松、長垂山まで松の林長く海邊に連れり。南には福岡の城目の前に近く、松樹の生ひ茂れるは、長へに緑をまじへ、千歳の久しきを保ちて國家の壽をなせり。時鼓の聲も、折々に聞えて、何となく人の心を驚かし、怠りを戒むる心地ぞする。それより猶も近き麓の里には、宅廣く、おのれく街をなし、門をならべて連れり。家園に多き梅柳は、湖水の此方において、冬籠りけるも、睦月の初めつかたは、江をわたりて春なりと云ひつべし。猶春深く成り行くまゝに、紅桃白櫻

の咲き續きて、色を争へるけしき、いと近き眺めなれば、殊に目を喜ばしめて、東風ぬるく吹き、空のけしき艶なる夕つ方は、天も人も共に花に酔へる心地ぞしはべる。城の西東には千村萬落多く見えわたり、民の竈の賑へるも、こゝに於いて考へ見るべし。秋の夜の月の光、海面の波に輝きわたりて、さながら金蛇の走るが如し。夕陽の春きて、海に入らんとする景色東の山にうつりて、ほのめける返照のよそほひなどこそは、誠に勝れて、月のさやかなるけしきにも、をさく劣らじとぞ覺えはべる。遠近の山、かたく廻り連りて、繪に書きたるよりも見所多く、四時につきて、人の目を喜ばしめ侍る。中について、筑紫にていと高き背振山は、南の方に聳えて、ひたぶるに爰にうち向ひたる如くにて、見る度に先づ心を留めらる。竈門山又名に負へる貴き御嶽なり。加也乃山高からずといへども、其の形勝れて目だつけければ、國の諺に筑紫の富士といへるも、實にさる事にこそ。春の始めつかたは、山々の高嶺に、去年より降り積みし深雪の猶残りて、千里までも氣色にこめたる霞のうちに、眞白に見ゆるは、すさまじくも長閑にもおもほゆ。山々の景色、霞の晴れ曇るにつきて、出沒定

まらず。朝夕の變態、極まり無き眺めなり。首を四方にめぐらし見るに、目の及べるところ甚廣くして、ところ／＼の風景かぎり無く、只眼力を以て境界として、目を遊ばしむる樂みの多事、萬戶侯の富にも、いかでか劣るべき。其上此の荒戸山に上れば、塵を斷ち、俗を離れて、浮世の外に出づる心地ぞし侍る。まことに類ひ少き佳境なるべし。天の橋立、嚴島、和歌の浦、竹生島、須磨、明石、吉野、初瀬など、ところ／＼佳境を多く見はべりしかど、おそらくは是にならべかたし。

(筑前國續風土記)

三三二 詩文の評品 室 鳩 巢

他日繼いで諸客來會せしが、各疑問事訖つて、詩文の談に及ぶ。いづれも翁に向うて、詩文は學文の餘事なれば、急務には候はねど、是も藝に遊ぶの類とや申すべき。されば翁の詩文の論を承り度候といへば、翁まづ詩の事を論じて、詩は三百篇はとかう議するに及ばず。漢魏以後の詩も、文理悠暢、意思淵永にして、風雅の趣を失はざりし

なり。蕭統が文選に載する古詩十九首、もろ／＼樂府歌行の詩よみて知るべし。然るに六朝に至りて、綺靡を競ひ、浮華を勤めしかば、風雅の體は亡びにたり。唐興りて李杜王猛が徒出で、六朝の餘習を一洗し、大に古風を振興せしより。今に至りて詩を手習ふ人は、唐詩を學びざるはなし。盛唐の詩は、古を去る事遠しといへど、風景を寫し人情を述ぶるに、なほ風雅の殘膏剩馥ありて、おのづから人心を感ずるの妙あれば、學者の性情を吟詠するには、唐詩も捨て難きものに侍り。宋の司馬溫公、杜甫が、國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心といふ詩を論じて、古人の詩は意在言外を貴ぶ。山河在といへば、餘物無き事知るべし。草木深しといへば、人無き事知るべし。花鳥は平時娛むべき物にして、それを見て泣き、聞きて悲めば、當時流離の情はすして知れたり。又明の王鏊が唐詩を論ずると、國風綠衣燕々、碩人黍離等の篇、いづれも言外無窮の感あり、後世たゞ唐人の詩のみ此意あり。溪水悠悠春自來といへば、友を懷ふをいはねども、懷友の意言外に溢る。潮打空城寂寞回といへば、興亡をいはねども、興亡の感言外に溢る。風人の體を得たりといひし此二

子の論、深く其理を得たりと覺え侍る。是にて唐詩の妙を知るべし。李白が大原早秋を賦して、霜威出_テ塞_{ナリ}早_ク、雲色渡_レ河_{ナリ}秋_{ナリ}、夢繞_レ邊城_{ナリ}月_{ナリ}、心飛_レ故國_{ナリ}樓_{ナリ}といへる、此類の詩は雄壯の氣をもて勝れたり。杜甫が江亭を賦して、水流_レ心不_レ競_ニ、雲在意俱_ニ遲_ニ、寂々春將_ニ晚_ニ、欣々物自_ニ私_ニといへる、此類の詩は、深遠の心をもて勝れたり。其外王維が日落_レ江湖_{ナリ}白_ク、潮來_レ天地_{ナリ}青_クといひ、杜甫が吳楚東南_ニ圻_ニ、乾坤日夜_ニ浮_ニといひ、孟浩然が微雲澹_レ河漢_{ナリ}、疎雨滴_レ梧桐_{ナリ}といひ、柳宗元が壁空_ニ殘_ニ月_ニ曙_ニ、門掩_レ候蟲_ニ秋_ニといふ、皆馴雅の詞をもて不群の思を發せり。誠に宋人のいはゆる難_レ狀_ニの景を寫して目前にあるが如く、不_レ盡_ニの意を含みて言外にあらはるとは、是等の作をやいふべき。其餘の詩も是に例して知るべし。杜甫が秋興の八首、王昌齡が宮詞の諸篇は、其體はかはりたれども、各其能を_レ縱_ニにして、ことに傑然たるものならんか。然るに中唐より晚唐に至りて、章蘇州、柳儀曹が外は、昌黎が文章古今に卓絶すといへども、其詩風雅には少し遠かりき。まいて孟郊賈島が寒瘦、元稹が輕浮、白居易が淺俗、李商隱が僻澁、温庭筠が媚艶、いづれも詩の厄といふべし。其作たまく盛唐に出入するものあれども、其大

概を論ずるに、意趣鄙しく品格下りて、見るに足らず。其餘の作者も大かた聲律に拘はり、窩臼に落ちて、詩は性情を吟詠すといふ事を知らざるなるべし。鄭谷が雪を賦して、江上晚來_レ堪_レ盡_ニ處_ニ、漁人披_レ得_ニ一_ニ簑_ニ歸_ニと作れるを東坡が評して、是は村學中の詩なりとて、柳子厚が作りし、千山鳥飛_レ絕_ニ、萬運人蹤_レ滅_ニ、孤舟蓑笠_レ翁_ニ、獨釣寒江_ニ雪_ニといふ詩を引きて、別格の事といへり。鄭谷が詩は、巧にして俗耳には諧ふべけれども子厚が詩をもて見れば、その鄙俗あらはれて掩ふべからず。東坡が眼力の高きを知るべし。それにつきて思ふに、細雨濕_レ衣_ニ看_レ不_レ見_ニ、閑花落_レ地_ニ聽_レ無_レ聲_ニといへるは、塵綸が詩なり。人口に膾炙して佳句となん稱し侍れど、よくいひおふせたるばかりにて、吟詠するに餘味なし。宋の僧志南が露_レ衣_ニ欲_レ濕_レ杏_ニ花_ニ雨_ニ、吹_レ面_ニ不_レ寒_ニ楊_ニ柳_ニ風_ニといへるは清麗閑暇、咀嚼して味あり。盧が詩にはまさりぬべし。されば志南が詩を朱文公の稱し給ひしを實にさる事と思ひしが、其後擊壤集を讀みて、梧桐月向_ニ懷_ニ中_ニ照_ニ、楊柳風來_ニ三_ニ面_ニ上_ニ吹_ニといへるを見るに、又一等從容の氣象ありて、有道の言とこそ覺え侍れ。誠に風流人豪と申すべし。此三人の作、句調景趣ともに相似て、おのづから三段に聞

え侍る。盧は辭を主とし、志南、康節は情を主として、情に高下あり。是にて知り給へ、詩は辭に拘はれば、理屈に落ちて味なく、情に發すれば意思を含みて味あり。しかいへばとて、初學の人辭の雅俗を知らずして、にはかに情の沙汰には及び難し。今世好みて詩を賦する人を見るに、多くは日頃唐詩をくはしく讀ますして、たゞ主意を先だて、己が俗腸より直ちにいひ出す程に、巧なるは談諧を聞くに似たり。拙きは禪録を讀むに似たり。又世に一種偏曲無實の人あり。なにの主意も無く、樂府古詩の辭を剽掠して高古に倣り、己が家流の外一代に詩なしとおもへり。然れども其詩を讀むに、猥碎流麗一向に文理をなさず、浮萍の如く斷綆の如し。文字の怪といふべし。然るに其黨の人は相師祖して是を文雅風流とし、あまつさへ聖人の道は文雅風流なる物といひしよしを聞き侍る。文雅風流はよしそれにもせよ、道は文雅風流なる物といへるはいかなるいはれにかあらん。さいつ頃人ありて翁にかくと告げける程に、さては道は仁義にはあらずして、詩歌管絃にあるよな、しからは孔孟よりは世の騷客伶人こそ道に近かりけめ。今まで知らざりしは、いと口惜しかりける事よといひしが、是

は翁が戯なり。もとより詩文を好み、華飾を事とするは道に益なきといふばかりにてもなく、人の心術を害するなれば、學者の專につとむべき事には侍らす。但一向に詩歌をたちて風雅の趣を知らざらんは、質勝ちて野なる方とや申し侍らん。(駿臺雜話)

三四 惜むべしとおもふ事 雨 森 芳 洲

いかほどもある中に、脾胃つよく、骨節たしかに生れつきたる人、よく養ひなば百年も難きにはあるまじきに、酒色をほしいまゝにして、天死するぞ惜き。生れつき思なれば、吾人の如く頭の雪の極むを限り、安き心なく、暑を惜みても何のなす事もなく其名一郷をも出でがたし。世の賢き人は、物事^{はかゆ}涉き、駟馬に鞭打つやうなるに、徒事にのみ心を馳せ、遂には草木と共に同じく朽ちゆくぞ惜き。世の中に痛ましく悲しとおもふ事、貧しといふより外やあるべき。力なき者はいかほど思ひても、心に任せがたし。手前よろしき人は幾重にもこれを恵み、人の爲にのみおもひ、つとめて仁慈をおこなひなば、その風義子孫までも傳はり、めでたき家となるべきに、さは無くして

その身は人欲をもて貨集むる事のみ知りて、其子孫は人欲をもて貨すつる事のみ知りて、長者三代なしといへる言葉にひとしく、庫に積みたくはへたる物、終には奢のたすけとなり、失せ廢るこそ惜けれ。土地人民を保ち、君といはれさせ給ふ御方の、天地の開け始より、其數いか程とかぞふるほごにて、生きとし生けるものの、得がたき位に居給ふ御身なれば、よろしき御政ありて、その名記録にも傳はり、千世萬世の後までもあがめ尊ぶやうにこそありたきに、その御志あるは少く、空しく年月を送り給ふぞいとをしき。(たはれぐさ)

三五 足るを知る 中井 翫 菴

玉のうてなも膝を容るゝに過ぎず、錦の衣も風を防ぐの外用なし、魚の鳥のと數あるも、腹に滿つれば土の如し。かのやんことなく富み榮えたるきは、味を盡くして食へど、物窮まりて望み足らず。織物のめでたきを襲ねても、肌平常に寒きやうなり。みつ葉よつ葉につくりみがきても、住みなれ目なれて、清麗なりとも知らず、彼所に

うつり此方にわたり、いよく工みて、いよくこのむ。たとひこれを楽しし安しとおもふとも、火のおそれ頼にいたれば、物みな消ゆ。盜賊のうれへ來れば、寶あるひは失ふことあり。しかじたゞ求めやすく失ふにかたきものを樂しまむ。つら／＼天地の自然なる景色を見よ、山あり川あり、雨露雪風のけはひ、いづれかあはれとは見ぬ。清風明月一錢の買ふことを用ゐず、と唐人も言ひし。求むればこゝに至りて、長に失ふことなし。すべていへば一年にして、分かつては四つなり、よつがひとつに千歳のあはれをあらはして、近く見ればたゞ一日の朝夕にあり。(不問語)

三六 花 月 雪 石 原 正 明

花はさくら、櫻おほかる山に松など立ちまじりて、色どり分けたらんやうなるが、一しほ見どころあり。友だち四五人ばかり、一とせ嵐山の花見に行きし事あり。今日ぞ盛りならむとおぼゆるほどにて、かつ散るもあるに、渡月橋のこなたを川添に水上の方へ行く。風のさと吹きあるゝに、雪かとはかり亂るゝ花の、となせの瀧の岩なみに

やがてまがひ行くなど、いひしらすをかし。中野三郎といへる人、川中の大きやかなる巖に腰うちかけて、笛高やかに吹きならしたるが、水音にひゞきあひてをかしきにかたへにありつる法師「春おもしろく聞ゆるは」と打誦うたひしたりしこそ、折からをかしう覚えしか。此法師いづくの人なりけん、心にくきけしきなりつるを、物をだにいはでやがて行き別れつるは、くちをしき事なり。

月は水のほとり殊によろし。いと大きな川ののどやかに流るゝあなたの岸にまどろして、打笑ひなどしたる、から人の登りけん南の樓おもひ出でられて、誰ならんとゆかしきに、千里に明らかなりと詠するにやあらん、ほのく聞ゆるいとをかし。

雪は、いづくもくをかし。たゞ海のみすさまじげなり。それもみなと江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに、泊舟とまりぶね二ツ三ツ蓬よもぎいと白う見ゆるはをかし。市の中は何事も目とまる事なけれど、たゞ雪の朝こそめづらしうをかしけれ。すべて何處も雪はげしきことに、所かはりたる心地して珍らしうをかし。日のさしのぼるほど、皆起き出で、往來ゆきさがしきまで道あしうなりぬべし、いとあぢきなし、疾くはき集めよ。取捨

てよなど、いひ騒ぐこそかなしけれ。(年々隨筆)

三七 つかみさしの説

三浦梅園

花は生けるも投げ入るゝも、各その法ありとぞいふめる。されど片田舎なる人は知らず。知らずとて花のめでたからぬかは。軒に半垢つきたる花桶のかたくななるを、心ほそくも絲にかけて、花の多かるおほからぬは、童山賤の手に任せつゝ。捨てやらず取つくろはず、つかみさゝば、おのがまにく亂れあひて、仰ぐべきは垂れ、低ひかるべきは高く、思ふまゝならぬも、人の世になすらへてをかし。花の名残はさらなり、枝あぢきなく枯れ、葉哀におとろへぬるが、興深ければ、いつもさゝがにの蛛のすみかとなるまで、換へやらで舊きに新たなるをかさぬれば、餘所目さぞいふせからん。隣なる龜てふ童の、此ころ櫻惜氣なく折り來て、元てふ子にさゝせたるが、風にさそはれ、文のはし硯の面に散りかゝりて、人の心をなやませしも、いつか昨日の昔にてあとは若葉の僅なる水を命とも知らず、緑をそへ、花蕊しよく艶つやにのこれり。行く春のかた

みと思へばいかで捨てやは遣るべき。蝶や蜂の來なれて、尋ねまよふも心くるしく、椿、胡蝶花様のもの折りそへぬれば、かれも所得顔に遊びたはむれつゝ、萬物靜に觀れば皆自得といふ事など思ひ出で、口すさみけり。かの枝をわがね葉をすかし、花ぶさをつみ、色うつろへば、やがて情なく掻いやり捨つるを口惜しとは、我一人して思ふ事にや。(梅園拾葉)

三八 御嶽山

柳澤淇園

武野古戦記に云ふ。武を崇め嶽の高きに藏して、神威を承平の和にしめし、文を黍民の際にやはらげ、徳を國家の仁政にしきぬる、むさしの國御嶽の山は、叔倉子義を達へぬ標有梅の青梅の里まで、江戸を去ること十有三里にして、行程に山河橋渡なし。青梅の村中の金剛精舎に古樹の梅あり、四時實を結び熟すれども緑のいろをかへざるが故に青梅の名あり。連山西北を遠りてさながら絶壁に似たり。閩巷を過ぐることに十町ばかり、貉澤を下れば溪路斜にして棧あり。村落に流を入れたり。日向の和田とい

ふ、朝日に向ふ名なるべし。一顧すれば多摩川の流をへだてて山々水にそばたち、石にむせぶ流れの音、谷にひびきて人のあらしひ渡るが如し。山河すべて縈糾して數里の間に屈曲し、峯にかくれ谷にあらはれ、さらす調布さら／＼に」と詠じたる昔の歌の姿なり。山聳えては、頂きに露臺のあとを止め、岸崩れては石に楯澤の名を殘し、往古に戦場の樞要たるも、陰鬱たる叢澤となりて、僅に山がつの樵路をわかち、露深くして草舊壘の礎を埋め、月さびしうして尾花白刃のひかりをまじへ、旌旗風にひるがへりて、松に白鷺を宿し、翠桃枝をたれて丘に弓弦の糸を斷ち、利鏃いたづらに田園にくじけ、寶刀むなしく壤の中にうづめり。花鳥に時を感ずれば歌舞の榮華もまのあたりにして、月にむかしをしる時は、錦繡にほこれる盛衰も紅葉の色うつろふに見えたり。殺氣長く昇平の日影に消えて、戦塵に似し雲も無く、人家軒をならべて路に竈のにぎはひをつらね、ゆくかた／＼に踏分けし數多の道も街となり、ありといふなる迹水も、俊成卿の比興とはなりぬ。(雲萍雜志)

三九 雨の徳

松平定信

月の夜半こそ思ふくまもなく、心の底もすみわたりぬるものなれ。されど闇の夜の空はれて、星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、又まさりぬるやうに覺ゆるといへば、雨ぞいと勝りぬるをといふ。いかにと問へば、いでや旱天ひてりの雨はさらなり。草木の花咲きみのるも、皆この恵にこそあんなれ。又その感情のふかさをいは、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春哉とぞ思ふめる。師走の晦日のどやかに降りたるも、春待ちがほにていとをかし。すべて春は雨こそどのかなれ、軒端より霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えす、軒の玉水も間遠に音して、住み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面のかれふの底に、緑や、そひ行くも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいとどのかなれ。燈火かゝげても何となく光しめりたるに、鐘の音のほかに響き來るも、心すみわたりぬるものぞかし。其外梅が香のしめり、夜ふかく匂ひわたるも、花にうしとか

こちぬるも、哀はありけり。春も老い行くころ、蛙の時得がほにすたくもをかし。杜宇の初音いかにおもふころ、村雨のはらくと降り出でたるも、五月雨の幾日も降りくらし、書の卷々くりかへしつゝ居たれば、何となく世中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹きおちたるに、柳蓮葉などの、葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠におちたるが、後にはしきりに降りきて、物音も聞えず、土の匂ひ來たるもいと心地よし。軒端は玉のすだれ懸けたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つみづらみとなりて、あるは瀧おとし、または水はしらせたるに、人々しばし物いはで、うちまもり居たるもをかし。や、雲うすくなれば、池の面にはかぞふる計り雨見えて、小鳥など庭へをどり出で、餌拾ふさまなり。はじめ雲の立出でし方は、はや空の一しほ縁に見え、虹など見ゆるに、木々の緑の庭際にはたみに影見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音におどろきて、はひ出でたるが、今日のは幼わかかりし時のごと、よく晴れにけり、今時のは新しく晴るゝこと稀なりなど、はや縁言くりごといふもあり。彼は

かくあわてしなどいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、今日は蚊もすくなかるべし、雷の音もいとかすかなり、此頃の暑さもわすれぬとて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のもの待ちがほに空うちならみてふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來るころの雨は、昨日にかはりて何となくさびし。萩のうは風、外山の鹿の音など、月よりも身にしむこゝちぞする。つねに聞きなれし算の水の音までも哀ふかくこそ。月の前の村雨も又をかし。まいてや、夜寒のころ、鳴きからしたる虫の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひ出でなん。栗もはや落つべしなどゝ、童のものさびしげに、燈火にむかひつゝ言ひ出づるも、げにさまゞなり。夜ふかき鐘の音の打ちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、待つ夜、別のおもひまでも思ひ出で、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつり行きてひとさかり見するも、尾花の露おもげに打萎れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つきゞし。朝顔のみな枯れたる

中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまでもしほみ遅れたる、又あはれなり。野分の風は、おどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれと、さすがに哀をそふるは、秋のならひなるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、また音がへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、哀ふかき物には侍らすやといへば、斯様に言ひならべては、げにもといふべからんが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨は一昨日より降りいでしをと、思ふ心はかはらじと、心の中に思ひて、聞き居しも又をかしかりけり。(花月草紙)

四〇 梅を請ひ得たる禮文 頼 山 陽

昨日は梅阿漕に御所望仕候處、望外の一枝大者被下、喜悚交至候。病牀の大娘不通過之候。今日は御來賁被下候事と奉存候。御夜食なしに御出被下度、彼餅を又々致方をかへ候て、たんと被上候程に可仕候。七頃より奉待候。拙詩先入御覽候。

依稀淡月有梅花 怕叩柴門疎影斜 先喜幽人猶未睡 風聲定處認琵琶

第二句一作、野水無聲疎影斜

第四句一作、隔花聞得曼琵琶

此外色々致候處有之、拜面に御談申上、尙々不足取詩にても差上候。詩はよくいたし度候。

二月十六日

裏

梅竹主人

左 右

(有朋堂文庫、新撰書翰集に據る)

四一 「長町女腹切」の一節 近松門左衛門

駕籠よ〜と呼はれども、無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて、小錢無ければ草鞋も、二足を小判一兩で、買うて穿く身を哀なり。

幾夜〜の憂勤、七枚起請ぞら誓文、日本國の神さんを欺した罪か欺された、人の恨のねだみさ、遂に我身の下り舟、乗後れたる淀堤、淀の河水行末は、如何なる罪に

大坂の、道が何處やら何里やら。身は初鴈よ初霜に、寝亂れ姿忍ばしと、前垂とつて丸ぐけの、襷をじみな抱帯、しやんと結んで引締て、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅。是も何故男山、作りし罪は山崎の、麓はあれよ哀げに、いつか都へ歸る山。春は梢に色々の、花咲く山にと山巡り。隣は青し夏山の、かしは散るてふ卯の花や。山時鳥山あひの、景色の花に顔つくる、笠を傾け山巡り。秋はさやけき月影の至らぬ山は無れども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山巡り。さて又冬は遠山の、寒もてくる雲の脚、賢き雁は南向、北を後に山を越す。山又山や峰白し。雪を誘うて山巡り。巡り〜て山姫の、山衆交りの淨瑠璃も、夕べ限りの口癖や。今日は妾を町風にやつすとすれど隠れなき、帯のひらかた近くなる。松原過ぎて河邊を見ればあれ〜五つ計の子を真中に、乗合舟の女夫連、思ひ無き身の高笑ひ。餘所のつまごと美し。流れ渡りの情である、網の目にさへ戀風が溜る。おぎの〜上風身に染々と、切て一夜は虚なしに、ほんの女夫といつ世に、いはれつ云はん情なやと、抱きしめたるそぎ袖も、涙にひたす計なり。間夫で逢ふたも一昔。それ覺へてか一昨

年の、十七日の朧月、宵の我酒にほの／＼と、二人火燧のじやくらを、憎や鴉に起されて、飽ぬ別の朝より、日文ちぶみの付届け、いよしごけんと書いたるは、ほだしの種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方様まゐる花よりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの酒盃色見へて、わきていづみの思はくは、只逢まして／＼、又の御見をまつかしく、其言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥川、流れの里は遙々と、跡に長柄の夕あらし、髪のおくれのはら／＼／＼、共に亂るゝ我心、曇ある身は恐しの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意身は釋迦に京橋の、此方の森を隠家と、暫く疲れを晴しける。

急ぐとすれど秋の日の、短きあしの難波濁。京橋より暮れかゝり、問へど隠れも長町の、伯母の家作常々の、咄に大方かぎ當てゝ、半「伽羅細工の甚五郎様は此方か」とくゞり明くれば、「ア、如何にも是が甚五郎。何方からぞ」と云ふ伯母の聲、半「イヤ京の半七下りました」と、お花諸共つゝと入る、魚「ヤア是は／＼珍らしい。文の来たは一昨日、間も無ふ何の用あつて、ヤ運も有るそふな、どなたじや是へ」とあいし

らふ。花「伯母様お久しうござんす、いつぞやお目にかゝつた花と申す者、御無事で目出度御座んす」と、腰打懸る二人の體、心得難くや思ひけん、魚「ハアようこそ」と計りにて、不思議そうにぞ見えにける。半七色を曉られじと、「お花事も奉公の年明和泉の親元へ歸る道、幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはそふ。詭への脇差、先様は侍衆、お氣に入つたか入らぬか、萬一お氣に入らぬで、甚五郎様や伯母様に、難儀の懸る事あらば、其難を私が身に受けふと存じ參つた。其次第が氣遣ひな、どうで御座る」と言ひければ、魚「ア、爰な人つがも無い、細工がお氣に入らぬとて、何の此方や其方に難儀が懸る物ぞいの、其上悦びや、一昨日下ると其儘、お屋敷へ持參めされしに、柄まはり縁頭鞆の、萬事殊の外御意に入り、甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者、後々はお屋敷の御用も仰付られ、出入させとの御念比。いよく細工に精出しや」と聞くより二人は手を合せ、半「エ、有難い忝ない、天道のお助け命拾ふたお花悦びや」花「嬉しう御座る胸の痞がすつと下つた」魚「ヲ、道理々々、武士を相手の商賣、大事に思ふ其冥加、今日又俄にお屋敷から、脇差について何やら急なる御用と

て、甚五郎殿を召に来て、晝過ぎから參られ、今に於いて歸られぬ。定めてお悦びに及渡しの御祝儀、お振舞が有るそうな。定めし酔うて戻られふ」と、云へば半七色違へ、「ム、脇差について急用とて又呼びに來ましたか。サアお花、京から道中云ふ通りかう有らうと思ひし事、我は是に待ちうけ、甚五郎殿に對面し、脇差の御祝儀身に引受て祝ひ、運に依つて今宵中にお屋敷へ、召出されうも知れぬ事、和女は此邊旅籠屋に一宿し、明日は早々親元へと、云ふ聲付も悄悄と、半七さうしては半七が一分は立たねども、ア、なんとせう暇乞じや」と、胸に手を組み俯向て、涙を隠す計りなり。お花も涙に聲慄ひ、「聞への事云ふて下んする。悦びも悲みも、二人が身に引受る約束じやないかいの、甚五郎様に逢ひまして、有無の事を聞く迄は、私や爰を動かぬ。伯母様も女子じやが、男の一世の大事の時、見捨られふかコレ半七様、むごい事云ふお人や」と、恨みかこちて泣きければ、二人の顔をつくく見て、伯「其方衆が云ふ事は、何の事やら此伯母は、すつきりと合點がいかぬ。此方の連合甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢し置きしに、それにお山を

同道して、初めて對面させられうか。一町北は皆宿屋。二人ながら早う往て、甚五郎殿に逢ひたくば、半七ばかり明日おじや。夫婦にも成果せ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此躰見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜い。此世話やむも大切さ。サア早々」と氣をせけば、半「お憐みの忝なさ涙が零れ有難し。然らば伯母御へ、一寸内證申す事あり」と、にじり寄れば、伯「マア待や。歸られうかと思ひあぶくする」と、庭におりて耳門の懸金をしやんと懸け、「サア何事ぞ氣遣し。語りや聞かふ」と云ふ所へ、甚五郎遽だしく門叩いて、「今日が暮れて門しめる。明けよく」と云ふ聲に、そりや情なや歸られた。如何せん。借屋の路次へも廻されず。押入には夜着蒲團、何所へ隠さんかやはかくる。帷子入れて夏過し、明長持に秋の鹿、つまもこがれて諸共に、押隠すこそ哀なれ。蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら、伯「ア、とろくと假寢の、寢耳にけはしい叩きやう」と、耳門明れば甚五郎、せきにせいたる顔色、血眼になつて駈上り、「ヤイ女房兵、甥のとのに掛つて、此甚五郎が身代破滅、命の大事になつて來た。此脇差折紙付正銘の信國を、今の世の廢り物下販

にすりかへ、銘を似せて突きつけた。先は武家方出入の門、盗人は女房の甥、此甚五郎が存せぬと云ふ言分ならず。京へ詮議に登つては欠落者と町内へ、付届にあふては人中で口きかれず。死ぬるより外文珠の智恵にも能はぬ」と、脇差からりと投出し、溜息ついたる計りなり。伯母ははつと胸塞り、扱は半七が身に覺ある詞のはし、思ひ當つて途方にくれ、暫し返答もせざりしが、半七元より覺悟の前。長持の蓋押明出でんとするを、睨み付け、脇差取りあげ、伯母なふ甚五郎殿、私は女子の物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は、大名高家智者學者も免れず。是は正しく半七めがわざなれども、半七がして半七はせぬ心。何を隠さん元彼の信國は、常々語りし我家に、三代迄は祟ると云ふ、性にふさはぬ脇差、一目でははと思ひしが、武士の上こそ及物の相性、町人職人に成果て、何の咎めの有るべき。親も無い一人の甥。是を つでに一國のお細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、悪根性が付きそめ、身の大事仕出したも、往廻つて三代目の手に觸れしその祟、知つて居ながら此伯母がをし事仕たる其咎め、因果とほかは思はれぬ。恥かしう御座る甚五

郎殿。男を養ふ女子も有る。二十年足らず連添うて何を男の爲もせず、身の難儀を懸ける事、恨にあらふ憎からふ。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿」と、夫の膝にどうと伏し、聲も惜まず歎きしは、理り過ぎて哀なり。甚五郎も男氣の、「夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存せぬといふて此甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理に依つて命を捨つるは男の役。氣遣するな首切れふが、牢へいらふが皆我科に引受け、半七に憂目は見せぬ」と、心は利發に逸れども、差當つて相手づく、思案にくれてぞ見えにける。女房は手を合せ、「ア、情の末とて忝ない、侍衆は斯様の事を皆御存じ、脇差の因縁を申し、伯母一人の科に落し、此方にも半七めも、罪を脱れ、下され」と、脇差取つてするりと抜き、「本のは信國、是は下阪。作は變れど焼及寸尺一對なれば、一家に祟るは同じ事、是故に父様が、人を打て其刀で、まづ此様に押肌脱ぎ、逆手に取つて左の脇、ぐつと立て」と云ふ詞、直に突き立て右へさつと引廻す。「是はいかに」と、甚五郎縄付は、半七夫婦飛んで出で、「伯母様狂氣か情ない。身に覺えある故に死に來た半七」と、脇差に取付を突除て、伯母イヤたわけ者、汝を殺す程

ならば、なんの伯母が長口上、自害もする物か。手の悪い事仕たれども、欠落して身も隠さず。伯母婚の難儀を思ひ身を捨て来た心。さすが筋目程あつて、せめても是はでかしたな。汝が父御は我兄様。最期の時に預りし甥なれど、着替一ツ帯一筋、何をやさしき事も無く、預りし甲斐も無かりしに、大事に替る命、其方には遣らぬ。皆兄様への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば科は一人に極まつて、脇差は上り物、外に御詮議は残るまい。及物の祟りも三代済む。行末目出度出世して、親祖父の名字を継ぎや。サア早う行きや」と、深手に息も切れ／＼の、血汐に落る涙の躰。花は「わつ」と咽せ返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同前、磔にかゝるとて、一寸も退きませぬ」と、取付ば甚五郎「エ、不合點な。其方が爰に狼狽て、伯母に犬死さするか」と二人を取つて突出し、懸金櫃しつととおろせば「なふそんなら退きませふ。ま一度逢せて下され」と、夫婦は門に打凭れ、聲を揚げてぞ泣き居たる。伯母は苦しむ息づかひ、「ナフ甚五郎殿。人立のない前に早う死にたい。止目はどこじや」と悶ゆれば涙ながら甚五郎「女なれども武士の切腹。止目とは勿體なし。介錯せん」と立寄れば

伯「いや／＼人の切つたと我切たは、疵改めに顯れて、此方の言譯むづかしい。急所を教へて下され」と、男勝りの自害の體。夫はいよ／＼心くれ「爰を／＼」と我が喉笛を、指せば頷き振り上る、手も弱りはつたと落て太股に突立る。又振り上ぐれば突き外し、肩先がばと突き込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顔色、夫は悲しむ南無阿彌陀、南無阿彌陀佛の聲を力に、喉のくさりを一刀、うんと計り目もくれなゐの薄もみち、夜明の嵐に散失せし、果敢なき最期ぞ是非なけれ。

四二 「博多小女郎浪枕」の一節 同前

市たて、屋財家財の類賣、捨賣に相場なし、戸棚箆筒塗長持、燭臺椀家具吸物椀、俎板佛壇、何や狩野の三幅對、表具計も百貫に、編笠提灯南京の、八匁から九匁を、鏝に見込の中脇指、鍋も釜も煤り鑪子も疊も上げてあら道具、簀の子の竹の小間道具、有りとある物塵も灰も、猫も直打ににやん夕、五分と飛んでほと／＼ぎす、守本尊懸硯鐵漿壺も罷出で、かねに成れとや口々に、付て糶る／＼糶市に、町内騒ぎ 三重やかま

し、家主菱屋嘉右衛門、興覺顔にて駈來り、「是はく、狼籍千萬何事じや。此家は我等が貸し家。王は小町屋惣七といふ西國商人、夫婦連で十日計の逗留で大阪へ下る。跡にはあの婆々たつた一人、留守の事はお家主頼みますといひ置き、今日か明日は戻られう。お姥もお姥、留守居とは何の爲。これ親仁、先づわごりよは誰なれば、能い年をして京の町の作法知らぬか。町所へも斷りなく、人の留守に踏込み、疊まで賣拂ひ、捌はなんとする事。此心清町一町のたばねをする年寄則ち家主、うつかりと見ていよか。姥も一所に詮議する。隣が町の會所、サアく歩びやと喚けども、姥は涙に顔傾け、親惣左衛門手を束ね、お家主と申お年寄、御尤々々、我等は惣七めが爺、小町屋惣左衛門と申て生國は長崎、廿ヶ年此の方上方居住致せ共、資本なければ商賣もはかどらず。山科邊に逼塞致し、古郷方に惣七めが西國通ひ致せ共、仕合したとの便りもなく、如何か斯うかと思ひ暮す折節、端々人の取沙汰、小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾城請出し、心清町に檜木作、節なしの見世を張り、風躰は無人の暮でも、内證の榮耀は千貫目持と噂する程心得難く、夜前始めて尋參り、沙汰に違

はぬ内の諸道具、代物に吃驚いたし、姥めに向ふても委しき様子は知らぬと申、各も商人、我等も七十八まで商で食た者。胴返しの利なれば逆、儲けるには法圖がある。僅十兩十五兩儲けてさへ、吹聴して悦ばせた正直孝行な惣七め、一人の親に隠すからは、碌な銀とは存せぬ。後に募つてお町内、お家主へも難義をかけ、其身も人並の死をせぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申事。骨身に沁みて思ひ知らせ、憂きしは踏んで正道の、商に取付く心付けん爲、俄に道具屋へ走るやら、古金買を呼ぶやら、心急いでお町内へ無禮。お家主へ付届申さぬは、眞平々々。幾重にもお佗言。貸屋札出して下されませ。お家は明けますくばかりにて、下るはきんか頭なり。喜御親父の云分承り届けた。去りながら、惣七殿には口合家請も有仁。後日の念に御親父の一札、留守居の姥も判を取る。サア會所へ同道、いざ御座れと、門の戸はたと引立て、天の岩戸にあらね共、此處にも紙の貸屋札、残らぬ千早古道具、明屋とこそ成にけれ。

博多小女郎は町風に、馴し夫の惣七が、あぶなき分限波の上、何百里共知らぬ火の、

心づくしを過ぎし身は、京大阪は隣にて、夫婦打連れ歸りしが、暖簾はづし大戸をしめて、墨黒に貸屋札、惣こりや如何じや。ハツ／＼といふより詞なく、くゞり戸押明入りたるに、湯水を飲まん鍋釜も、疊も舉げて閑古鳥、泣くにも泣れず興さめ果て口を明いたる計なり。惣七は足の裏の疵にこたゆる小笹原、簀の子にどうと座しければ、小女郎せいて、是申、緩りとして居さんす處で有るまい。念比にする家主殿、内儀さんと私共親しうて、先度下る時にも、土産に大阪の三好下駄頼むぞやおしやんした。それ程他事ない中で、譯の悪い仕方、わしや急度詰開かふと。走り出づるを、惣是々、女子のいふて濟まぬ事、貸屋といふは名計、破家を手前普請、根板も追付け張る筈で、板も買置く、屋賃といへば二ヶ月三ヶ月先へは遣れど滞らす。町義交際おろかも無き身、家財まで取られ、姥が行方も知れぬは、どうでも下の沙汰でなし。方々に預置きし金銀荷物に就いての事か。何れの道でも命有る中、一夜も此所では明されず。エ、是非に及ばぬ、惣七が運も是迄、こりや女子共、男共、見る通りの仕合力に叶はぬ。主従の縁も是限り。大阪の遣ひ餘り、一步細金少々有り、三人寄つて

て取れ。暇を遣る、さらば／＼、金更紗の財布共に投出せば下女共「お笑止共なん共、お辭儀申もお慮外、又の御縁と口上を、捻つて見れば手にさわる、一步小判も八九兩はつと寢耳に水臭き、半季一季の名残なく、連立表に出にけり。物音隣へ聞ゆれば、姥が會所を脱けて来て、なふおとましましや／＼、昨日の晩から親父様がお出なされ、中々でもない事、淺ましい慾心に海賊の仲間に入り、道に違ふた銀儲けを結構な事と思ひ居る。木の空に引張らるゝは今の事。菜大根肩に置いて、正道な儲けは三文でも身に付くと、云聞せた詞反古にして、なんで出来た屋財家財、是が我子の敵じやおいとしばや、涙片手に道具屋集め、二足三文に賣捨て、家もあけて其上に、隣の會所で町衆の前に畏り、何やら斷りいふたり、皆お前ゆるの御苦勞と涙ぐめば涙ぐみ、惣これ姥、懸硯に入置きし割符の手形、是があれば一大事、入物共に道具屋の手へ渡つたか、惣「いや／＼懸硯は賣れたれ共、其割符は残して親父様の鼻紙入に納めてじや。そんな事氣遣ひせず、早う町を退けましたい。ハア會所から呼びそうな、姥はもう往きます。命あらば御縁次第、お二人共に御無事やと、歸るぞ是も名残なる。茫然

として惣七、親父の耳へ入るからは、世上に知れたに極まつた。四日市には思寄る方も有る。伊勢路へ向けて遁るゝだけは遁れて見ん。もう七ツに下つた。サア用意といふ處に、惣七宿にか、早い門のさし様と、くゞり戸を開けて突と入るは毛剃九右衛門惣七狼狽へ、や珍らしい、何と申うて先々是へと、煙草盆持て來い、茶持て來いよといふ程、九右衛門胡散顔、黙りやく惣七、大阪で逢ふたは四五日前、追付上る、京で逢ふといひ合せ、こりや宿替と見へた。何とした仕だらで何方へ立退やる。氣遣ひなりといひければ、惣「イヤ、氣遣な事でない。たつた今上つてまだ洗足もつかはず。老躰の親別住居も異なるものと一所に窄む談合で、諸道具を引くやら、取込んだ最中。旅宿は何處ぞ、其の内此方から便宜せう、休んで行きやと出でんとす。九「待ちや々々々。ハテきよろゝと女夫ながら飲込まぬ素振、是やがて商賣時分、此方も明日國へ下る。仲間中から預けた島の割符受取に來た。其割符を渡して行きや、惣「ヲ、如何にも、其割符は大事に懸け、箱に入れ、封を付け、親父に預けた。追付是から持せて遣らふと、いふより九右衛門色を變へ、三千里を股にかける此仲間、命代への割

符を親父に預けたとは何處へ、味い事いふなく、仲間を脱けて一人儲けしやうでな音沙汰なしの俄宿替へと、調度算盤が合うた。此割符は其肌にかけて居る知れた事。受取て見せうと、大戸、潜の懸金くるゝ控と占めて申し上れば、小女郎慌て、これ九右衛門様、魚と水のお仲間、なんの嘘が御座んしよ。此割符は二三日由、私が屹度渡しましよ。先歸つて下さんせと、押出す腕むづと取り、エ、面倒なと簀子にどうと投付ける。惣「卑怯な、女を痛めず共、いふ事は身にいへと、脇差に手を懸ければ、九「ヤ反を打て威しても、割符を取らずに置ふかと、すばと抜けば惣七も、飛退去て抜合せ、兩方腕は狂はね共、縄目も弱き古簀子、まばら朽たるしのべ竹、踏込む足を踏みとめて、右へ拂へば左へかぶり、左を切れば右を踏込み、打合ふ切先春の日に、解け行く氷踏む如く、小女郎は中に身を捨る、掃溜の鍬箒、持て開いて相手の刃物、打落さんと立廻る。裙を簀の子にしがらみて、かつばと轉ぶ頭の上、閃く刃ぞ、三重危ふけれ。あたり隣に聞付けても、恐れて態と知らぬ顔。堪り兼て惣七左衛門、何をいふも子の可愛さ。割符を渡す怪我すなと、表へ廻る門の戸を、押せど叩けど明くにこそ

櫃の穴から覗いては、ハア、／＼悲しやあふなやと、もがいて裏へ駆廻る。内には小女郎、障子を外し中の楯、相手の刃物を押へんと、前に塞り後に開き、隙間を見ては打付る。足踏みためず、障子を我身に負ひながら、どうと伏せば九右衛門、透さず懸る片足をがはと踏込み、小女郎が上に重り伏し、障子越に突んとす。突いたらおのれ一打と、上にきらめく惣七や切先、危き中の危さなり。親はあこがれ隣の壁、打毀ち／＼手の出る程に壁下地引破り、割符を出し閃かす。親の手つきの物云ふばかり、惣七きつと見付け、ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す云分あるまい。此方もさす、サアさせと、鞘に納めて眼前に、助かる命も親の慈悲、と手共に取て押戴き／＼、惣七は是々慥に受取れと、渡せばとつくと見届け、九ム、別條ない受取た。是惣七、互に命がけの身過ぎ、魂を磨く仲間の法、切結んだ刃の下から睦まじくなるも魂、遺恨は残らぬ。氣苦勞の有る顔色じや。山が崩れかゝつても、狼狽へぬ心持たねば此商賣はならぬ事。いつもの時分に又下りや。國で逢ふと暇請ひ、出て行くこそ膽太けれ。

四三 行末の寶船

井原西鶴

人間ほど物の危き事をかまはぬもの無し。信濃國諏訪の湖に、毎年氷の橋懸つて狐の渡初めて、其後は人馬ともに自由に通をする事ぞかし、春また狐の渡り歸ると、其のまゝ氷解けて往來を止めけるに、此の里の亂暴者、根引の勘内といふ馬士、廻れば遠しと、人の留むるにもかまはず、我が心一つに渡りけるに、真中過ぎほごになりて、俄に風暖に吹き、跡先より氷消えて、浪の下にぞ沈みける。此事かくれも無く哀とまうし果てぬ。同年の七月七日の暮に、星を祭るとて、梶の葉に歌を書きて湖に流し遊ぶ時、沖の方より、光り輝く船に、見馴ぬ人あまたとり乗りける。其中に勘内高き玉座に居て、其の由々しき昔に引替へ、皆々見違へける。船より心静にあがり、前に使はれし親方の許に行けば、何れも驚き様子聞くに、某た、今は龍の中宮に流れ行きて大王の買物使者になりて金銀我が隨に仕ると、金錢二貫くれける。さて此許より米も安し、烏魚は手捕にする、女房は撰りとり、旅芝居の若衆も来る、時花唄のやろか信

濃の雪國をうたひ明かして、寒いとも空腹いとも知らず、正月も盆も此所と少しも違
 うた事無し。十四日から燈籠も出して、此所と替つた事は借銭乞といふものを知らぬ
 と申す。此の七月は我始めての盆なれば、ひとしほ馳走のために、國中の色よき娘、
 十四より二十五まで未だ男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それはく又ある
 まじき事なり、其の用意の買物に参つたと申す。召連れし者ども、何とやら磯臭く、
 頭魚の尾なるもあり、螺のやうなるもあり、よろづの買物を持たせ出で行く時、彼の
 國のいたづらを皆々見せましたい事じやといふ。それはなる事かと言へば、某の隨意
 なり、十日ばかりの隙入にして御越あれ、白銀と錢を船に一ばい積みて参らせんと申
 せば、我は平時の好誼、他人よりは懇にしたと、行く事を争ひける。親方をはじめ、
 其の中にて七人伴ひける。取殘されし人これを歎きしに、耳にも聞入れず、件の玉船
 に乗りさまに、一人分別して、命に替へるほどの用のありとて行かず。さらばく、
 頓てといふ間も無く船は波間に沈み、それより十年餘りも過ぎ行けど、音信も無く、
 跡を見にと、唄にばかり唄うて果てぬ。此の六人の後家の歎き、又一人行かぬ人も、

今に命の長く、目安書して世を渡りけるとなり。(諸國咄)

四四 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべ
 し。麓に細き流れを渡りて、翠微に登ること、三曲二百歩にして、八幡宮立せ給ふ。
 神體は彌陀の尊像とかや、唯一の家には、甚だ忌むなる事を兩部光をやはらげ、利益
 の塵を同うしたまふも又尊とし。日頃は人の詣でざりければ、いと神さび、ものし
 づかなる傍に、住み捨てし草の戸あり、よもぎ根笹軒をかこみ、屋根もり壁落ちて、
 狐狸ふしどを得たり。幻住菴といふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父
 になん侍りしを、今は八年ばかり、むかしに成りて、まさに幻住老人の名をのみ殘せ
 り。予また市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑虫の蓑を失な
 ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高砂子あゆみ苦しき、北海の
 荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波にたゞよひ。鴉の浮巢の流れとゞまるべき、蘆